

F83-Tu5-3ウ



1200500765437

1877-1878

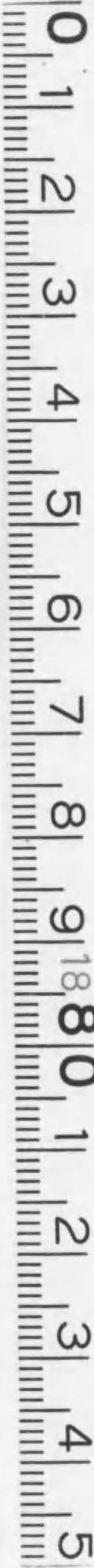
獵人日記

下

ツルゲーネフ作  
中山省三郎譯

岩波書店

53  
5



始



F 83

Tu5-3

(3)



中山省三郎譯



岩波書店

目次

あひびき ..... 七

シチーグロフ郡のハムレット ..... 二四

チエルトプハーノフとネドピユースキン ..... 七二

チエルトプハーノフの最後 ..... 一〇六

生神様 ..... 一七二

音がする ..... 二〇一

エピソード——森と曠野 ..... 二三〇

註 ..... 二四三

解説 ..... 二四七



獵人日記下



あひびき

秋は白樺の林に坐つてゐた。朝早くから小雨が降つて、その合間合間に  
 朝早くから小雨が降つて、その合間合間に、はつきりしない空合ひであつた。頼りない白雲  
 が空を一面に蔽ふかと思へば、また忽ちに、ところどころ、ちよつと、雲ぎれがして、押し分けら  
 れた雲の間から、陽光が切つた、なつかしい蒼空が美はしい眸のやうに現はれる。私は坐つて、あ  
 らゆるやうに耳を凝ましてゐた。つい頭のうへで樹の葉が微かにそよいでゐたが、それを聞いて  
 た。このそよぎは面白さうに笑ひさざめく春の慄へごゑでもなければ、  
 夏の物やはらかな囁き、長々しい話しごゑでもなく、秋も更けた頃のおどおどした薄寒さうな眩  
 きでもなく、やうやく聞きとれるか聞きとれないほどの睡さうなそぞろ言の聲であつた。そよ風  
 がそこはかとなく梢を吹いて通る。雨に濡れた林の中の様子は、照ると曇るとで間断なく變つて  
 ゐた。ある時は、そこにあるほどの物が急に微笑んだかと思はれる程すつかり照り映えて、疎ら  
 に立つてゐる白樺の細い幹が、俄かに白絹のやうな、やさしい反射をうけ、そこらに散らばつた

樹の葉が、急に斑らに金色に光る。高く鬱葱と繁つた蕨の美しい莖は、熟れ過ぎた葡萄のやうな秋の色に早くも染められて、はてしもなく纏れたり絡んだりして眼の前に透いて見える。かと思ふと、またあたり一面が薄青くなつて来る。耀かしい色は、瞬くうちに消え失せて、白樺は光澤もなく、ただ白々と、まるでまだ冬の陽のちらちらと冷たい光りを受けぬ降りたての雪のやうに白々と立つてゐる。やがて驟雨がこつそりと、音のせぬやうに落ちて来て森に囁く。白樺の葉は著しく色は褪せてゐても、まだ殆んど青々しかつたが、ただそこいらに、若い葉のすつかり赤いや金色のが見うけられて、明かるい雨に洗はれたばかりの細枝のこまかな網をちらちらと、ぬめるやうに洩れて來るとき、日ざしに眩しいほど光り出すのは見ものであつた。一羽の鳥のこゝも聞こえぬ。みなどどこかに隠れて静まり返つてゐる。ただ折々、人を嘲るやうな四十雀の聲のみが鋼鐵の鈴のやうに響きわたる。私はこの白樺の林に來る前に、高い白楊の林を犬をつれて通つた。私は、正直にいふと、あの白楊といふ白ちやけた薄むらさきの幹に灰色がかつた緑いろの、金屬性のやうな葉をできるだけ高くあげて、扇をふるはせるやうに、空にひらひらさせてゐる樹をあまり好かない。長い葉柄に不器用に吊りさげたやうな圓い小ぎたない葉を絶えず振つてゐるのなども好きではない。観ていいのは、低い叢の中に高く聳えて、赤らむ落日の光りを浴び、根もとから梢まで同じ黄色がかつた韓紅かんこうに染まりながら、かがやき慄へるといつたやうな夏の夕べか、

さもなくば風のある澄み渡つた日に、ざわざわと風になびき、風に語り、一つ一つの葉が揉まれて、ちぎれて遠くの方へまつしぐらに飛んで行きたいとでもいつたやうに見える時である。けれども大體が好きではない。だからこそ、白楊の林には足をとどめず、白樺の林に辿りついて、地上わづかに離れたところに下枝が生え、従つて雨凌ぎにもならうといふ一もとの樹かげに好い場所をとつて、あたりの景色に見とれながら、獵をする人にだけ味のわかる、例の穩やかな、靜かな眠りに落ちたのである。

どのくらゐ眠つたか一寸わからないが、眼をあけて見ると、林の中には一ぱいに陽があたつてゐて、どちらを向いても、嬉しさうに戦ぐ樹の葉を透して、華やかな蒼空が覗かれ、まるで火花でも散らしたやうだ。雲は遊びほけてゐた風に吹き拂はれて、かくれてしまひ、空はからりと霽れて來た。空氣のなかには人の心を何となく引きしめ、殆んどいつものやうに雨あがりの靜かな澄みわたつた夜の前ぶれをするやうな、一種特別なばさばさした涼氣が感じられた。私は起き上つて、もう一度、運を試さうとしてゐた。すると不意にじつと坐つてゐる人影が目に入つた。よく見ると、若い百姓の娘であつた。二十歩ほどのところに、物思はしげに頸を垂れ、兩手を膝の上におとして坐つてゐる。半ば露はな片方の手には、しつかり結はへた野の花の小さな束をのせてゐたが、花束は呼吸をするたびに、だんだん滑つて蒼藍縞のスカートの上に落ちかかる。

きれいな、白い襦袢を、咽喉と手頸のところに鈕をかけ、短かい、柔らかな褶をとつて、胴體にまとはせ、襟元から胸にかけては大粒な黄いろい飾珠を二重に垂らしてゐる。娘はなかなかの器量よしであつた。濃くて光澤のある、きれいな灰色の髪を、丁寧に櫛をあてて、象牙のやうに白い額のあたりまでも下がつてゐる眞赤な幅の狭い緋の下から、半圓を描かせて、左右に分けてゐる。顔の上その部分は金色に焦けてゐるが、こんな日焦け工合は皮膚の薄いものでなければ見られないものであつた。伏目になつてゐたので眼は見られなかつたが、細く秀でた眉毛ははつきり見えた。睫毛はうるんでゐて、片方の頬にはいくらか蒼ざめた唇のわきへかけて、日に光つて涙の跡が見える。小さな頭はどこをとつて見ても愛らしかつた。少し大きく圓すぎる鼻までが眼ざはりにはならなかつた。何といつても、私の氣に入つたのは顔の表情であつた。まことに氣取つたところもなく、柔和で、さも悲しさうで、悲しいことに出遭つて、子供のやうに途方にくれたやうな様子が一ぱいに見える。誰かを待ち合はせてゐるに相違ない。林の中で何かが、かさこそと音を立てる。すると娘はちききに、頭をあげて、あたりを見まはした。眼の前の透きとほる樹蔭に大きく、明かるい、牝鹿のやうにおどおどとした眼が、さつと輝く。しばらくは微かな物音のした方へ、大きく見開いた眼をじつと据ゑて、聞き耳を立ててゐたが、やがて溜息をして、そつと頭をさげ、前よりは一そう低く俯向いて、ゆつくりと、花を選び分けにかかつた。臉は赤らみ、唇は

苦しさうに慄へて、濃い睫毛の下から又しても涙が流れて、頬に落ちては、きらきらと輝いた。かうして、小なり長い時が経つたが、可哀さうに、娘は身じろきさへもしなかつた、ただ時をり愁はしげに手を動かし、耳を傾けてゐた、絶えず耳を傾けてゐた。……また何か林の中でざわついた。娘は身ふるひした。ざわめきはやまずに、だんだんはつきりして来て、近づいて、遂には、しつかりした急ぎ足の音となる。娘は起き直つて、怖ぢ氣づいたかのやうに見える。わき目もふらずに見つめてはゐたが、おどおどとして、その眼はさも待ち遠しさうに輝いてゐる。繁みを透いて、忽ちに男の姿がちらつて来た。それを見ると忽ち顔を赧らめて、うれしさうに、さも仕合はせらしく、につこりして起ち上がらうとしたが、直きにまた萎れ返つて、色を失ひ、どぎまぎして、——男がちき傍へ来て立ちどまつたときに、やうやくおどおどと、殆んど拜むやうな眼で、やつて来た男の顔を見上げた。

私は好奇心に驅られて物かげから男を覗いた。正直にいふと、この男を見て、私は好い氣持はしなかつた。あらゆる様子から推して、これは若い、金持の旦那に使はれてゐる小生意氣な侍僕らしかつた。着物はいやに風流ぶつて、乙にだらしないところを見せてゐた。まづ青銅色の短かい外套を上まで鈕をかけて着てゐたが、これは恐らく主人のおさがりであらう。端の方を薄紫に染めた薔薇色のネクタイをして、金筋の入つた黒天鵝絨の縁なし帽子を目深にかぶつてゐる。

白い襦袢の角の圓い襟は容赦もなく耳を押しつけて、頬にめりこみ、糊で固めたカフスは手首を赤い曲つた指の先までかくしてゐるが、指には忘れな草を象どつた土耳其玉入りの金や銀の指環をいくつも穿めてゐる。桃色の、活々とした、人を人とも思はぬ顔は、氣をつけて私が今まで見た範圍では、大ていの男にはあきたらなく思はれる代りに、女どもには残念なことながら、あまりにも麗し、好かれるといつた類ひの顔であつた。幾分お粗末な御面相へ持つて来て、彼はわざと蔑むやうな、退屈さうな表情を浮かべようとしてゐるらしく、しよつ中、乳灰色の、それでなくしてさへも小さい眼を細くしたり、顔に皺を寄せたり、唇の端を引き下げたり、出もしない欠伸を無理にしたり、さもわざとらしげに、少しも、こせつかないやうな風をして、すさまじく燃れあがつてゐる赤ちやけた揉み上げを直して見たり、厚い上唇のうへの黄いろい鬚を引つ張つて見たり、——要するに、その氣取り工合といつたら見られたさまではない。待ち合はせてゐたあどけない百姓娘を見るとから、彼は氣取り出したのであつた。ゆつたりと、大股に女のところへ寄つて来て、立ちどまると、肩を一寸ゆすぶつて、兩手を外套の隠しに突つ込み、さつと氣のなささうな一瞥をくれて、そこへどつかと腰を下ろした。

「どうだい、」と彼はやはりどこか傍の方を見まもりながら、足をふり、欠伸をしながら口を切つた、「大分待つたかえ？」

娘は直ぐには返事が出来なかつた。

「ええ、大分、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、」やうやく聞きとれるくらゐの聲で娘はいふ。

「ふむ！（彼は帽子をとつて、殆んど肩のわきから生えてゐる濃い、ぎつしり縮らした髪を嚴めしさうに撫でて、仰々しくあたりを見まはし、やがてまた氣をつけて、大切な頭に帽子をかぶせた。）僕はすっかり忘れかけてゐた。おまけに、それ、この雨だもの！（彼はまた欠伸をした。）用は多いし、さうさう何から何まで眼をつけるわけにや行かないよ、それでもまだぐづぐづ言はれる。時に、僕たちは明日立つんだぜ……」

「明日？」と娘はいつて、驚きの眼を男に向ける。

「明日さ……さあ、さあ、さ、たのむぜ。」と娘が身ぶるひして、そつとうつ向いたのを見て、早口に、いらいらしながら後を引きとつた、「たのむから、アクリーナ、泣かないで。僕は泣かれるのには參るよ。（と圓い鼻に皺をよせて）泣くなら直ぐに歸るよ、……何て馬鹿だらう、泣きじやくるなんて！」

「そんなら、もう、泣きません、」とアクリーナは涙を無理に呑みながら、あわてていふ、「ぢや、明日お立ちになるのね？」と暫く黙つてゐた後で附け加へた、「いつまたお會ひできるのかし



ら、ヴィクトル・アレクサンドルイチ？」

「會へるさ、會へるとも。來年でなけりや、そのあとでも。且那樣はペテルブルグでお役人になりたい様子だ。」彼はあつさり、少し鼻にかかる聲で言葉を繼いだ、「ひよつとすると、外國へでも行くかも知れん。」

「ヴィクトル・アレクサンドルイチ、あなた、私のことなんか忘れておしまひになるでせう。」悲しさうにアクリーナがいふ。

「なあに、そんなことがどうして？ 忘れやしないよ。けどおまへも利口になつて、つまらんことなんか止しなよ、親父のいふことを聽いて……僕はけつして忘れやしないよ、けつして。」（彼は平然と背伸びをして、また欠伸をした。）

「忘れないで頂戴な、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、」と拜むやうな聲で彼女はつづける、「もう、あたし、ほかに頼る人はないと思ふの、みんな、あなたが居ればこそだと思ふの、……あなたはお父つあんのいふことを聽けつて仰つしやるのね、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、……とても、あたし、そんなことできないわ……」

「どうして？」（と彼は仰向けに寝ころんで、頭の下に両手をあてながら、まるで吐き出すやうな聲でいふ。）

「だつて、聽けるもんですか、ね、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、あんな風で……」娘は口を噤んでしまつた。ヴィクトルは時計の鋼鐵の鎖を弄んでゐた。

「おい、アクリーナ、おまへは馬鹿ぢやないんだから、」と遂にいひ出した、「つまらないことは言ふもんぢやないよ。僕はおまへのためを思つて言つてゐるんだ、いいかえ、わかつたかえ？」

むろん、おまへだつて馬鹿ぢやないし、いはば、まるきりの百姓ぢやないんだ。おまへのお母親だつてやつぱりもとから百姓だつた譯でもないんだし。さうかといつて兎にも角にもおまへは教育がないんだから——だから他人が物をいつたら、はいはいと言つて聽くもんだよ。」

「だつて怖いんですもの、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。」

「ふむ、つまらないことを、まあ、何が怖いことがあるもんか！ そりや何だえ？」と娘の傍へ歩み寄つて附け加へる、「花？」

「ええ、」とアクリーナは氣が抜けたやうに答へる、「これは私が摘んで來た野原の地花菜（きんれいぐさ）なの。」といくらか元氣づいて續ける、「これを仔牛に食べさせると薬になるの。ほら、これは狼把草（たむらこ）、瘰癧の藥。ほら、御覽なさい、何てきれいな花でせう、こんなきれいな花、あたし、生まれて初めて見たわ。これは忘れな草で、こちらは香堇（にじふすまね）。……それから、これは貴方にあげようと思つて摘んで來ましたの。」と、黄いろい地花菜（きんれいぐさ）の下から細い草で括つた矢車菊（きんぎょ）の小束を取り出

して、付け加へる、「いかが?」

ヴィクトルは物臭さうに手を出して、花を受け取り、うはの空で香ひを嗅いで、思ひに沈んだやうに物々しい顔をして空を見あげながら、指さきで花束を廻しはじめた。アクリーナはじつと彼を眺めてゐた……。その悲しさうな眸には優しく身をも心をも男に任せて、恭しく跪ぶかうといふ氣持や愛情があふれてゐた。娘は男をおそれてゐたので、泣くのもこらへて、別れを告げたが、最後の時まで男に見とれてゐた。男は王様のやうに伸び伸びと寝そべつて、特別の思召によつて我慢をし、許して遣はすといふやうな顔附で、崇められるがままになつてゐた。私は正直にいふと、あの平氣な風を装つて、心の中では蔑んでゐる傍から、得々と己惚れてゐるところがありありと見える男の赤ら顔を見ると腹が立つた。アクリーナはこの時も美しかった。すつかり信じ切つて、ひたすらに、魂といふ魂を男の前にさらけ出し、ほれぼれと心を寄せて甘えてもゐたのに、男はといへば……男は草の上に矢車菊を落してしまつて、外套の横の隠しから青銅の縁の丸い片眼鏡をとり出して、眼にあてがひかかつた。ところが肩をしかめ、頬から、おまけに鼻までも持ち上げて、いくら支へようと骨を折つて見ても、眼鏡は相變らず外れて、掌に落ちてしまつた。

「それ、なあに?」と、しまひには呆れてアクリーナが訊ねる。

「眼鏡ロウルホックさ。」と容體ぶつて答へる。

「かけるとどうなの?」

「かけると一そうよく見えるんだ。」

「見せて頂戴な。」

ヴィクトルはちよつと遊い顔をしたが、それでも眼鏡を渡した。

「こはすなよ、氣をつけて。」

「大丈夫よ、こはしやしないわ。(娘は、怖る怖る眼鏡を眼のところへ持つて行つた。) あら、なんにも見えないわ。」とあどけなくいふ。

「そら、眼を細くするんだ。」と機嫌のわるい先生といふ口調で叱りつけた。「そつちの眼ぢやない、そつちぢやない、馬鹿な! こつちのだ!」とヴィクトルは叫んで、間違ひを改めさせもしないで、眼鏡を取り上げた。

アクリーナは顔を赧くして、そつと微笑みかけたが、わきを向いてしまつた。

「きつと、私たちが使ふもんぢやないんでせう。」

「あたりまへよ!」

可哀さうに娘は口を嚙んで、深い溜息をついた。

「あゝ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、あなたがいらつしやらなかつたら、あたし、どうなるでせうね！」と娘はだしぬけにいふ。

ヴィクトルは眼の裾で眼鏡を拭いて、再びポケットへ藏ひこんだ。

「さう、さう、」と暫くしてから言ひ出した、「そりや、初めのうちは辛いだらうよ、きつと。

(と、お情けに娘の肩を叩いた。すると、娘はそつと自分の肩にかけた男の手をとつて、おつおつと接吻した。) うむ、さう、さう、おまへは氣立がいい、」と得意さうに微笑みながら言葉をつづける、「けど、どうしやうもないぢやないか! 自分でもよく考へて見な! 僕も旦那も、ここにいつまで居られるもんぢやなし、もうぢき多が来るけど、田舎の冬と來たら、——お前も知つてる筈だけれど——全く厭らしいつたらありやしない。それから思ふと、ペテルブルグは違つたもんだ! あつちへ行けや、全く、とてもお前なんかは、夢にだつて見たこともないやうな素敵なものがうんとある。家だつて立派だし、通りもさうだし、附合ふ連中も、開け方も……:それこそ、大したもんだ!……(アクリーナは、子供のやうに口を少しあけて、一心になつて聴いてゐた。) 尤も、」と彼は地べたで寝かへりをうつて附け加へる、「こんなことをいくら言つて見たところで、お前には何の足しになるもんか! どうせ分かりつこはないんだから。」

「どうして又、ヴィクトル・アレクサンドルイチ? わたし分かつたわ、すつかり分かつた

わ。」

「ほほう、こりやえらい!」

アクリーナはうつ向いた。

「前にはそんな話しぶりはして下さらなかつたわ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。」と眼を上げずに娘はいふ。

「前に?……前にだつて!……とんでもない……、前になんて!……」と怒つてでもゐるかのやうに男が言ふ。

二人ともしばらく黙つてゐた。

「それはさうと、もう行かなくちやならん。」とヴィクトルはいつて、腕をついて起き上がりとした。

「もう少し待つて頂戴。」とアクリーナは哀願するやうな聲でいふ。

「待つて、どうする?……もう暇乞ひはしたぢやないか。」

「ちよつと待つて頂戴な。」

ヴィクトルは再び横になつて、口笛を吹き出した。アクリーナは矢張りじつと見つめてゐた。娘がだんだん興奮して行くのが、こちらにゐても認められる。唇は引きつり、蒼ざめた頬は微か

に紅らんで来た……。

「ヴィクトル・アレクサンドルイチ、」と娘はつひに、おろおろ聲で言ひ出した、「あなたはあんまりだわ……、あんまりだわ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ、ほんとに！」

「何があんまりだ？」男は眉を蹙めて訊ね、少し首をもたげて、女の方を振り向いた。

「あんまりだわ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。お別れだといふのに、何とか一言くらゐ優しい言葉をかけてくれたつていいぢやないの。何とか一言くらゐ、これから頼りにする人もないのに……」

「だつて、どう言へばいいんだ？」

「どう言へばつて、そんなこと知らないわ、そんなこと百も承知のくせに、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。もう遠くへいらつしやるつていふのに、たつた一言くらゐ……、あたし、何だつて、こんな目に遭ふのか知ら？」

「をかした奴だなあ！ 一體、どうすりやいいんだ？」

「何とか一言くらゐ……」

「えい、同じことばかり言つてる。」男は忌々しさうに言つて、起き上つた。

「怒らないで頂戴よ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。」と涙をやつと抑へながら、うろた

へていふ。

「怒りやしないよ、ただ、おまへが分からずやなだけさ……。一體、どうしてくれつて言ふんだ？ お前と僕は連れ添へないんぢやないか？ さうぢやないかえ？ さあ、それではどうしてくれろつていふんだ？ え？」彼は返事を待ちうけてゐるかのやうに顔を突き出して、掌をひろげた。

「あたし、何も……何も不足はないけど、」娘は口ごもつて、ふるふる手を怖る怖る男の方にさし伸べながら答へる、「でも、たつた一言でも、お別れに……」

涙が止めどもなく流れる。

「さあ、手はつけられん、泣き出しちやつた。」ヴィクトルは、帽子を目深に押し下げて、冷然といふ。

「あたし、何も不足はないけど、」娘は両手に顔を埋めて、啜り泣きしながら、なほも續ける、「これから先は家にゐてどんな目に逢ふんでせう、どんな目に逢ふんでせう？ そして、どうなるんでせう、どうなるんでせう、あたし？ 情ない人んとこへ無理にお嫁にやられるんだわ……、あたし、悲しい！」

「ほざくがいい、何とでもほざくがいい。」とヴィクトルはもちもちしながら、聲低く口ごもる。

「でも、たつた一言、一言くらゐは……『アクリーナよ』と、『自分は……』と。」  
 不意にむせかへつて泣き出したので、言葉がとぎれる。娘は草のうへにうつぶして、はげしく、はげしく泣き出した……。身體がぶるぶる慄へて、頭の後ろの方が、ひどく波をうつ……。こらへにこらへてゐた悲しみが遂に瀧なす涙となつて迸つたのだ。ヴィクトルは、じつとその様子を見おろしながら、一寸の間佇つてゐたが、やがて肩を竦めると、くるりと後ろを向いて大股に立ち去つてしまつた。

しばらく経つた。……娘はやうやく落ち着いて、顔をあげたが、急に跳び起きて、あたりを見まはし、手を拍つて驚いた。後を追つて駆け出さうとしたが、足はすくんで——娘はばつたり膝をついた……。もう私は見るに見かねて、まつしぐらに娘の方へ走り出した。が、娘は私の姿を見るや否や、どこをどうしてさういふ元氣が出たものか、微かに『あつ』といふなり起ちあがつて、樹かげにかくれてしまつた。あとには草花が地面に投げ散らされてゐた。

私は暫く佇つてゐたが、やがて矢車菊の花束を拾ひ上げて、林の中から野原に出た。陽は淡く澄んだ空低くかかつて、陽ざしも何だか淡く冷え冷えとして来た。かがやいてゐるのではなく、おしなべて、殆んど水のやうな光りにあふれてゐた。もう日が暮れるまでには半時はんじしかないが、夕焼の色は仄かに、仄かに見えるだけであつた。烈しい風が、黄いろく乾枯らびた刈株の上を渡

つて、まともに、すさまじく吹きつけて来る。小さな反りかへつた葉は風にあたふたと舞ひあがり、道に沿ひ、道を横切り、林のへりについて趨つてゆく。壁のやうに野に向いた林の片側は一樣にふるへて、眩しくはないが、はつきりと、わづかな光りにちらちらする。紅らみがかつた草にも、道芝の上にも、ちひさな葉にも、到るところに無数の秋の蜘蛛の糸が光つて、波をうつてゐる。私は立ちどまつた……。私は物悲しくなつて来た。寂れはてて行く自然の、冷たいけれども楽しさうな微笑みのかげから、間近い冬の物すごい恐怖が忍び込んで来たかのやうに思はれた。重々しく風を切つて翼をうちながら、小心な大鴉は私の頭の上を高く飛んで行つて、頭を振り向け、私を横目で見ると、急に一そう高く飛びあがつたが、やがて切れ切れに啼きながら、森のむかふへかくれてしまつた。幾羽とも知れぬ鳩の群れが、麥打場から勢ひよく飛んで来て、いきなり圓柱まるはしらのやうに圓を描いて舞ひあがり、そそくさと野面に散らばつた、——いかにも秋らしい！

誰かが草も木もない丘のむかふを通ると見えて、空馬車の音が高く聞こえる……。私は家に歸つた。けれど、あの可哀さうなアクリーナの佛は、長いあひだ念頭を去らなかつた。矢車菊は疾うの昔に凋れたが、今もなほ私の手許に藏つてある……。

## シチーグロフ郡のハムレット

いつぞや遠出をしたとき、私は物持の地主で遊獵家であるアレクサンドル・ミハイリチ・グナにがしのところへ食事に招かれた。彼の村はそのころ私のみた小村から五露里ばかり離れた所にあつた。私は燕尾服——これだけは外へ、たとひ獵に出かけるときでさへも必ず持つて行つたが宜いと、よく人に勧めるけれど——を着て、アレクサンドル・ミハイリチのところへ出かけて行つた。食事は六時に始まることになつてゐた。向ふへ着いたのは五時であつたが、既に制服や私服、その他、これといつて言ひ表はしにくいやうな服装をした貴族たちが實に夥しく集まつてゐた。主人は懇慫に私を迎へたが、直ぐにまた侍僕の部屋へ駆け込んだ。高官を彼は待ちうけてゐたので、彼くらゐの獨立した社會上の地位と富をもつた人には全く不似合ひな程それはしてゐた。アレクサンドル・ミハイリチはまだ結婚したこともなく、女を愛したこともなかつた。また彼のところへ集まる連中は獨身者ばかりであつた。彼は豪華な暮らしをし、先祖傳來の邸宅を更に取り擴げて、莊麗を加へ、年々、モスクワから取り寄せる酒だけでも一萬五千ルー

プリに達するといふくらゐで、人々からはおよそ絶大な尊敬をうけてゐた。アレクサンドル・ミハイリチは疾うの昔に職を退いて、一向に顯職に就かうなどとはしなかつた……。そんなら、何だつてわざわざ好き好んで高貴の方をお客に招待したり、嚴かな振舞の日に、朝起きる早々からそれはしてゐるのか？ といふことになる、それは私の知合ひの或る辯護士が、自發的に贈られる賄賂を取るかどうかと聞かれたとき、よくいつてゐた言葉をもつてすれば、『暗々裡』に葬られてゐるのである。

私は主人に別れてから、あちこちの部屋をぶらつき始めた。お客は殆んど全部が見知らぬ人ばかりであつた。二十人ばかりの人は、もう骨牌の卓子に着いてゐた。これらの骨牌の好きな人々の中には、貴公子風ではあるが、いくらか憔悴した顔をした軍人が二人と、狭く高いネクタイをつけて、果斷な、しかも保守的な人たちにしか見られないやうな、垂れさがつた染め鬘をした高官が幾人かゐた。(かういふ保守的な人たちは勿體ぶつて骨牌をとり、頭を振り向けもせず、近寄つて来る人たちを横目でちらと見る。) また小さな太鼓腹をして、ふくれた汗ばんだ手に、控へ目に足をじつと動かさずにゐる郡の役人も五人か六人ゐた。(これらの諸君は物やさしい聲で話をし、愛想よく四方八方へ微笑みかけ、襯衣の胸もとへ引き付けて札をもつてゐた。そして切り札を授げるときにも、卓子に叩きつけるやうなことはなく、それどころか、緑いろの卓子の

上に、しなやかに撒いて、勝札を集めるにも、極めてお品がよく、成るべくきつい音を立てないやうに氣をつけてゐた。そのほかの貴族たちは長椅子に腰をかけてゐたり、戸口や窓ぎはにかたまつてゐた。もう若くなく、見かけは女のやうな地主が一人、隅つこの方に立つて、誰一人として氣にとめる者もないのに、身を慄はし、顔を赧らめ、もぢもぢしながら、腹のところの時計の飾りの認印をいぢり廻してゐた。また別の紳士連は、親代々のモスクワの仕立屋で、フィリス・クリューヒンといふ名人が仕立てた圓味のある燕尾服に、碁縫縞のズボンを着いて、脂ぎつた禿げ頭を無遠慮に振り立てながら、極めて氣樂さうに、威勢のよい議論をしてゐた。足のさきから頭まで黒づくめで、かなり近視の、薄色の髪をした二十歳ばかりの青年は、たしかに怖ぢ氣づいてゐたが、一癖ありげな微笑みを洩らしてゐた……。

ところで、私がいくらか退屈しかけてゐたとき、不意に、ヴォイニツィンそれがしといふ、未だ大學を卒へてゐない若い男がやつて來た。何といつていいか一寸はつきりいへないが……とにかく一つの仕事をもつて、アレクサンドル・ミハイリチの家に暮らしてゐる男である。彼は射撃の名人で、犬を飼ひ馴らすことにも妙を得てゐた。私はモスクワにゐる時分から知つてゐた。彼は試験ごとに『あつけらかんの護當』をやつた。すなはち、教授の質問に一言も答へなかつた若い連中の一人であつた。かういふ諸君はまた、わざわざ音節の美しい言葉を用ひて、「バケンバ

ルヂスト」(辯書生)といふ名を頂戴に及んでゐた。(御承知のやうに、これはずつと昔の話である。)一寸その當時の模様を話して見よう。先づヴォイニツィンが呼ばれたとする。頭から足の先まで熱い汗でぐつしよりになつて、徐ろにあてもなく、あたりに眼を配りながら、身じろきもせず、しやんと自分の腰掛に坐つてゐたヴォイニツィンが立ちあがつて、そそくさと制服の釦を上まで掛け、試験官の卓子のところへ横歩きに、やつとのことと進み出る。『さあ、試験票を取りなさい。』と教授は朗らかにいふ。ヴォイニツィンは手をさし伸べて、ふるふる指さきで、重ねてある試験票に觸つて見る。『そんなに選つてはいけません。』と他の科の教授で、直接に關係はないのであるが、極めて怒りつばい老人が、この哀れな辯書生の様子を見て、急に憎らしくなつて、ふるへ聲でどなりつける。ヴォイニツィンは、今はこれまでと諦めて、一枚の試験票を取り、番號を見せ、窓のところへ行つて腰をおろす。その間に先の者が質問に答へてゐる。窓ぎはでヴォイニツィンは、依然として徐ろにあたりを見まはす以外は試験票から眼を少しも離さない。それに手一つ動かさないのである。やがて、先の者は済んで、成績に應じて、『宜しい、お歸んなさい。』とか、『よく出來ました、まことによく出來ました。』などと、丁寧な言葉さへも受けてゐる。今度はヴォイニツィンが呼ばれる。ヴォイニツィンは立ちあがつて、しつかりした足どりで、卓子に近づく。『問題を讀んで!』といはれる。ヴォイニツィンは両手で試験票を鼻

のさきまで差し上げ、ゆつくりと読んで、ゆつくりと手を下げる。「さあ、答へて。」と同じ教授が、ぐつと反りかへつて、腕を組んだまま、懶げにいふ。あたりは墓場のやうに、ひっそりする。「君はどうしたの？」ヴォイニツィンは黙つてゐる。介添の老人はいらいらし始める、「さあ、何とか言つて！」それでも我がヴォイツニンは気が遠くなつたかのやうに黙つてゐる。短かく刈つた後ろ頭はしつかりと、動きもせずに、仲間の物好きな目を惹いてゐる。介添の老人の眼は今にも飛び出さんばかりである。老人はヴォイニツィンが憎くて憎くてたまらないのである。「はて、これは不思議だ。」と他の試験官がいふ、「何だつて君は啞みたいに黙つてゐるんです？ さあ、分かりませんか、え？ 分からなければ分からないつて言ひなさい。」『どうぞ別の問題をやらして下さい。』『それぢや、さうして。』手を振つて、主席の試験官が答へる。またヴォイツィンは別の問題の紙をとつて、再び窓のところへ行き、再び卓子のところへ歸つて、又しても殺された人のやうに黙つてゐる。介添の老教授は彼を生きてゐるまま食ひ切り兼ねない勢ひである。たうとう彼は追ひ返されて、零點をつけられる。諸君はお思ひになるであらう、『もういくら何でも歸るだらう。』と。ところがいやはやどうしてどうして！ 彼は自分の席に歸つて、相變らず身動きもせずに試験が済むまでは、じつと坐り込んでゐるのである。やがて席を去るときになると、『あゝ、煮湯のまされちやつた！ 酷い目に遭つちやつた！』と叫ぶ。こんな工合で、その日一日といふ

ものは、時をり頭をつかんで、痛烈に不遇な自己の運命を呪ひながらモスクワの街を歩きまはる。勿論、本などには觸りもしない。そしてまた翌朝、同じことが繰り返される。

さて、私のところへ、このヴォイニツィンその人がやつて來たのである。私たちはモスクワの話や獵の話をした。

「いかがでせう、」と彼はだしぬけに瞬いた、「こちらで一番の頓智屋に御紹介しませうか？」  
「どうぞお願ひします。」

ヴォイニツィンは、肉桂色の燕尾服に花模様のネクタイをつけ、額の上の髪の毛が高く纏れ上つて、口髭のある小柄な人のところへ私を連れて行つた。この人の黄ばんだ落ちつきのない顔たちはたしかに機智と皮肉とを感じさせる。ふつと浮かべる辛辣な微笑みに、唇は絶えず歪んで、細目にあけた黒い小さな眼は、あたりに人なきが如く厚かましく、不揃ひな睫毛の下から覗いてゐる。彼のわきには、鷹揚な、柔味があつて、甘つたるい——サアハル・ミエドオキツチそのまの——片目の地主が立つてゐる。彼は小柄な男がまだ洒落を言はないうちから笑つてゐて、身をも心をも楽しさに忘れ果ててしまつたかのやうに見える。ヴォイニツィンは頓智屋に私を紹介したが、彼の名はピョートル・ペトロキツチ・ルビーヒンといつた。私たちはお互ひに名乗り合つて、懇ろに最初の挨拶を交はした。



「ところで、私の無二の親友を紹介さしていただきませう。」と不意にルビーヒンが例の甘つたるい地主の手をつかまへながら、鋭い聲でいひ出した。更に附け加へて、「まあ、キリーラ・セリファヌイチさん、そんなに意地を張んなさんな。」といつて、「何もあなたに噛みつくんぢやあるまいし。そこででございます。」と言葉を續けた。一方、キリーラ・セリファヌイチの方は當惑顔に、まるで腹のところ落ちてでもしまつたかのやうに、難儀さうにお辭儀をしてゐるのに、「そこででございますな、御紹介申し上げますが、これなるは豪い貴族。五十の御年までは、いたく御壯健でいらつしやいましたが、俄かに御眼の療治を思ひ立たれ、その結果、獨眼となられました。その後、御自分の百姓どもを療治なすつて居られますが、これまた御同様の首尾にて、……さて、百姓どもは勿論それ相當の敬意を拂つて……」

「いやはや、どうも。」キリーラ・セリファヌイチは口ごもつて、——そして笑ひ出した。

「おしまひまで言ひ給へよ、君、え、言ひ給へ。」とルビーヒンが後を引きとる、「あなたは裁判官に選ばれるかも知れないよ、いや、きつと選ばれるかも知れないよ、いや、きつと選ばれるから、見たまへ。さうなつたところで勿論、あなたのかはりに陪審官の方でいろんなことを考へてくれるに決まつてる。しかし、たとひ他人様の意見にしろ、とにかく喋ることだけは自分で喋れなくちやならん。萬が一にも、縣知事でもやつて來て、『どうしてこの裁判官は吃るんだら』

う？」と訊いたと思ひたまへ。さあ、さうなると、みんなが『中風に罹つて居りまして』といふに決まつてるね。すると知事は『ぢや悪い血を取つてやれ』つていふだらう。そんなことになつたら、あなたの地位からいつて、見つともないぢやないか、ね、さうだらう。」

甘つたるい地主は、腹をかかへて笑つてゐる。

「どうです、あんなに笑つて、」とルビーヒンはキリーラ・セリファヌイチの、波を打つてゐる腹を人悪さうに見やりながら續ける、「なあに、いくら笑つたつて構はないけど。」と私の方を振りかへつて附け加へる、「この人は食べるに不自由はなし、身體からだは丈夫だし、子供はなし、百姓たちを質に入れて置きもしないし、それに百姓たちを療治してもやる——この人のお内儀さんは頭が足りない。(キリーラ・セリファヌイチは聴きとれなかつたかのやうに、幾分わきの方を向いたが、それでもなほ聲を立てて笑ひつづけてゐた。) 私もやはり笑つてはゐますが、手前の細君には測量師と一しよに駆落ちされちまつたんですよ。(彼は苦笑した。) あなたは御存じなかつたですか？ そりや、その筈だ！ それはさうと、男を連れて駆落ちをして、私には置き手紙をして行きましたね、『おなつかしきピョートル・ペトローキツ様、お許し下さい。情にほどされて、氣の合つた人と遠くへ行きます』なんて……。ところで測量師と來たら、爪を切らないで、おまけにズボンのきちきちのやつを穿いてるつていふ、たつたそれだけのことで彼女の氣に

入つたんですよ。あなたは呆れてらつしやるんですね？『何ていふざつくばらんの奴……』つて。いやはや、とんでもないことを！ 私どもは野育ちですから何でも眞正直に言つてしまふんでして。しかしまあ、わきへ退いてませう……。未来の裁判官様のお側に立つてゐるのもどうかと思ひますからね……」

彼は私を引つばつて窓の方へ行つた。

「私はこの邊で頓智屋といふ評判をとりました」と話をして行くうちに、彼はいつた、「こいつは當てにしないで下さいよ。私はただ怒りん坊で、がみがみと人の悪口をいひます。だからこそ、こんなに氣樂なんですね。何も格式張る必要はないぢやありませんか、實際のところ？ 私他他人さまの意見なんぞに三文の値打も認めちやみませんし、何一つ物事に執着をもつてなんか居りません。私は意地が悪い、——だつて仕様がな。意地の悪い人間には少くとも智慧は要らない。意地の悪いつてことは、どんなに清々したことだか、まさかと貴方はお思ひになるでせう……まあ、そこで、早い話が、まあ、こちらの主人を御覽なさい？ 何だつてまあ、駈けずりまはつてるんだらう、冗談ぢやありやしない、——しよつちゆう時計を見ては、にこにこしたり、汗をかいては、勿體ぶつた顔附をしたり、さんざん腹を減らさしたり。滅多に御座らつしやらない——高官だつて！ そら、そら、また駈け出した、——御覽なさい、跋まで引き出して。」

かういつてルビーヒンは金切聲で笑ひ出した。

「ただ惜しいことには、一人の婦人もゐやしない、」と彼は深い歎息をしながら續ける、「全く獨身者の振舞だ。これぢやあ、御馳走も何もあつたもんぢやない。あれ、あれ？」と彼はいきなり叫んだ、「コゼリスキイ公爵が來ました。そら、あの髯の生えた、黄いろい手袋をはめた背の高い人です。外國にゐた方だつてことは直きに分かります……。あの人はいつもこんなに遅れて來る。なあに、阿呆で、正直いやあ、馬鹿も馬鹿も大馬鹿と來てる。まあ、ちよつと御覽なさいよ、手前どもと話をするのに、その御謙遜なこと、淺ましい女子供の狎れ狎れしい仕草に微笑みかけるときの際場なことつたら！……御自分でも時をり洒落を言ふんですけれど、それもほんの通りすがりの御滞在のうちにてしてね、——それはさうと、その洒落といつたら！ 何のことはない、なまくら刀で船の大綱を引つ切るやうなもんです。あの方はどうしても私をお氣に召さない……、けど兎に角、挨拶して來ませう。」

それからルビーヒンは公爵の方へ走つて行つた。

「あれ、私の一身上の敵がやつて來た。」と直きに私のところへ引き返して來ていふ、「そら、日に焦けた顔の、頭の毛のごはごはした肥つちよが見えるでせう、——それ、向ふに帽子を駕づかみにして、壁について、こつそり歩きながら、狼みたいに四方八方を見渡してゐる奴ですよ。私

は千ルーブリもする馬を四百ルーブリで彼奴に賣つてやつた、あの畜生め、今では平氣で私を輕蔑してゐるが、それにしたつて、あんな譯のわからん奴つたらありませんね。殊に朝、お茶を喫む前か、午餐が済んだ直ぐ後でも、『今日は』つていひますね、さうすると彼奴は『なんでございませうか?』つて。これですからね。あれ、閣下がおいでになる。』とルービンは言葉をついで、『退職した文官の方の勅任官で、落ちぶれ閣下。あの人には甜菜砂糖みたいな娘がありますし、癩癩にかかつたやうな工場があります……、や、失禮、言ひ間違へたです……、しかしまあ、お分かりでせう。あゝ！ 建築家もやつて來てる！ 獨逸人で、鬚をはやしてゐるが、自分の仕事なんか分かりもしない、——へんてこれんな奴ですよ！……尤も分かつたつて仕様がな、賄賂をとつて、圓柱を、柱を、——つまり、我國の古い家柄の貴族どもに、できるだけたくさん建ててやりやいいんで！』

ルービンはまた大聲で笑ひ出した……しかし、急にあわただしいざわめきが家中に擴がつた。高位のお方がお着きになつたのである。主人はあたふたと支關へ走り出た。續いて主人を心から慕つてゐる召使と御熱心なお客とが數人走つて行つた。……今までのさわがしい話し聲は生まれた巢の中の蜜蜂の春の唸りごゑのやうに、物柔らかな、快よい話し聲に變つて行つた。ただやかましい胡蜂のルービヒンと、見事な雄蜂のコレリスキイとだけは相變らず高い聲で話してゐた：

……と見る間に、いよいよ女王蜂——高位のお方が入つて來た。人々は取るものも取りあへず歡び迎へ、坐つてゐた人は直ぐに立ち上つた。ルービヒンから安く馬を買つた地主すら、その地主すらも頸を胸につけてお辭儀をした。高位のお方は、誰にだつてそれ以上には出來さうもないほどの威嚴を保つてゐた。會釋をするやうな恰好を見せて、頭を後ろにゆすぶりながら、一言一言のはじめに、長く引つばつて鼻にかけて發音する『あゝ』といふ字を付け加へながら、満足に思ふ旨の言葉を少しばかり述べた。そして、心の底から憤慨して、コレリスキイ公爵の髯を見、例の工場と娘とをもつた落ちぶれ勅任文官には右手の人差指だけを差し出した。それから四五分経つうちに高官は晚餐に遅刻をしなかつたのは甚だ欣幸とするところであると二度までいつたが、やがて人々は有力な人を先立てて、いづれも食堂へと出かけて行つた。

こんなことをお話しするがものはないと思ふが、まづ高位の人は一番の上座、勅任文官と縣の貴族團長との間に据ゑられた。この團長といふのは大らかな威嚴のある顔附をした人で、糊の利いたワイシャツの胸、歴大なチョッキ、佛蘭西煙草を入れた丸い煙草入れなど、實によくその表情に合つてゐた、——主人は主人で大いに斡旋に努め、あちこちと駈けずり廻り、あくせくして、客に御馳走をふるまひ、高位の人に後ろから通りすがりに微笑みかけ、それから小學生のやうに、部屋の隅に立つたまま、そそくさとスーブの皿や、一片の牛肉の皿をボーイから引つたくつた。

家令が長さニアルシン半もある大魚の口に花束を差して撥んで来る。お仕着せを着た贅め面の下僕たちはマラガ産の葡萄酒やドライ・マデーラ酒をもつてお客の一人一人に不愛想に付き纏つてゐた。そして大ていの貴族たち、わけても年輩の連中はいやいやながらおつき合ひをするといった様子を見せながら、酒杯を重ねてゐた。あげくの果ては三鞭酒の口が、ぼんぼんと開けられて、祝辭が述べられた。こんなことはすべて諷刺諸君はあまりにもよく御承知のことと思ふ。しかし、私には一同が喜んで傾聴してゐる中で高官自身が物語つた逸話は特に注目すべきもののやうに思はれた。誰であつたか、——例の落ちぶれ閣下だつたやうな氣がするが——最近の文學に通じた人が一般の人、特に若い人たちに及ぼす女性の影響に就いて話をした。すると「さやう、さやう」と高位のお方は調子を合はして、「それはほんたうだ。けれども若い者は、嚴重に言ふことを聽かせて置かにやあならん。さうでない、奴等は女を見さへすれば相手かまはず現をぬかさんとも限らん。」（子供らしい嬉しさうな微笑みがあるお客の顔にさつと浮かんた。或る地主のごときは、眼に感謝の色をさへうかべた。）「何となれば、若い者は馬鹿だからである。」（高位のお方は恐らく勿體をつけるためであらうが、時をり、普通一般に通用する言葉とちがつた妙なところへ力點をつけた。）「まあ例へて見れば、私の息子のイワンぢやが」と彼は話を進めた、「あの頓馬も丁度二十歳になりました、ところが不意にやつて来て言ふには、『お父さん、結婚さ

して下さい』つて。私は『この頓馬野郎、それよか先に勤めにでも出る……』つていひました。……さあ、失望する、涙を流す、……しかし私には……そのその……」（この「そのその」といふ言葉を高官は唇でといふよりは寧ろ腹でいつた。ここで暫く口を噤んで、さも尤もらしく隣りの勅任文官をちらと見て、おまけに途方もなく眉を釣りあげた。高等官は愉しさに、頭をいくぶん横に傾げて、高官の方に向いた一方の目をおそろしく早く瞬いた。）「さあ、それでどうでせう？」と高官はまた話し出した、「今になつて、伴は私のところへかう書いてよこしましてな、お父さん、馬鹿であつた私の眼を覺まして下すつて有難いと……やはり、ああしてやらなげや、いかなのぢやのう。」客は勿論、一も二もなく、この説に心から同意し、面白くて爲になるこの話を聞いて元氣づいたかのやうに見えた……。食事が済んでから、人々は一せいに立ちあがつて、がやがやと、しかも絶えず禮儀を重んじて、恰もこの場合にのみ限つて許されたかのやうなざわめきを立てながら客間に移つた。……人々は骨牌の席に着いた。

どうにかかうにかして私は日の暮れるまでみてしまつた。馭者には明日の朝五時に馬車の仕度をしてくれと頼んでおいて、自分はあてがはれた部屋へと引き取つた。ところが、なほその日のうちに、ゆくりなくも一人の注目すべき人物と知合ひになつた。

來客が多かつたために、誰しも一部屋もち切りで眠るわけには行かなかつた。私がアレクサン

ドル・ミハイリイチの家令に案内された大きな緑いろがかつた湿っぽい部屋には、もうすつかり着物を脱いでゐる客がゐた。私を見ると、彼は急いで毛布の下へもぐりこんで、鼻の先まで毛布を被つて、暫くは柔らかい羽根蒲團のうへに、むくむくと動いてゐたが、やがて静かになつた、と思つたら、木綿の夜帽子ナイトキャップの丸い縁のかけから、眼を光らして覗いてゐた。私はもう一つの寢臺ベッド（この部屋には寢臺は二つしかなかつた。）に近づいた。そして着物を脱いで、湿っぽい敷布のうへに横になつた。隣りの男が自分の寢床で寝がへりを打つた……。私は彼に、おやすみなさいといつた。

半時間ほど経つた。しきりに眠らうとは努めたけれど、どうしても私は寝つけなかつた。どうにもならない、ぼんやりした考へが、後から後からと水揚げ機械の桶のやうに、執拗に、單調に、はてしもなくつづいてゐた。

「どうやら、あなたは眠つてらつしやらないやうですね。」と隣りの男が口を切つた。

「ええ、御覽のとほり、」と私は答へた、「あなたも眠れないんですか？」

「いつも私は眠れないので。」

「それはまた、どうしてですか？」

「どうしてつて、やつぱりさうなんです。眠るには眠りますけれども、どうして眠るんだか分か

りません。床に入つて、寝てゐる、そのうちに、つい眠つてしまふ。」

「眠くもならないのに、どうして床へお寝みになるんですか？」

「ぢや、どうしろつて仰つしやるんです？」

私は隣りの男の質問には答へなかつた。

「不思議ですね、」と、しばらく黙つてゐてから話し出した、「どうして、ここに蚤がゐないのか。ここにゐなくて、どこにゐるんでせうね？」

「蚤を可哀さうに思つてらつしやるやうですね、あなたは。」と私はいつた。

「いいえ、可哀さうになんか。尤も私は何ごとによらず徹底することを好いてますんで。」

『ははあ、』と、私は考へた、『妙な言葉を使つてるぞ。』

隣りの男は又しばらく黙りこんだ。

「どうです、一つ私と賭をしませんか？」

と不意に彼は實に高い聲でいひ出した。

「何の賭ですか？」

私にはこの隣りの男が面白くなつて來た。

「ふむ……何の賭？ さうさう、これがいい、實は、あんたが私のことを馬鹿だと思つてらつ

しやると、私は信じてるんですが。」

「冗談ぢやありませんよ。」私はびつくりして、口ごもつた。

「野育ちだ、明盲だ……とね、さうでせう、白状してごらん下さい……。」

「私はつひぞ、お目にかかつたこともないんですから……。」と私はやり返した、「どうしてそんな結論をなさるんです……。」

「どうしてつて！ そりあ、貴方の聲色からですよ。あなたは上の空で返事してるから……。けれども、私は全くあなたがお思ひになるやうな人間ぢやありませんよ……。」

「失禮ですが……。」

「いや、まあ、私のいふことを聞いて下さい。第一に、私は佛蘭西語ならば、あなたと同じくらゐに話しますし、獨逸語ならば、あなた以上にやれます。第二に、私は外國で三年も暮らしました。伯林にだけでも八ヶ月みました。ヘーゲルを研究しましてね、貴方、ゲエテは諸記してゐますよ。おまけに私は永い間、獨逸の教授の娘に懸想してたんですが、國へ歸つてから肺病やみの令嬢と結婚しちゃいましたね。頭は禿げてゐるが、なかなか人物は偉い女でしたよ。かう話して来ると、あなたと毛色は變つてゐないでせう。私はあなたがお考へになるやうな野育ちぢやありませんよ……。私だつて、やつぱり反省といふやつに惱まされて来た人間で、私には衝動的な

ところは少しもありません。」

私は頭をあげて、なほ一その注意を拂ひながら、この奇妙な男を見た。仄暗い燈火の光りに彼の容貌をはつきりと見ることは殆んど出来なかつた。

「そら、あなたは今わたしを見てみますね、」と彼は夜帽子を眞直ぐに直しながら、言葉を續けた、「そして、きつと不思議に思つてらつしやるでせう、(どうして今日、あいつに気がつかなくなつたらう?)と。どうして氣づかれなかつたのかお話しませう、實は私が聲を立てないからですよ。他人のかけにかくれて、戸口の後ろに立つてゐて、誰とも話をしませんし、家令がお盆をもつて私の前を通るときは、私の胸と同じ高さに肘を上げるからですよ……。では、何故そんな眞似をしたのか? つて申しますと、二つのいはれがあるんです。第一に自分が貧乏なこと、第二には私が世を諦めてしまつたからです。……ほんたうに、あなたは私を見うけなかつたんでせうね?」

「ほんたうに。私はつい……。」

「まあ、さうでせう、さうでせうとも、」と彼は私を遮つた、「よく分かつてますよ。」

彼は起きあがつて、腕を組んだ。帽子の長い影が、壁から天井へかけて折り曲る。

「それから正直にいつて下さい。」横目で私をちらと見て、彼は附け加へた、「きつとあなたの

眼には私は大の變人、いはゆる畸人<sup>オウヂヤク</sup>、いや、ひよつとしたら、或ひはそれ以上に變てこな奴と見えたとせう。事によると、あなたは私が變人の振りをしているとお思ひになるでせう？」

「さつきも申し上げた通り、私は全くあなたを知らなかつたんですから……」

彼は一瞬間、眼を伏せた。

「どういふ譯で、あなたと、全く見ず知らずのお方と、こんなに思ひがけなく話をしたのか——全く、不思議だ、不思議だ！（彼は歎息をもらした。）別に氣が合つたといふ間柄でもなし、あなたも、私も、どちらも相當の人間だ、いはばエゴイストだ。あなたは私にはちつとも用がないし、私もあなたには用がない。さうぢやありませんか？　ところが、二人とも睡れない……、だからお喋りをするのに何の不思議もないでせう？　私は興奮してゐますが、こんなことは滅多にないことです。私は何でしてね、別に自分が田舎者だからとか、位<sup>ゐ</sup>がなくて、貧乏だからつていふ譯ではないんですが、ただおそろしく氣位が高いもんですから、實に内氣<sup>うちき</sup>でしてね。尤も、何時、どんな場合と、はつきりはいへませんし、また豫め見通しもつきませんが、時と場合さへよければ、臆病氣なんかは丁度、今夜のやうにすつかり消し飛んでしまふんです。今なら達賴<sup>タライ</sup>に顔を突き合はしても平氣で、喫き煙草を一服とねだつて見せますよ。それはさうと、多分あなたはお寢みになりたいでせうね？」

「どういたしましたして、」と私は急いで言ひ返した、「それどころか、あなたとお話をしてるのは大へん愉快です。」

「つまり、私の話があなたに面白いつていふんですね……。そんなら至極結構です。それででございますね、唯今も申しましたやうに私はここいらで畸人だつて言はれましてね、いはば、つまらぬ世間話の合間に、どうかして、ひよつこり私のことでも出ると、奴等にすつかり畸人扱ひにされるんでしてね。『更にわが運命に心を碎く人なし。』ですよ。あの連中は私を辱かしめるつもりなんです……。あゝ、いまましい！　ところが、焉んぞ知らん……。私には、ちつとも變つたところはなし、かうして今あなたとお話してるやうに、ひよいと氣が向いて話を始めるといふやうなこともあるにはありますが、こんなことを除けたら何も癖なんかありやしない。だからこそ私は酷い目に遭ふんです。しかも今いつたやうな氣まぐれは一文の價値だつてありやしないし。こんなものは極めて安つばい、極めて低級な變り振りなんですからね。」

彼は私の方へ向き直つて、手を振つた。

「あなた！」と彼は叫んだ、「私はこんな説を有つてるんです、この世の生活は概して、畸人のみ價値がある。ひとり畸人のみが生存權を有つてる……と。Mon verre n'est pas grand, mais je bois dans mon verre

わが盃は大ならず、しかもなほわれはわが盃をもつて飲まん

と誰かが言ひましたね。どつです。」

と彼は低い聲で付け加へた、「私は佛蘭西語をきれいに發音するでせう。いかに頭腦が大きく、廣くしてゐようとも、またあらゆるものを理解し、多くを識り、時代に追従しようとも、何一つ自身のもの、獨自のもの、固有のものを有たなかつたならば、それが何の役に立ちませうか！ それこそ、この世の陳腐なものを收める藏をも、一つ建て増したやうなものです——それによつて誰がどんな満足を得るものでせう？ いや、たとへ愚かであつても、汝自身であれ！ 自分の匂ひ、自分自身の匂ひを持つことだ、それが大切だ！——しかも私のこの匂ひについての要求が大きいと思はれては困ります……。そんなことは眞つ平です！ 私のいふやうな畸人は無數にゐる、どこを見渡しても、畸人はゐる。生きた人間は悉く畸人である。しかも私はその數には入つてゐない！」

暫く黙つてゐたが「それにしても、」と彼はまた話を續ける、「若い頃は、どんなに大きな抱負をもつてゐたこととせう！ 自分自身といふものをどんなに高く買ひ被つてゐたこととせう、外國へ行く前、いや、歸つてからも最初の頃は！ さて、外國へ行つて、一生懸命に耳を敬てゐました。しかし、私どものやうに、何でも獨り合點をしてゐて、しまひには、さつぱり、いろはのいの字も分らないでゐるといふやうな連中にはよくあることですが、いつも私は獨りぼつちで澄ましてゐたのです！」

「畸人、畸人！」と彼は咎めるやうな調子で頭を振りながら、言葉を繼いだ……。「畸人だと私はいはれる……。確かに小生ごとき者が畸人であつた日には、この世には畸人でないものはゐなくなつてしまふ。私は多分、他人の眞似でもして生まれて來たのでせう……。きつと！ 私はまた、これまでに學んだいろんな作家の眞似をして生きてるやうなものです。顔に汗して生きてゐる。勉強もしたし、戀もした。つひには女房も貰つた、しかも自分の意向からではないかのやうに、まるで何等かの義務か、でなければ教訓を守るとでもいつたかのやうに、——そんなことが誰に見わけがつくものか！」

彼は夜帽ナイトキャップ子を頭から掴みとつて、寢床の上に投げつけた。

「私の身の上話を聞いて下さいますか、」と彼は聲も絶え絶えに私に訊ねた、「いや、身の上話なんかといふよりは、私の身の上で變つたところを少し？」

「え、どうぞ。」

「いや、それよりもどうして結婚したか、それをお話した方がいいでせう。結婚といふことはなかなか重大なことぢやありませんか、一個の人間全體を試験する試金石ですからね。これにかけると、鏡に物が映ると同じやうなもので……。しかしこんな比較は甚だ古くさいですね……。ちよつと失禮ですが、嗅ぎ煙草を一眼やらして下さい。」



彼は枕の下から煙草入れを取り出して、それを開けて、開けた煙草入れを振りまはしながら、また話し出した。

「あなた、あなたがまあ、私の身になつて御覽なさい……。これは御自分で判断して見て下さい、いかなる、さて、いかなる、いいですか、いかなる利益を私はヘーゲルの百科全書から引き出し得たでせうか？ この百科全書と露西亞人の生活との間にですね、何の共通點がありませんか？ そして、我々の生活にそれを、いや、その百科全書ばかりではない、一體に獨逸哲學といふものを、……もう一步すすんでいへば、科學といふものをどんな風に適用したらいいのでせうか？」

彼は床の上に跳ねあがつて、恨めしさうに齒ぎしりをしながら、聲低く早口に話し出した。

「あゝ、それだ、それだ！ ……それならば、何しにお前は外國なんかを、ぶらついたんだ？ 何だつて故郷にじつとして、お前を取り巻いてる生活を落ちついて研究しなかつたんだ？ お前は生活の要求を見きはめ、その行くべきところをも見きはめて、自分自身の、いはゆる使命についても、はつきり理解することができただらうに、……とおつしやられるかも知れませんが、とんでもないことだ、」と、怖る怖る自己辯護でもしてゐるかのやうに、またもや聲色こゝろを變へて言葉を繼いだ、「まだ一人の才士も本に書かなかつたやうなことを、われわれはどこへ行つて研究した

らいいのか！ 私はあれから、すなはち露西亞人の生活から、教へを受けたかつた。しかも、憐れむべし、あれは黙つてゐる。われを捉へよといふ、けれども私の力には及ばないことだ。私は推論を與へて貰ひたい、結論を示して貰ひたい……。結論？ ここに結論があるといふ、われらがモスクワ人に聴くがいいと、モスクワ人は——夜うぐひすのやうに流暢に話をするではないか？ と。しかも悲しいことには、彼等はクアルスクの夜うぐひすのやうに、囁るけれど、すこしも人間らしい話をしないのです……。そこで私は考へた、考へぬいた。學問は、どうやらどこへ行つても一つらしい、眞理は一つだ、——さう考へて、故國を離れ、知らぬ異郷の異教徒のもとに投じた……。何のいいことがあるのか！ 若氣、己惚れにとりつかれ。世の中の人、肥るのは健康だからだといふけれど、私は時が來ないのに、己惚れによつて肥らうとは思はなかつた。もとより、自然に肉がつきもしないうちに、肥える筈はないが！」

「それはさうと、」とちよつと考へてから彼は附け加へる、「私は、どうして結婚をしたか、それをお話する約束をしましたね。おや、聞いて下さい。第一に、申して置かなければなりませんのは、家内がもう、この世にはゐないといふことです、第二には……第二には、まあ、私の青年時代のことをお話ししなければならんと思ひます。でないと、何が何やら、さつぱりお分かりになりますまい……。でも、あなたはほんとに眠たかないんですか？」

「いいえ、眠たありません。」

「そんなら結構です。まあ、お聞き下さい……。ほら、隣りの部屋で、カンタグリュエーヒン氏ががいびきをかいて、あのげすなこと！ 私はあまり裕かでもない両親から生まれました、——殊さら私が両親といひますのは、言ひ傳へによると、私には母親のほかは父親もあつたさうですから。私は覺えては居りませんが、父はあまり利口な人間ではなく、鼻が大きく、雀斑があつて、赤つ毛で、片方の鼻で嗅ぎ煙草をやつてゐたさうです。おつ母さんの寢臺には黒い襟を耳まで立てて、赤い制服を着た、とても見つともない親父の肖像畫がかかつてゐました。よく、その前へ連れて行かれて、たたかれたものです。そんなときには、いつでもおつ母さんは親父の肖像畫を指して、『お父さんがおいでになつたら、これ式のことでは濟まないよ』といひましてね。これがどんなに私を激勵したか、御想像がつくでせう。私には兄弟も、姉妹もありませんでした、いや、本當に言ふと、舍弟つていふやうなものがあつたんですが、後頭部の脊髄炎で永いこと臥てましたが、どうした譯か、ひどく早死しちやいまして……。一體どうして英吉利渡りの脊髄炎なんていふものが、クアルスク縣のシチーグロフ郡まで入りこんで來れるのかと思ひますよ。しかし、これは別の話です。私の養育はおつ母さんが、野育ちの女の身一つに一生懸命ひきうけてくれて、生まれ落ちたその大事な日から、私が十六になるまでやつてくれたのです……。あなたは私の話をずつと聞いて下さいますか？」

「むろん、さ、どうぞ。」

「そんなら、ようござんす。それで、私が十六になると、おつ母さんは待つてゐましたとばかりに、ニュージンの希臘區から來た獨逸人でフィリポオキッチといふ私の佛蘭西人の家庭教師を追ひ出してしまつて、私をモスクワへやつて大學へ入れました。ところが、間もなく伯父の手に私を残して、歸らぬ旅路についてしまつたのです。伯父はシチーグロフ郡ばかりではなく、他所にも名の聞こえた凄腕の辯護士で、コルトゥン・バプーラといひました。この親身の伯父で辯護士のコルトゥン・バプーラは、よくあることですが、私の財産をきれいさつぱりに横領してしまひました……。しかし、こんなことも餘計な話です。大學に入った私は——母親の本當の有難味がわかりますが——かなりな素養がありました。けれども獨創力の足りないことは、その時分にさへも、はつきり氣づかれたことです。私の少年時代は他の連中の少年時代と少しも違つてはゐなかつた。私もやつぱり羽根蒲團にくるまつて育てられた者みたいに、ぼんやりと、意氣地なしに育つて、やはり早くから詩の誦讀などをやり出して、元氣がなくなりました。空想的な嗜好にかこつけて……。ええと、何に對してつて？——さうですね、美しいものとか……。何とかに。大學へ入つてからも、何も別の道を通つたわけではありませんでした。私は直きに學會へ入りま

した。その頃の時代は今とは違つてみました……尤も、あなたは恐らく御存じないでせうね、  
學會ガクセルつてどんなものか？ シルレルはどこかでこんなことを言つたやうに思ひますが、

Gefährlich ist's, den Leu zu wecken,

Und schrecklich ist des Tigers Zahn,

Doch das schrecklichste der Schrecken——

Das ist der Mensch in seinem Wahn!

危ふきは獅子の眠りをさますこと、

怖ろしきは虎の齒や牙、

さらさらに怖ろしきは

身のほども辨へぬ人！

シルレルはきつと、かういふつもりではなく、Das ist ein «Krujok» ……in der Stadt  
Moskau怖ろしきはモスクワの町の……學會といふつもりだつたのです。」

「しかし、學會の何がそんなに怖ろしいんです？」と私は訊いた。

隣りの人は夜帽ナイトキャップ子子を引つ摺スリんで、鼻の上まで引き下ろした。

「何がそんなに怖ろしいつて？」と彼は叫んだ。「そりや、つまりかういふことです、學會は凡ゆる獨創的發達を破綻に導くからです。學會は實に社會や、女性や、生活を醜く置き換へたもの、學會は……あゝ、一寸お待ち下さい、私は學會つてどんなものかお話しませう！ 學會といふのは、外からは尤もらしく考へられ、合理的な仕事をしてゐるかのやうに思はれながら、のりくらりと寄り合つてゐるだけなんです。この學會は普通の話ヒナを議論に代へてしまつて、何の足しにもならない漫談の練習をし、獨り靜かに役に立つ仕事をするのに邪魔になる。文學的拵びなを植ゑつける。遂には、魂の清新さや、みづみづしい力を奪ひとつてしまふのです。また學會は兄弟分だとか、友情だとか體裁のいいことを看板にして、實は馬鹿げた、退屈なものです。胸襟を披くとか、同情を寄せるとかいふ事にかこつけて、思ひ違ひや屁理窟の連續なんです。學會では、有難くも朋友の權利として、各自が何時いつなんどきでも、仲間の内心深く汚れたままの手を突つ込むのを許されてゐるので、誰一人として、心に純潔な汚れないところなんかは持つてゐない。學會では、けちなお喋りだの、己惚れの強い才士だの、若いくせに年寄り振る奴等を崇拜し、才能はなくとも、『深味がありさうな』思想をもつた詩人ウタモノを大切にかけつけてゐるんです。學會ではわづか十七くらゐの青二才でも、やれ女がどうの、戀がどうのと生意氣に知つたかぶりをして喋り立

てる。そのくせ女の前へ出ると、黙り込んだり、本にでもあるやうなことをいつたりする。けれども、どうせ高は知れてゐる！ 學會では生意氣な雄辯が繁昌する。學會ではお互ひが、まるで警察官みたいに探り合ふ……。あゝ、學會よ、爾は學會ではなくして、相當の人物を一人ならず滅亡に陥し入れた循環クワイクだ！」

「まあ、それは、ちと大げさぢやありませんか、失禮ですが」と私は口を挿んだ。

隣りの人は黙つて私を見た。

「さあ、多分、さうかも知れません。私どもに、たつた一つの楽しみといつたら、大げさに言ふことが残つてゐるだけです。さて、でございますね、私はこんな工合でモスクワに四年暮らしました。そりやあ、あなた、この間の年月としづかがどんなに早く、どんなに素早く過ぎて行つたか、とても私に書けたもんぢやありません。思ひ出しては悲しくもなれば忌々しくもなります。朝起きたかと思へば、櫓に乗つて山を下るやうに……。ひよつと氣がつくと、もういつの間にか麓へ來てゐる、さうしてもう日が暮れる。睡たさうな召使が上衣を着せる。それを着て、友だちのところへ出かけて行く。煙草を喫んで、淡いお茶をがぶがぶ飲んで、獨逸の哲學のことや、戀愛のこと、魂の永遠ひかりの光明のことや、その他いろんなあまりにも縁遠い問題を論じてゐたものです。しかし、こんな風にしてゐても、私は獨創的な、獨自性をもつた人たちに逢ひました。こんな人に

なると、自分といふものを、どんなに滅却し、どんなに壓迫したところで、やはり本來の性質がおのづからにして顯はれる。ところが哀れなるかな、私と來たら、柔らかな蠟みたいに自分自身を捏ねあげたところで、生まれつきがやくざですから、捏ねたら捏ねたなりになつてゐる！ さうかうしてゐるうちに私は二十一歳になりました。そこで、親からの遺産を相続しました。遺産といつたところで正確に言ふと、後見人が、これくらゐは残しといてやつた方がよからうと勝手に決めたほんの一部分の遺産を手に入れたまです。私はこの世襲財産の管理を全部、農奴の位置から解放されたワシーリイ・クドリヤーシエフに委任して、遠くベルリンへ出かけました。外國には、前にも申し上げました通り、私は三年居りました。さてどうしたか？ やつぱり、あちらでも私は獨創力のない人間でした。第一に、いふまでもないことですが、私は歐羅巴についても、歐羅巴人の生活についても全く毛の先ほど學びはしなかつた。私は獨逸人の教授の講義を聽いて、獨逸語の書物を本場で讀んだ……。強ひて人と異なる點を求めたら、これくらゐのものです。私は坊さんみみたいに、孤獨の生活を送りました。わづかに懇意になつた人といつては、退職の陸軍中尉くらゐのもので、この男も私のやうに貪るやうな知識欲に苦しんでゐましたが、血のめぐりの鈍い、生まれつき口のまはらない男でした。また、ペンザやその他の地の肥えた田舎から來たぼんやりな家族たちと附合つたり、カフェーへ出入りをしたり、雑誌を讀んだり、晩になると芝

居へ行つたりしました。土地の人とはあまり附合ひをせず、話をするのも何となく氣骨が折れて、家へは誰も寄せつけませんでした。ただ二三人の猶太系のしつこい若者だけは、引つきりなしにやつて来て、金を借りて行きました。——*Der Weiss* 露西人が他人の話を眞にうけるのをいいことにして。そのうちに思ひがけない妙なことから私は一人の教授の家へ出入りするやうになりました。といふのはかういふ譯なんです。私が講義に出席したいからと頼みに行つたのです。ところが、どういふ風の吹きまはしか、先生はさつそく、私を自分の家へ晚餐に招んでくれましたね。この教授には二人の娘があつて、年はどちらも二十七くらゐでしたが、ずんぐりしてゐて、——實際、その通りで——鼻は立派で、髪の毛はきれいに渦を巻いてゐて、眼は薄青く、それに赤らんだ手に、白い爪をしてゐて。一人はリンヘンといひ、もう一人はミンヘンといひました。私は教授の宅へ出入りするやうになりました。實を申しますと、この教授は別に愚物といふのでもありませんが、何だか抜けてゐるやうな人でした。講壇に立つては、實に、きばきと筋道を立てて話しますが、家へ歸ると舌の廻らないやうな口の利き方をして、いつも眼鏡を額の上へに上げてゐました。とはいつても、かなり博識の人でした……。さて、どうでせう？ ふと氣がついて見ると、私はどうやらリンヘンに思ひ焦れてゐるやうなんです。そしてまる六箇月の間といふもの、いつもさういふ氣がしてゐました。あの娘と話をするこゝろは、實際、めつたになかつたのです、

——話をするよりは顔を見てゐる方が多かつたのです。しかしいろんな身に沁みるやうな文章を降高らかに讀んでやつたり、こつそり女の手を握つたり、毎晩、娘と並んで、じつと月を眺めながら、若し月がなければただ單に空を見上げながら、空想を恣にしてゐました。おまけに、娘は珈琲を入れるのがとても上手でしてね！……これ以上に何の望むところがあらうか？……といふ氣がします。ただ一つ私の胸を亂すものがあつた。いはゆる『云ひ知れぬ幸福のその瞬間』に於いて、私はどういふ譯か胸を押しつけられるやうな氣がして、ぞくぞく寒氣がするのです。たうとう私はこんな幸福に辛抱し切れなくなつて、逃げ出しました。それから猶ほまる二年といふもの私は外國で暮らしました。伊太利へ行つては、ローマの『基督變貌』の前に、フロレンツィヤの『ヴェネレ』の前に立つて、忽ちにして限り知られぬ歡喜に我を忘れ、まるで怨靈にでも悪かれたやうでした。夜になると、詩も書きましたし、日記にも手を著けました。いつて見れば、こゝでも人並のことをやつてゐたのです。それにしても、こんなことで畸人だといふなら、畸人になるのは、いとも易しいことですね。私は早い話が、繪だの彫刻だのことは、さつぱり譯がわからない……。それならそれと、あつさり言つてしまへばいいんですが……。いや、どうしてなか！ だから案内人を頼んで壁畫を見にゆく始末でした……。」

彼はまた俯向いて、再び夜帽子を脱ぎすてた。

「さて、たうとう故郷へ歸りました」と疲れた聲で續ける、「私はモスクワに着きました。モスクワでは私の身の上に驚くべき變化が起こつた。外國にゐるときは私は殆んど黙つてゐたところから此處へ歸つて來ると、急に自分ながら不思議なほど威勢よく話すやうになつて、同時に怪しからんことには、自分ほど偉いものはないと己惚れてゐました。私を殆んど天才のやうに思つてゐた甘い人たちもゐました。婦人たちは私の無駄話を乗り氣になつて傾聴しました。しかし、いつまでも高い名聲を保つてゐることはできなかつた。ある晴れた朝のことですが、私の噂が立ちました、(誰がこんなことをいひ出したのか分かりません、恐らく女の腐つたやうな奴でせう、——モスクワにはこんな奴らは無數にゐますから。) この噂がおこると、まるで毒みたいに見る見るうちに芽を吹いて、卷鬚が出て來ました。私は絡まれてしまつて、どうにかして逃げ出さう、この纏れつく糸を断ち切らうとしましたが——どうにもならない……。遂に私はそこを逃げ出しました。さて此處でも私はやはりやくざな人間だつたのです、それこそ蕁癩疹の癩るのでも待つやうに、おとなしく災難の去るのを待つてゐればよかつたのです。さうすると、例の甘い御連中がまた手をひろげて私を迎へ、御婦人がたは再び私の話に笑顔を向けて來るに相違なかつたのです……。ところが何といつても、私が獨創的な人間でなかつたことが、いけなかつた。まあ、お察し下さい。私は急に眞面目な氣持になつたのです。喋つてゐることが、休みもなしに喋つてゐるこ

とが、昨日はアルパートで、今日はトルーバで、明日はシフツェフ・ヴラージョークで、といふやうに喋ることが何だか氣恥かしくなつて來ました……。しかしですね、それでも世間の人が聞きたいつていふのなら？ まあ、この方面の本當のつはものを御覽なさい、こんなことは屁とも思はない。それどころか却つて必要とさへ思つてゐる、だから或る者は二十年一日のごとく、しかも、やり方も變へずに喋り續けてゐます……。自己に對する信念と自負心は畏るべきものがあります！ 私にだつても、それは、自負心はありません。さうして、今でもすつかり影をひそめてしまつた譯ではありません……。しかし、いけなかつたのは、もう一度いひますが、私が獨創的な人間でなかつたために、何ごとでも中途半端で止めてしまつたことです。どうせ生まれつき自負心を持つてゐるなら、もつとうんと持つてた方がよかつたし、さもなげや、ちつとも持つてなかつた方がよかつたのです。それにしても私は初めのうちは實際、ひどい目に遭ひましたよ。おまけに外國にゐたために、すつかり自分の資産も磨つてしまひ、さればといつて、若いとはいへ、身體がもうゼリーみたいにぶよぶよした商人の娘なんかと一緒にゐる肚もありませんでしたし、——それで私は自分の村へ引つ込んでしまひました。ここで、「隣りの人は又もや私を横目でちらと見て、附け加へた、「田舎生活の最初の印象、自然の美だとか、孤獨生活の靜かな魅力だとかの感じ、さういつたやうなものは抜いてもいいと思ひますが……。」

「ええ、いいですとも、いいですとも、」と私は言葉を返した。

「それに、」と話し手は続ける、「そんなことはいづれも詰らんですからね、少くとも私に關する限り。私は田舎では、まるで閉ぢこめられた仔犬のやうに、寂しがつたものです。なるほど正直のところ、初めて田舎へ歸る途中、なつかしい春の白樺の林を通るときなんかは、頭が變になつて、胸はほんやりした甘い期待に、ときめいてゐました。けれども、こんなほんやりした期待は、あなたも御存じでせうが、實現した例がない。むしろ反對に、ちよつとも思ひがけなかつたやうな別のことが起こる。例へば瘟疫だの、未納だの、競賣だの、何だの彼だのと。私は毎日毎日、支配人のヤーコフに助けてもらつて、どうにかかうにか細い煙を立ててゐました。この男は前の管理人のかはりに頼んだのですが、時の經つにつれて、前のよりはひどい強盗でないまでも、やつぱり似たり寄つたりの奴になつてしまつて、そのうへ、奴の樹脂を塗つた長靴の匂ひに朝から晩まで私は苦しめられてゐたのです。とにかく、細々と暮らしてゐるうちに、ある時わたしは近所に以前親しくした一家があることを思ひ出しました。家族は退職陸軍大佐の未亡人と二人の娘とでしたが、私は馬車の用意をさせて、この家へ出かけて行きました。その日は永久に忘れてはならない日です。六箇月の後、この未亡人の二番目の娘と私は結婚したのです！……」

話す方は頭を垂れて、空に兩手をさし上げた。

「それにしても、」と彼は熱心に話を進めた、「私は亡くなつた者に對する厭な氣持を仄めかしたくはありません。そんなことは御免です。あれはこの上もなく高尚な、氣だての善い人間でした。情愛のこまやかな、どんな犠牲にでも耐へられる人間でした。尤も、ここだけの話ですが、打明けて申しますと、私が若し彼女を失くすやうな不幸な目に遭つてゐなかつたら、恐らく今日あなたとお話することなんかはできなかつたでせう。といふのは、今でも私の家の霜除け小舎には、その頃の梁がそのままに残つてゐますが、一度ならず、私はあれで首を縊らうとしたものです！」

「梨によつては、」と、暫く言葉を切つてから、またいひ出した、「いはゆる『持ち味』が出るまでは、室にしばらく土をかぶせて寝かして置かなければなりません。たしかに私の亡くなつた家内はさういつたやうな性質の女でした。今になつて私はやつと彼女の本當の價値がわかります。今になつて、例へば結婚前に一緒に過ごした夜々のことなどを思ひ出しても、少しも悲痛な氣持などは起こらず、そればかりではなく却つて涙ぐまれるほどになりました。あの家の人達は裕福ではありませんでした。家は誠に古風な木造で、居心地だけはよい家で、寂びれた中庭と草木の生ひ茂つた外庭との間の丘の上に立つてゐました。丘の裾を川が流れてゐて、茂つた葉の間から水がちらちら見えてゐました。大きな露臺が家から中庭の方につづいて、露臺の前には、薔薇の

花につつまれた長い花壇が美を誇つてゐました。花壇の兩端には亡くなつた主人が若木のうちに螺旋形に枝を絡ませた二本のアカシヤが生えてゐました。も少し行くと、手も入れずに伸びるがままに繁らせた蝦夷苺の繁みのまん中に、小亭が立つてゐましたが、内側は實に巧妙に裝飾されてゐるのに、外側はちよつと見ただけでも氣味わるくなるほど古くなつて朽ちはててゐる。露臺から硝子戸を開けると客間になる。さて、客間に入ると、見る者の物珍しさうな眸にこんなものが目に入る。先づ隅々に据ゑつけた化粧煉瓦の燵、右手にある調子の狂つたピアノ、そのうへに積みあげた手寫しの樂譜、色の褪めた空色の綾絹に白ちやけた花模様のついたのを張つた安樂椅子、圓い卓子、エカテリナ朝時代の磁器や硝子珠でつくつた玩具を並べた二つの棚、壁には薄色の髪の少女が胸に鳩を抱いて、冷やかな眼をしてゐるありふれた肖像畫、卓子のうへには鮮やかな薔薇の花をさした花瓶……。いかがです、ずるぶん描寫がこまかいでせう。この客間で、この露臺で、私の戀の悲喜劇は演じられたのです。未亡人は意地の悪い婆でした。いつも邪慳に嘎れ聲をしてゐて、實に人泣かせの喧嘩好きな奴でした。娘は一人はヴェーラといひ、田舎のあたりまへのお嬢さんと少しも違つたところはありませんでした。もう一人はソフィヤといつて、實に私はこのソフィヤに熱くなつたのです。この二人の姉妹には、別に一つの小さな部屋がとつてありました。共通の寢室で、可愛らしい木造りの寢臺が二つありました。また黄いろく古ぼけた

アルバムや、木犀草や、鉛筆で甚だ拙く描いた男女の友だちの肖像畫があり（このなかでは、精力絶倫な顔つきをして、更にもつと精神的な署名をした一人の紳士が眼立つてゐました。彼も若い頃には背負ひきれぬほどの希望を懷いてゐたのですが、落ちるところは矢つ張り私たち同様、何にもならずにしまつたのです）、またゲエテヤシルレルの半身像、獨逸語の書物、乾枯らびた花環や、そのほか記念に取つて置く色んなものがありました。しかしこの部屋へはめつたに出入りしませんでしたし、氣も進まなかつた。私はこの部屋にゐると、なぜかしら息づまるやうな氣がしたのです。おまけに、奇妙な話です！ 私はソフィヤの方に背を向けて坐つてゐるとき、たまらなく好きになりました。いや、それよりもソフィヤのことを思つてゐるとき、或ひは更に、殊に夕方など露臺の上で、彼女のことを空想してゐるときに。そんなときには夕焼を眺め、樹を眺め、もう既に暗くなつてゐるのに、猶ほくつきりと薔薇色の空に浮き出してゐる緑の細かな葉を眺めてゐました。客間ではソフィヤがピアノの前に坐つて、ベートーヴェンの曲のうち何かしら自分の氣に入りの、情熱のこもつた悲壯な一節を絶えず繰り返し繰り返し弾いてゐます。意地の悪い婆さんは安樂椅子に腰をおろして、いと安らかに軒をかいてゐます。夕方の紅い光りが一ぱいに溢れてゐる食堂では、ヴェーラが頻りにお茶の仕度をしてゐます。サモワールは何か嬉しいことでもあるやうに、おもしろさうにシューシューと音を立ててゐる。輪廻は陽氣にポリポリ



と音をたてて折れる。スプーンは音も爽やかに茶碗にあたる。日がな一日、はげしく囀り暮らしたカナリヤは、急におとなしくなつて、ただ時をり、何かを求めるとかのやうに、ちちと鳴く。透きとほるやうな、軽い雲の中から、通り雨の雫がばらばらと落ちる……。私はじつと坐つて、しきりに耳を傾け、あたりを眺める。私の心は廣々として、またもや自分が戀をしてゐるのたなといふ氣がして来る。さて、このやうな夕方の夢心地に誘はれて、あるとき、わたしは老婦人にその娘を貰ひたいと所望しました。それから二箇月ばかり経つて、私は結婚しました。私は彼女を可愛がつたやうな氣がしてゐました……。ところが今となつては、もう分かつてもいい頃なんです。本當のところは未だにソフィヤを可愛がつてゐたかどうか、實際わからないんです。あれは氣だてのいい、利口な、口數をきかない、温い心の女でした。けれどどういふ譯か神様でなければ分かりませんが、田舎に長くゐたせゐか、他に何か仔細があつてか、あれの心の底には（若し心に底といふものがあるならば）一つの傷がかくされてゐたのです。或ひは、もつとはつきり言へば、どうしても癒すことのできない、それに、彼女自身にも、何とも名のつけやうのない小さな傷が血をにじましてゐたのです。もちろん、この傷のあることは結婚してから思ひ當つたことです。私はこれについて何んなに煩悶しましたか、しかし全くどうにもならなかつたのです！私は子供の頃、鵜を飼つてゐましたが、あるとき、猫が爪を立てて捕まへてしまひました。鵜は

救ひ出されて、治療もして貰ひましたが、可哀さうに癒り切ることはできませんでした。氣が抜けたやうになつて、瘦せ細つて、歌は唄はなくなりました……。やがて遂には、ある晩のこと、開いてゐた籠の中へ鼠が忍び込んで、鵜を噛み切りました。それが元で、鵜は死を免れられなかつたのです。いかなる猫が爪を立てて私の妻を捕まへたのか分かりませんが、兎に角、あれもあの可哀さうな鵜のやうに、氣が抜けたやうになつて瘦せ細つたのです。時折は自分でも羽ばたきをして、新鮮な空氣のなかに陽ざしを一ぱいに浴びて、心のままに遊び興じたかつた様子です。やつては見たが、また元にかへつて、小さくなつてしまふのです。それでも、あれは私を愛してくれました。もうこれ以上なんにも望むところはなかと、何度わたしに誓つたか分かりません。——それなのに、困つたことに！あれの眼は曇つて来る。過去に於いて何もなかつたか？と私は考へました。そこで、ずるぶん穿鑿もして見ましたが、何一つ、はつきりしませんでした。まあ、この邊は貴方に判断していただきませう。獨創的な人間ならば、ちよつと肩を竦めて、恐らく二度ほど溜息をして、後は自分に即した生活を始めたでせう。ところが私と來ては、もともとは獨創的な人間ではないので、梁なんかに見とれるやうになつたんです。私の妻にはオールド・ミスの癖といふ癖が——やれベーターヴェンだ、夜の散歩だ、木犀草だ、男の友達との文通だ、アルバムだ、何だの彼だのといふ癖が沁み込んでゐて、ほかの暮らし向きの方のことには、殊に一

家の主婦としての暮らしには全く馴染めなかつたのです。それにしても、人妻がそこはかとない愁ひに惱んで、毎晩のやうに『よき人よ、あけぼのの夢をさますな』なんかと歌ふのは可笑しいものですねえ。」

「さて、こんな工合で、私たちは兎も角三年の間は幸福に暮らしました。四年目にはソフィヤは初産で亡くなりました。しかも妙な話ですが、——私はどうも前から、彼女には娘とか息子とかを産んでくれられさうにもない、この世に新しい住人を産みつけられさうにもないといふ氣がしてゐました。私は今だに葬式の時のことを覚えてゐます。それは春のことでした。私たちの教區の寺は小さな古ぼけた寺で、聖帷は黒くなり、壁は剝げ落ちて、煉瓦の床はところどころ窪んでゐました。兩側の唱歌席には大きな古めかしい聖像が置いてありました。椀はここへ持ち込まれて、聖門の前の中央に置かれ、色褪せた覆ひをかけられ、そのまはりに三つの燭臺が置かれました。そのうちに式ははじまりました。後ろに下げた髪も少く、低く緑いろの帯を締めた老いぼれの役僧が見臺の前で物悲しげに、もぐもぐと呟いてゐる。黄いろい花模様のある薄むらさきの法衣を着て、人のよささうな、眼の悪い、やはり年をとつた導師が、自分の分と役僧のする分と二人前のお勤めをしました。開け放した窓の外には、枝を垂れた白樺の瑞々しい若葉がそよいでささやき交はし、庭からは草の香ひが吹きこんで来る。春の日の陽氣な光りのなかに蠟燭の赤

い焰が蒼白く、寺のうゝには雀が絶えず囀り、時をり圓屋根の下に飛び込んでくる燕の聲が澄んで聞こえる。金粉のやうにちらちらする陽の光りの中に、死者のために熱心に祈禱をあげてゐる數も少い百姓たちの亞麻いろの頭が、忙しげに上つたり下がつたりしてゐる。細い、青味がかつた流れをなして煙が香爐の孔から立ちのぼる。私は妻の死顔を眺めました……。悲しいかな！死すらも、死そのものすらも彼女を自由にはしなかつた。あれの傷を癒さなかつた。椀の中にてさへも、なほ打ちとけないかのやうに、やつぱり病み疲れたやうな、おどおどした、啞のやうな表情をしてゐる……。私は痛々しさで一ぱいになりました。あれは氣だてのいい、ほんたうに氣だてのいい人間だつた。しかし死んだのは彼女にとつては良かつたのです！」

話し手の頬は紅くなり、眼は曇つて來た。

「妻が死んでからといふもの、」と彼はまた話し出した、「すつかり失望落膽して居りましたが、遂に氣を取り直して、私はいはゆる事業といふものに取りかからうと決心しました。そこで縣廳のある町へ出て、お役人になりました。しかし、官廳の大きな部屋にゐると頭はひどく痛み出し、眼もまた悪くなりました。そこへ持つて來て、いろんな事件にぶつかりまして……。私は役所を退きました。それからモスクワへ行きたいと思ひました。ところが第一に金は足りないし、第二に……。既にお話しましたやうに、私は諦めてゐました。この諦める氣持は突然やつて來たやう

に見えますが、又さうでもなささうです。精神的には疾うの昔から諦めてゐたのですが、いざとなるとまだまだ頭を下げる氣にはなれなかつたのです。控へ目な感情や思想を、私は田舎の生活、身の不幸のせゐにしてゐました。一方では初めのうちこそ、私の學問のあること、外國を歩いて來たこと、私の教育の餘徳なんか驚いてゐた近所近邊の若者も年寄も、誰もが後では私にすつかり馴れ切つてしまつたばかりではなく、私と附合ふにしても何だか白々しくさへなつて來て、口をきいても、『御座います』なんかとは最早いはなくなつてゐることは、かなり前から氣づいてゐたのです。お話しすることをやつぱり忘れてゐましたが、結婚した初めの年に、私は文壇に乗り出さうと思ひまして、ある雑誌へ原稿を送りました。若しも私の記憶に間違ひがなければ、一篇の物語でしたが。ところが暫くすると、編輯者から丁寧な手紙が來ました。その中には、色んなことを書いた中に、あなたには叡智がないとはいへない、しかし才能がないことは言はなければならぬ、才能がなければ文學は駄目である、とありました。もう一つ、お話ししておきたいことは、或る旅のモスクワ人が、——これは氣だての極くいい男でした、尤も若造でしたが、——この男が縣知事の家で、私を氣の抜けた中味の無い人間だと、さりげなく片づけたといふ話を聞きました。しかも、私のお目出たい盲目は、依然として續いてゐたのです。まあ、自分の『横つ面を擲る』氣がなかつたんですね。ところが、つひに或る麗らかな朝のこと、私ははつ

きりと眼がさめたのです。それはつまりかういふことが起きたのでした。私のところへ郡の警察署長が、私に全く修理の道がつかないでゐた自分の地内の落ちかかつてゐる橋に注意を促しにやつて來ました。火酒を一杯やつて、蝶鮫の燻製で口直しをしながら、この鷹揚な警官は、まるで父親が子に物を教へるやうに私の粗忽なのを責め立てました。尤も私の境遇に同情して、何か不用な材木でも使つて、百姓どもに繕はしたらよからうと勧めました。それから煙草に火をつけて、將に來らんとしてゐる選挙の話をはじめました。その頃、縣の貴族團長たるべき名譽ある候補者になつてゐたのは、オルバツサーノフなにかといふ男で、これは淺薄な、口のやかましい、おまけに賄賂などを取る男でした。そのうへ彼は富の點からいつても、名望の點からいつても大した男ではありませんでした。私はこの男についての意見を述べました。が、これには實に何の氣もなく、ついつつかりと言つてしまつたのです。私は正直のところ、オルバツサーノフ氏を見下げてゐたのだと。すると署長は私の顔を見て、愛想よく私の肩をたたきながら、氣輕にかう言ひました、『まあ、まあ、ワシーリイ・ワシーリキツチ、貴方にしろ私にしろ、あんな人のことを、どうのかうのと言へる身ぢやありませんよ、飛んでもないことでせう?……身の程を知らなきやいけませんよ。』『冗談ぢやない。』と私はいらいらして反駁しました、『僕とオルバツサーノフ氏との間にどんな違ひがありますね?』署長は口からパイプをとつて、眼を圓くして、やがて吹き

出してしまひました。『まあ、面白い人だ。』と遂には涙までうかべながら、『何ていふ冗談をいふ人だらう……あゝ！ 變つた人だ！』かういつて、時をり脇腹を臂でこついたり、私を『君』などと言ひながら、いよいよ歸るときまで散々からかつて行きました。やがて、たうとう行つてしまつた。今までこの一滴が足りなかつた、私の盃はこの一滴によつて溢れてしまひました。私はいくたびか部屋の中を歩きまはつて、鏡の前に立ちどまり、いつまでも、いつまでも途方に暮れた顔を見まもり、ゆるゆると舌を出して、苦笑ひをしながら頭を振りました。眼の曇りはすっかり晴れてしまひました。私ははつきりと、鏡にうつる自分の顔よりもはつきりと、自分がどんなに淺薄な、取るにも足らない、役にも立たない、獨創のない人間であつたかが分かつたのです！』

話し手はしばらく口を噤んだ。

「ヴォルテールの或る悲劇の中に」と彼はがっかりしたやうな調子で話しつづけた、「或る紳士が極度の不幸に陥つたことを喜ぶところがありますね。私の運命には悲劇的なところは、ちつともありませんが、私はありのままに申すと、やはりそれに似たやうなものを経験しました。私は冷やかな絶望の毒々しい法悦を知りました。朝のうち、ずつと床の中に落ち着いて、横になりながら、自分の生まれた日と時とを呪ふことがどんなに心地のよいものかを経験しました、——

私は一いきに諦めをつけることはできませんでした。しかし實際のところ、まあお察し下さい、私はお金がなかつたばかりに憎むべき田舎へ閉ぢこもらなければならなかつたのです。土地の經營も、役所勤めも、文學も——何もかも身にはつかかなかつた。地主たちとは遠ざかり、本を讀むのも厭になつた。捲毛をふり立てて、熱病やみのやうに『人生』といふ言葉を繰りかへしてゐる水ぶくれしたやうな、病的に感傷的なお嬢さま方にも、私がお喋りをしたり有頂天になつたりしなくなつてからといふものは、さつぱり興味を感じなくなつた。さうかといつて全く孤獨になることも忍びがたく、出来もしなかつたのです……。私は始めました、一體何を始めたと思ひになりますか？ 私は近所の人たちのところを、ぶらつき始めたのです。まるで自分といふものを全く輕蔑し切つたかのやうに、私は故意にあらゆる人々のけちな凌辱を招いたので。食卓に著けば讒謗せられ、人からは冷やかに横柄な態度で迎へられ、つひには見向きもされなくなつて、世間話の相手にさへもされなくなりました。そこで私はモスクワにゐた時分には私の足の塵にも、外套の端にも接吻しかねないほど私を有難がつてゐた或る極めて馬鹿なお喋りに、わざと隅の方から『然り、然り、』と相槌をうつてやりました……。それにしても、自分はこんな皮肉なことをして苦い満足に耽つてゐるのだとは夢にも思へなかつたのです……。とんでもない、獨りぼつちであるのに、何の皮肉ぞやです！ まあ、こんな工合で何年かを相も變らず身過ぎをして來まし

た。そして今に到るまで、こんな工合にやつてゐる譯です……」

「いや、不都合きはまる、」と隣りの部屋からカンタグリューヒン氏が睡さうな聲でぶつぶつ言ふのが聞こえる、「なんて馬鹿野郎だらう？ 夜よなかに話をするなんて。」

話し手は大いそぎで毛布の中へもぐり込んで、おどおどと外を覗きながら、指を出して私をおどかした。

「しつ……しつ……、」と囁いて、恰も謝るかのやうに、カンタグリューヒンの聲のした方へお辭儀をしながら、恭しく言つた、「畏まりました、畏まりました、どうも相済みませんで御座います……。彼も眠る資格があるんです、眠らなきゃなりません。」と、又ひそひそ聲になつて話しつつづける、「あの男も元氣をつけなくちゃなりません、まあ、明日の食事をうまく食ふためにでも、私どもはあの男を邪魔する権利はありません。それに私は言ひたいだけのことはみんなお話したやうな氣がしますし、貴方もきつとお寢みになりたいでせう。お寢みなさい。」

彼はひよいと熱病やみのやうに素早くむかふを向いて、枕に頭を埋めた。

「せめて貴方の」と私は訊ねた、「お名前だけでも聞かしていただきたいのですが……。」

彼はすぐに頭をあげた。

「いや、どうぞ後生ですから、」と私を遮つて、「私にも、他の人にも私の名だけは訊かないで

下さい。ただ、運命に傷められた身許不明の男、ワシリーイ・ワシリーキッチとして憶えてゐて下さい。それにまた獨創のない人間ですから、自分だけの名をもつ値打なんかありませんし……。それでもぜひ、何とか呼び名をつけたいと仰つしやるんでしたら……。シチーグロフ郡のハムレットといつて下さい。かういふハムレットはこの郡にもたくさん居ります。尤もあなたは恐らくほかの連中にはぶつからなかつたでせうね……。では御機嫌よう。」

彼はまた羽根蒲團の中にもぐり込んだ。翌る朝、人が来て私を起こしたとき、彼はもう部屋の中にはゐなかつた。夜の明ける前に彼は立ち去つたのである。

## チエルトブハーノフとネドピュースキン

ある夏の暑い日に、私は馬車に乗つて獵から歸るところであつた。エルモライは私のわきに坐つて微睡んだり、船を漕いだりしてゐた。ぐつすり睡りこんだ犬は私たちの足もとに、まるで死んででもゐるかのやうに跳びあがつてゐた。馭者は馬にたかる牛蠅を絶えず鞭で追ひ拂つてゐた。白い埃が軽い雲のやうに馬車のあとから趨つて来る。私たちは繁みの中へ入つた。道はいよいよ凹凸がはげしくなつて、車の輪が小枝に引つかかり出した。エルモライはぶるぶると身慄ひをして、あたりを見まはした……。「やあ！」と彼は口を切つた。「ここに松鷄マツトリがあるに違えねえ。降りて見やんせう。」私たちは馬車を停めて、『原つば』へ入つて行つた。私の犬は巢にゐる一羽の雛鳥に行きあたつた。私は一發うつて、また装填しかかつてゐた。すると、出し抜けにがさがさといふ音が後ろの方に高く聞こえて、馬に乗つた男が両手で繁みを押しわけながら、私の方へやつて来た。やがて「ええ、一寸おたづねしますが、」と彼は横柄な聲でいひ出した、「一體、何の権利あつて此處で獵なされる、貴方？」この見知らぬ男は、非常に早口に、きれぎれに鼻にか

かる聲でいつた。私は彼の顔を見たが、生まれてこのかた、こんな顔を見たことがない。親愛なる讀者諸君よ、薄色の髪の毛に、上を向いた赤い鼻と極めて長い人參いろの口髭をもつた背の小さい人を想像していただきたい。先の方に眞赤な羅紗がついてゐる尖つた波斯帽が、眉のきはまでもずつと額にかぶさつてゐる。着物はと見れば黄いろい擦り切れた袖無しで、胸には黒い綿天綿天鷲絨の薬筒ケイスイさしがついてゐて、縫目といふ縫目には色あせた銀の飾紐モリがついてゐる。肩越しに角笛が下がり、腰帯には短劔が見える。瘦せ衰へた鈎鼻の栗毛の馬は、氣でも狂つたかのやうに、この人に乗せてよろめき、二匹の瘦せて、足のまがつた獵犬ゾイがその馬の脚もとを駆け廻つてゐる。顔といひ、眼つきといひ、聲といひ、すべての動作といひ、見知らぬ男の全體が、氣違ひじみた大膽さと奔放不羈な驚くべき傲慢さを感じさせる。その薄青い、硝子のやうな眼は酔ひどれの眼のやうに落ち着かず、横目で物を見てゐる。ぐつと反り身になつて、頬をふくらし、鼻息を荒くして、はちきれさうな威嚴を示すかのやうに、身體ぢゆうを慄はせたところは、どう見ても七面鳥そつくりであつた。彼は同じ質問を繰り返した。

「ここで撃つてはいけないつていふことを知らなかつたものですから。」と私は答へた。

「ここは貴方、」と彼は續ける、「私の地内ですよ。」

「それは失禮しました。そんなら早速、出て行きませう。」

「ですけど、一寸おたづねします、」と彼は言ひ返した、「あなたは若しや貴族ぢやございませんか？」

私は自分の名を名乗つた。

「それではどうぞ獵をなすつて下さい。私はやつぱり貴族ですから、貴族のお役に立つのは何より嬉しいです……。時に私の名はバンテレイ・チェルトブ・ハーノフと申します。」

彼は身を屈めて、大聲に呼び立てながら馬の頸に太鞭をくれた。馬は頭を振りたて、後脚で立ちあがり、脇へそれて、犬の足を踏みつけた。犬は刺し通すやうな悲鳴をあげる。チェルトブハーノフは怫然と色をなして、口角泡をとばし、馬の頭の耳の間のところを拳骨でなぐりつけ、稲妻よりも速かに飛び下りた。犬の足をしらべて見て、傷に唾をつけ、鳴くのをとめるために犬の脇腹を足で突いて、しつかりと馬の鬚甲にしがみつき、鐙に足をかけた。馬は顔をあげ、尾をふりあげて、横ざまに繁みの中へ入る。彼は片足で跳ねながら、馬について行つた。それでも、たうとう鞍に乗り、我を忘れたかのやうに無闇に太鞭を浴びせかけ、角笛を吹いて駆けて行つた。チェルトブハーノフが思ひがけなく現はれたのに驚かされて、私がまだぼんやりしてゐるとこへ、又もや不意に殆んど物音もたてずに、かなり肥つた四十恰好の男が小さな黒馬にまたがつて繁みの中から出て來た。彼は立ちどまつて、緑いろの革の縁なし帽子を脱いで、いとも弱々しい、や

さしい聲で、栗毛の馬に乗つた人を見かけなかつたかと私に訊ねた。私は見かけたと答へた。

「あのお方はどちらへ行きましたらう？」

と、同じ調子で、帽子を脱つたまま言葉を繼いだ。

「あちらの方です。」

「大きに有難うございました。」

彼は唇を鳴らし、馬の横腹に兩足をあてて、小走りに、——ゆらりゆらりと揺られながら、教へられた方に向いて走らせて行つた。私は角のやうに尖つた帽子が樹枝の蔭に隠れるまで彼の後ろ姿を見送つた。この新しい未知の人は前の人とは様子がまるで違つてゐた。顔は鞠のやうに圓圓と肥えてゐて、内氣な、人の好い、やさしい謙讓な氣持をあらはしてゐる。やはり圓く肥えて、青い血の筋の縞をなしてゐる鼻は酒色の徒たることを物語つてゐる。頭の前の方には一本の毛もなく、後ろの方にうすい亞麻いろの毛が房のやうに見え、小さな眼は菅の葉でも切つたやうに切れ長で、人なつこげに瞬き、潤ほひのある赤い唇には、快よい微笑みがうかんでゐる。着てゐるのは立襟に銅の釦のついたフロックで、ひどく着古したものはあるが、さつぱりしたものだ。羅紗のズボンは高く引つぱり上げられ、長靴の黄いろい縁飾りの上には脂ぎつた脰脰が見える。

「あれは誰だい？」と私はエルモライに訊いて見た。

「あれかね？　ネドピエースキン・チーホン・イワーヌイチでさ。チェルトブハーノフんとこにゐますんで。」

「どんな男だね、貧乏人かえ？」

「金持ちやありましねえ。けんど、チェルトブハーノフにだつて、鏝一文ねえんぢやありませんか。」

「そんならどうして彼んとこへ根付いたんだ？」

「それあ、それ、仲よくしてたもんで。どこへ行くにも一人で行くこたねえんで……、いや、本當がですよ、牛は牛づれつて……」

私たちは繁みの外に出た。すると不意に直き近くで二匹の獵犬が吠え出した。とたんに大きな白兎が、もうかなり伸びてゐる燕麥の中へ駆け込んだ。そのあとを追つて、繁みの縁からボルゾイやハウンド、何匹もの獵犬が躍り出た。犬の後ろからチェルトブハーノフ自身も飛び出した。彼は喚きもせず、掛け聲もしない。息を切らして、唾を飲みこんでゐる。とぎれとぎれの、意味もない音聲が大きく開いた口から洩れる。今にも飛び出しさうな眼をして、飛んで行き、可哀さうな馬に太鞭をくれる。獵犬は「あはやといふところへ来た」、白兎は一寸うづくまつて、いきなり後ろへ引き返し、エルモライのわきを、繁みをさして駆け抜ける……。獵犬がまた駆け抜ける。

「かあ、け、ろ、かあ、け、ろ！」と疲れはてた獵人が吃りのやうに、辛うじていふ、「おうい、氣をつけろ！」エルモライが一發うつ……。手傷を負つた白兎は滑らかな枯草の上に獨樂のやうに轉がり、宙に跳り上がる。やがて押しかけた牡犬の齒にかかつて哀しげに鳴き出す。獵人の群れが直ちに殺到する。

チェルトブハーノフは宙返りをする鳩のやうに、馬から飛んで下り、短劔を引ろ掴んで、大股に犬どもの間へ割りこみ、嘔鳴りつけながら食ひ裂かれた兎を引つたくつた。やがて、顔中をしかめながら柄もとほれとばかり喉もとに突き刺した……。突き刺して、それから「ほうほう」と叫び出した。チーホン・イワーヌイチは繁みの縁に現はれた。「ほう、ほう、ほう、ほう、ほう、ほう、ほう、ほう、ほう」と、チェルトブハーノフがもう一度叫び出した……。「ほう、ほう、ほう、ほう、ほう」と仲間が靜かに繰り返した。

「ですが、夏の間だけは獵をしない方がいいんぢやありませんか。」と私は踏みつけられた燕麥を指しながらチェルトブハーノフにいつた。

「なあに、自分の畑ですから。」と、やつと息をつきながらチェルトブハーノフが答へる。

彼は兎の後脚を切り取つて、からだを鞍に括りつけ、犬どもには脚だけを分けてやつた。

「彈丸は借りとくよ、君。」獵師の掟に従ひ、彼はエルモライの方を向いて言つた。そして



「けど貴方様には」と、同じやうな、ぶつきら棒な鋭い聲で言ひ足した、「御禮を申し上げます。」

彼は馬に跨がった。

「一寸おたづねします、……つい忘れまして、……あなたの苗字とお名前を……」

私はまた自分の氏名を告げた。

「お近づきになりましたで大へん嬉しいです。折もございましたら、どうぞいらして下さい……。ところでチーホン・イワーヌイチ・フォームカはどうした」と怒りながら言葉をつづける、「兎はあいつのゐない間にちやあんと獲つてしまつたに。」

「馬がへたばつちやつたんで。」とチーホン・イワーヌイチが微笑みながら答へる。

「へたばつたつて？ オルパッサンがへたばつたつて？ ええ、ちよつ！……あいつ何處にゐる、何處に？」

「あの森のむかふに。」

チェルトブハーノフは馬の鼻面に太鞭をくれて、一目散に駆け出した。チーホン・イワーヌイチは私にむかつて二度お辭儀をした、つまり一度は私に、一度は私の仲間に。そしてまた繁みのなかへ小刻みに入つて行つた。

この二人の紳士はひどく私の好奇心をそそつた。……一體、何がかくも素性のちがつた二人の人間を、割きがたい友情の絆よづなによつて結びつけたのであらう？ 私はいろいろと調べ出した。私  
が知り得たところのものは次のやうなものであつた。

パンテレイ・エレメーキツチ・チェルトブハーノフは近所界限から、險呑な氣違ひじみた人間で、傲慢な喧嘩好きな男だと評判されてゐた。ほんの暫くのあひだ、軍隊に入つてゐたが、『芳ばしからぬこと』があつて、『あれでも鳥か』と、世間で考へられてゐるほどの位置のときに職を退いた。家柄は嘗ては裕福であつた舊家で、先祖たちは曠野スツマの習はしに従つて派手に暮らしてゐた、——つまり、招いた客、招かなかつた客の區別なく款待して、たじたじになるまで御馳走をし、お客の馭者たちには馬にやるやうにと燕麥をどしどし届けてやり、家には樂師や歌うたひ、道化役者や犬などを置き、お祭りの日には誰彼の區別なく麥酒や地酒を振舞ひ、冬になると、自分の馬に重たい大型の馬車をひかせてモスクワへ出かけた。さうかと思ふと、時には何箇月も一文なしで自分の所でとれるものだけで暮らすこともあつた。領地がパンテレイ・エレメーキツチの父の手に入つた頃には既に落ち目になつてゐた。ところが今度は彼の代になると、さんざん『いい目をした』ので、死んだとき、たつた一人の息子パンテレイに遺したものはベスソーノヨといふ抵當に入つてゐる小村に、地付きの百姓男三十五人、女七十六人と、コロブロードワの荒地にあ

つた役にも立たない十六町三段歩の地面とであつたが、これらの土地に附いてゐる農奴のことは先代の遺言の中には載つてゐなかつた。實をいふと、先代は甚だ妙なやり方で身代を潰したのであつた。いはば『やりくり算段』が彼を臺なしにしたのである。彼の考へでは貴族といふものは商人や町人や、これに類する、彼のいはゆる『強賊』どもと係り合つてはならぬといふので、彼は自分の地内にありと凡ゆる商賣を始めさせたり、仕事場を設けたりして、『この方が體裁もよく、値段も安い。』と、よくいつてゐた、『これこそ、やりくり上手といふものだ！』彼はこの始末の悪い考へを死ぬまで振り棄てることができなかつた。實にこんな考へがあつたればこそ落ちぶれたのである。しかもその代りどんなに面白い目をしたことか！ 彼は一寸した出来心でも満足させずには置かなかつた。いろんな思ひつきのあつたうちにも、或るときは自分の好み通りに、あまり大きな自家用の箱馬車をこしらへたので、村中の百姓馬を寄せ集めて、持主に手傳はして曳かしては見たものの、勾配にさしかかるや否や引つくり返つて粉々にこはれてしまつた。エレメイ・ルキッチ（パンテレイの父親はエレメイ・ルキッチといつた）はこの勾配のところへ記念碑を立てさせたが、こんなことをしても別に何とも思はなかつた。また或るときは教會を、勿論獨力で、建築家の手を借りずに建てようと思ひついた。そこで一つの森をすつかり焼き拂つて煉瓦をこしらへ、縣の議事堂でも建てるときのやうに宏大な土臺を構へて、壁を廻し、圓屋根を造り

かかつた。ところが、圓屋根は落ちてしまつた。もう一度やり直しをした、——圓屋根はまた崩れてしまつた。三たびやり直した——が、圓屋根は三たび崩壊してしまつた。流石のエレメイ・ルキッチも少々考へ出した。仕事はどうもうまく行かない……。きつと呪はしい魔がさしたのだ。……といふので、忽ち彼は村中の年をとつた農婦たちを一人残らず鞭うつやうにといひつけた。農婦たちは鞭うたれた、——しかし、圓屋根は相も變らず上がらなかつた。今度は新しい設計で百姓家を建て直しにかかつた、これもみな例の『やりくり算段』のなせる業であつた。まづ三軒の屋敷を三角形にとつて、その真ん中に柱をおし立て、それに彩色をした椋鳥の巢箱と旗をとつけた。毎日毎日、こんな工合で新しい計畫を考へてゐた。或るときは牛蒡のスープをこしらへ、或るときは家隸たちのために帽子を作つてやるといふので馬の尻尾を切つたり、また或るときは蕁麻を亞麻の代用品にしようと思つたり、豚を菌で養はうとしたり……。嘗て彼は『モスクワ報知』でハリコフの地主フリヤーク・フルピョールスキイが書いた農民生活に於ける道德の必要といふ論説を讀んで、翌る日には残らずの百姓に、このハリコフの地主が書いた論文を直ちに諸記するやうにと、お布令を出した。百姓どもは論文を諸記した。そこで且那はそこに書いてあることが分かつたかと訊いた。すると執事の答へには、このくらゐ分からんでどういたしませう！ とのことであつた。また、その時分のことである、秩序を保つためと、やりくり算段から推して、

家來どもに一人のこらず番號をつけて、番號を襟に縫ひつけるやうにと命令した。且那に會つたときは、誰もが大きい聲で『第何號でございます！』と大きい聲でいふ、すると且那は優しい聲で、『あゝ、よしよし！』と答へることになつてゐた。

しかし、秩序も立ち、やりくり算段も巧かつたのにも拘らず、エレメイ・ルキッチは次第次第に極めて苦しい羽目に立ち到つた。最初のうちは自分の持村を抵當に入れたりなぞしたが、やがて他人の手に渡つてしまつた。後にも先にもない先祖傳來の家も、造りかけの教會のある村も既にお上の手で競賣に附せられてしまつたが、運のいいことには、これはエレメイ・ルキッチの存命中ではなかつた、——彼はこの打撃にはとても堪へられなかつたであらう、——といつても死んでから二週間の後にはもう、こんなことになつてゐたのである。彼は自分の家の、自分の寢床で、家の者にとり圍まれ、抱への醫者に看護されて死ぬことができた。けれども可哀さうにパンテレイにはわづかにベスソーノフが手に入つただけであつた。

パンテレイが父の病氣のことを知つたのは軍隊に入つてからのことで、例の『芳ばしからぬこと』が起きてゐる眞最中であつた。彼はやつと十九になつたばかりであつた。彼は子供の頃から生まれた家を離れたことがなく、極めて人のいい、その代りまるで愚鈍なお母さんのワシリ・サ・ワシリ・エヴナの手で我儘に、お坊つちやんに育つて來た。教育は母親が一手に引き受けた。

エレメイ・ルキッチはやりくりの工面に耽つてゐたので、それどころではなかつたのである。尤も實際に或るとき、Pを『アルツイ』と發音したといふので、父親みづから手を下して息子を罰したことはあつたが、その日エレメイ・ルキッチは深く人知れず悲しまなければならなかつた。といふのは一番よい犬が樹にぶつつけられて殺されてゐたからである。それにしてもワシリ・サ・ワシリ・エヴナが愛し兒のパンテレイの教育のことに世話を焼いたといふのは、ただやきもきと無駄骨を折つたといつても良いのである。彼女は先づ汗だくになつてアルサス生まれの退職軍人でピルコッフ某といふのを家庭教師に雇つたが、死ぬときまで、この人の前では樹の葉のやうに慄へてゐた。『さあ、あの人が若し辭めてしまつたら、私はもうお仕舞ひだ！ さうなつたら私はどうしよう？ どこで他の先生を見つつけよう？ ほんとに、やつとの思ひで近所のお宅からおびき出したんだもの！』と、考へてゐたからである。ピルコッフは利口な男であつたから、直きに自分が獨占的な位置にあることにつけこんで、へべれけになるまで酒を飲み、朝から晩まで寢てばかりゐた。『學問の課程』を終了してから、パンテレイは軍隊に入つた。ワシリ・サ・ワシリ・エヴナはもうこの世にはゐなかつた。彼女はこの重大な事件のある半年前に、恐怖に襲はれて世を去つた。彼女は熊に乗つた白い人を夢に見たのである。エレメイ・ルキッチも間もなく連れ合ひの後を追つた。

パンテレイは父の身體の工合がよくないと知るや否や、後をも見ずに駆けつけたが、たうとう死に目には遭へなかつた。しかもこの御曹子が全く思ひがけなく、今まで考へてゐた裕福な世嗣から、ただ貧乏人に轉化してゐたときの驚きはどんなものであつたか！ 大ていの人ならこんな急激な變轉に堪へられるものではない。パンテレイは粗野になり、冷酷になつた。甘やかされて育ち、怒りつぽかつたとはいふものの、正直で、氣前がよくて、人の好かつた男が、打つてかはつて傲慢な、喧嘩好きな男となり、近所の人とも交際しなくなつた、——財産家には引け目を感じ、貧乏人を忌み嫌つてゐた、——そして誰にも甚だしく尊大に振舞ひ、地方當局に對してさへもさうであつた。『俺は親代々の貴族だ』といつてゐた。或るときなどは、帽子をかぶつたまま彼の部屋へ入つて來たといふので、郡警察分署長をすんでのところで射撃するところであつた。勿論、當局の方でも大目には見てゐなかつた。そして、機會ある毎にその權力のあるところを見せてやつた。しかもなほ彼を煙たがつてゐた。なにしろ恐ろしい痛癢もちで、二言目にはナイフで斬り合ひをしようと申し込むほどだつたからである。極めて瑣細な口答へをしてもチュルトブハーノフの眼は眩んで、聲はとぎれる……。『あゝ、た・た・た・た・た』と彼は口吃る、『こん畜生！』……今にも氣が違ひさうになる！ またその上に正直な人間であつたから、どんなことにも搖き添へを食つたことがなかつた。彼のところへは勿論、誰一人として訪ねて行きはじなかつ

た。けれども、さういふことがどんなにあつたにしろ、彼は善良な氣質をもち、彼一流の偉大な氣質さへも有つてゐた。不公平とか壓制がましいことは他人事の場合でも我慢ができなかつた。また自分の百姓のこととなると全力をつくして庇つてやつた。『何だと？』と、彼は自分の頭を激しく叩いていふ、『内の者に手をかけるつて、内の者に？ おれがチュルトブハーノフでなければ……』

チーホン・イワーマイチ・ネドビュースキンはパンテレイ・エレメーカーキツチのやうに、自分の素性を自慢することができなかつた。父は郷土の出で、四十年間の勤めをした後で、やつと貴族の身分に上ることができた。父のネドビュースキン氏は個人的な憎惡にでも苛まれるかのやうに、冷酷に不幸といふものに逐はれる類ひの人間であつた。生まれ落ちてから死ぬまで、まる六十年の間、碌々たる人間につきものの、凡ゆる貧苦、病疾、災難と闘つて來た。氷のうへに抛り出された魚のやうに七顛八倒し、寢食も忘れ、平身低頭し、駈けずり廻つては落膽し、困憊して、一錢一厘のことにも屈託して、職務のことでは全く『無實の罪』を着せられて職を逐はれ、遂には屋根裏か穴藏かで、自分はもとより子供たちに食べさせる日ごとの糧も一向に得ることができずに死んで行つた。運命は彼を逐ひ立てられる鬼のやうに動きのとれないやうにしてしまつたのである。彼は氣立てのよい、正直な人間であつた。賄賂を取つたとはいふものの、高が十カベイカ

から多くても二ルーブリくらゐまでのものであつた。ネドピュースキンは瘠せた肺病やみの細君があつた。子供もあるにはあつたが、仕合はせなことに、息子のチーホンと娘のミトロドーラを除いてはみな天死してしまつた。その娘は綽名を『商家のハイカラ』といつて、いろんな痛ましい事件、可笑しい事件があつたのちに職をやめてゐる辯護士に嫁いだのであつた。父のネドピュースキンは生前に息子のチーホンを或る役所の雇員として就職させてやつた。けれども父親が亡くなると、直ちに彼は職を退いた。限りも知れぬ狼狽や、寒さや饑乏や、悲痛な闘ひや、母の愁ひにみちた落膽や、或ひは父の懸念から来る絶望とか、宿の主人や小賣商人の無躰な壓迫とか、これらの毎日の絶え間もない辛勞がチーホンのうちにいひ知れぬ臆病さを募らせて行つた。上役の影をちらと見たばかりでも、つかまへられた小鳥のやうに身慄ひして、氣が遠くなつた。こんな工合で彼は職を振り棄てたのである。冷靜な、しかも、恐らくは嘲弄することの好きな自然は、人々に、彼等の社會上の位置とか資産とかには全く一致しない様々な能力や嗜好を植ゑつける。すなはち、自然は持ち前の心づかひと愛情とをもつて貧乏役人の息子チーホンを、多感な、懶惰な、柔和な、物に感じ易い人間に——ただ享樂にのみ適する、嗅覺と味覺のおそろしく敏感な人間に形づくり、……かういふ風に形づくつて、念入りに仕上げをし、やがて——自身の作品が酸い甘藍と腐つた魚を食べて伸びて行くのに任した。さていよいよ伸びた。この作品は、所謂『生活』

をはじめたのである。お慰みが始まつた。あんなにも執拗に、父ネドピュースキンを苦しめた運命は息子にも取りついた。明らかに息子を見込んだのであつた。けれども運命はチーホンを別に取らねつた。運命は彼を苦しめはしなかつた——運命はチーホンを弄んだのである。運命は一度として彼を騙つて絶望に陥らせることもせず、饑乏といふ不面目な苦痛を嘗めさせもしなかつた。ただ露西亞中を、ヴェリーキイ・ウスチュークからツアレーラ・コクシャイスクまで引つ張りまはし、それからそれへと卑しい滑稽な世渡りをして歩かせた。或るときは喧嘩の好きな細續もちの慈善家の奥様のところへ『家扶』として住み込ませ、或るときは金持で守銭奴の商人の家の食客にし、或ひは英國風に髪を刈つた金魚目の旦那の祕書頭に就かせ、或ひは愛犬家のところの家令と道化役とを兼ねたやうな役にも昇らせた……。要するに運命は哀れなチーホンを騙つて、寄生生活の苦い毒汁を、雫も餘さず一滴一滴と飲み乾させたのだ。彼は男盛りの時を有閑な殿方の憂鬱なお慰みや、寝ぼけ顔の、性の悪いお退屈のお相手をして過ごした……。いくたびか、散散に彼をなぶつて楽しんで大ぜいのお客に『もう行つてもいいよ』といはれて、ただひとり自分の部屋へ歸つて来ては身の恥かしさに熱くなつて、眼には絶望の冷たい涙をうかべ、明日はこつそり抜け出して、町へ行つて運試しをしよう、たとひ警役の一寸した位置なりとも見つけ出さう、でなければいつそ一思ひに街なかで餓死をしよう、と誓つたものであつた。しかし、第一

に神様は彼に力を與へてゐなかつた、第二にいつも臆病が付き纏つた、第三には、自分でどうしてうまい位置が見つけれられるのか？ 誰に頼んだらよいものか？ 『とても口は授けてくれまい！』と、不幸な男は寢床のうへに寝がへりを打ちながら呟くのであつた、『とても授けてはくれまい！』さうして次の日になると又もや浅ましい仕事を始める。その上、殆んど滑稽家の商賣になくは適はぬ才能や天稟をよく氣のつく自然さへもほんの芥子粒ほども分けてはやらなかつたので、彼の位置はいよいよ惨めなものであつた。彼は例へば熊の皮の外套を裏返しに着て、へとへとなるまで踊ることもできず、耳のそばで、びしびしと長い鞭の鳴るのを聞きながら、輕口をいつたり、御機嫌とりをしたりすることもできなかつた。氷點下二十度の寒さに素裸で出されて風邪を引いたことも時折あつた。彼の胃の腑はインクやその他の汚いものを混ぜた酒や、細かに刻んで酔をかけた蠅取茸や平茸を消化することはできなかつた。その後、チーホンがどうなつたかは、若し彼の最後の恩人で大分お金を溜めた一手販賣人といふのが、上機嫌のときに思ひ立つて次のやうなことを遺言狀に書き入れなかつたならば、さつぱり分らなかつた筈である。遺言狀には『ジョーヂヤ（チーホンに同じ）ネドピュースキンに永劫末代の所領として拙者の正當に取得せるベスセレンヂェフカ村および一切の附屬地を提供いたすべく候』と書き入れてあつた。それから數日して恩人は蝶鮫のスープを喫べたのが原因で卒中を起こして死んでしまつた。大へ

んな騒ぎになつた。お役人がやつて来て、然るべく財産に封印をした。親類の人達がやつて来て、遺言狀を開けて讀んだ。ネドピュースキンを招びにやつた。ネドピュースキンはやつて来た。集まつた人たちの大部分はチーホン・イワーヌイチがこの恩人のところでどんな役割を勤めてゐたかを知つてゐた。彼が來ると、耳も聾せんばかりの叫びごとと嘲笑的な祝辭を浴びせかけられた。「地主様だ、ほら、新しい地主様だぞ！」他の遺産相続人たちが叫んだ。「なるほど、これは全く」と、名高い剽輕者で洒落の名人が口を挟む、「うむ、全くさうだ……ほんとにさうだ……そのその……その通り……そのその……歴とした相続人だ。」一同はどつと吹き出してしまつた。ネドピュースキンは暫くの間、この僥倖を信じようとはしなかつた。人々は遺言狀を見せてやつた。彼は顔を赧らめ、眼を半ば瞑ちて、兩手を振つて、はらはらと涙を流して泣き出した。一同の笑ひ聲は忽ちにがやがやと激しい怒號に變つた。ベスセレンヂェフカの村は全部で二十二人の農奴から成り立つてゐたので、誰一人としてそんなに惜しいとは思はなかつた。それならばどうしてこの際、面白がらずにゐられようか？ ベテルブルグ生まれの唯一人の相続人で、希臘風の鼻と極めて上品な顔附をし、ロスチスラフ・アダム・ムイチ・シュトッペリといふ嚴めしい男だけは我慢がならず、ネドピュースキンのところへ横歩きに寄つて行つて、横柄に彼を見おろした。「貴方、貴方は拙者の見たるところでは」と輕蔑したやうに、人を食つたやうに言ひ出した、「貴

方はフォードル・フォードルキッチ殿のところにて氣晴らしの、つまり家僕の役をお勤めになつたのでありませうな？」ベテルブルグ生まれの紳士は我慢がならないほど明瞭な、威勢のいい几帳面な言葉でかういつた。ネドピュースキンは調子が狂つて興奮してゐたので、自分の見も知らぬ紳士の言葉など耳に入らなかつた。しかし他の連中は一時にひつそりしてしまつた。例の馴れ者が尤もらしく微笑んでゐる。シュトッペリ氏は手を摩つて前の質問を繰り返した。ネドピュースキンはどきまぎして眼をあげ、口をあいた。ロスチスラフ・アダムイチは毒ありげに軽く隣いた。「おめでたう、あんた、おめでたう、」と彼は續けた、「なるほど、誰だつて、その、こんなことをして日毎の糧を、か・か・か・かせがうとは思ふまいからね、しかし *de sustibus non est disputandum* 趣味のことは兎や角いふもんぢやない つまり誰でもそれぞれの趣味といふものがあるんだから……さうぢやないかね？」

誰か後ろの方にゐたのが、早口に、しかも恭しく、驚き且つ狂喜して、高い聲で讃めたたへた。

「一體、」とシュトッペリ氏は連中全部の笑ひ聲にぐつと乗り氣になつて口を出した、「どんな特別な腕前があつて、こんな好い運にめぐり合はしたんだね？ いや、恥かしがらなくてもいい、言つてごらんよ、ここにゐるものはみんな、いはば身内の、*en famille* 内ものなんだから。ね

え、諸君、ここにゐる者は *en famille* 内もの ぢやありませんか？」

ロスチスラフ・アダムイチが偶然にこの質問の矢を向けた相續人はあいにく佛蘭西語を知らなかつたので、賛成の意を表する微かな唸り聲を出したばかりであつた。そのかはり、も一人の相續人で、額に黄いろい斑點のある若者は急いで、「ええ、ええ、さうですとも。」と調子を合はせた。

「多分、」とシュトッペリ氏はまたいひ出した、「貴方は足を、その、天井へ向けて、逆立ちして歩けるでせうね？」

ネドピュースキンは憂鬱さうにあたりを見まはした、——顔といふ顔には悪意のある笑ひが浮かんで、眼は悉く嬉し涙に濡れてゐた。

「それから多分、あなたは雄鶏のやうに鬨をつくれるでせうね？」

あたりの人がどつと一度に吹き出したが、直ぐにひつそりして固唾をのんだ。

「それから多分、鼻のさきで……」

「止せ！」と、いきなり鋭い甲高い聲がロスチスラフ・アダムイチを遮つた、「弱い者をいぢめて恥かしくはないのか！」

誰もが振りかへる。戸口のところにチャルトブハーノフが立つてゐたのだ。亡くなつた一手販

賣人の四等親の甥にあたるといふので、彼もまた親族會議の招待状を受けたのであつた。遺言状を讀むあひだは、いつもの通り傲然とかまへて一座の中に加はらなかつた。

「止せ！」と、ぐつと反り身になつて、また言つた。

シュトツペリ氏は急に振り返つて見ると、薄ぎたない、見すばらしい身なりをした男だつたので、小聲で隣りにゐた人に訊いた（要心深いことはいつても邪魔にはならないものである）。

「あれは誰ですか？」

「チェルトブハーノフといつて、大した人足ぢやありませんよ。」と、訊かれた方が耳打ちした。ロスチスラフ・アダムイチは横柄な風をした。

「それより、餘計な指圖をするあなたは誰です？」と彼は鼻にかかつた聲でいつて、眼を細くした。「あなたはどんな人足だか、一寸お伺ひしたい。」

チェルトブハーノフは火のついた火薬のやうに爆發した。憤怒のあまり息もとまるほどであつた。

「づ・づ・づ・づ」と首でも緊られてゐるかのやうにいつたが、忽ち雷のやうな聲を出した、

「誰だと？ 誰だと？ 俺はパンテレイ・チェルトブハーノフだ。親代々の貴族だ。五代前の先祖は天子様に仕へたんだ。さういふ貴様こそ何者だ？」

ロスチスラフ・アダムイチは蒼くなつて、後ろに引き退がつた。彼はこんな反抗があらつとは思ひもかけなかつたのである。

「俺あ、人足だ、俺あ、俺あ人足だ！……おお、おお、おお！……」

チェルトブハーノフは激しく前へ進んで來た。シュトツペリはひどくまごついて、跳び退いた。お客たちは憤激してゐる地主のところへどつと押しかけた。

「決闘だ、決闘だ、ハンカチだけの距離を置いて決闘だ！」と、激怒したパンテレイは喚き立てた、「それが厭なら、俺にあやまれ、それから彼にも……」

「あやまんなさい、あやまんなさい、」とシュトツペリの周圍に驚いてゐた相續人達が、もぐもぐ言ひ出した、「あれはあんな狂人だから——悪くすると斬り殺さないとも限らない。」

「濟みませんでした、濟みませんでした、つい存じませんでしたので」とシュトツペリが口ごもりながらいひ出した、「つい存じませんで……」

「彼にもあやまれ！」と腹の蟲の收まらないパンテレイが嘔鳴り立てる。

「あなたにも濟みませんでした。」とロスチスラフ・アダムイチは、熱病にでもかかつてゐるかのやうに慄へてゐるネドビュースキンの方を向いて附け足した。

チェルトブハーノフは落ち着いて、チーホン・イワーマイチのところへ近づき、彼の手をとつ



て、きつとあたりを見まはしたが、誰一人として彼に眼を合はせる者がないので、重々しく、深い沈黙の中を部屋の外に出た、正當に手に入れたベスセレンヂェフカの新しい持主と手を携へて。その日からといふもの、二人は決してまたと離れなかつた。(ベスセレンヂェフカの村はベズソノヲからたつた八露里しか離れてゐなかつた。) ネドビュースキンの限りもない感謝の念は、やがて奴隷のやうな敬虔な氣持にかはつて行つた。弱い、素直な、相當に正直なチーホンは、物に動ぜぬ清廉潔白なパンテレイの前に平身低頭した。「容易なことぢやなからう！」と時をりは獨りで考へる、「知事様とお話をしたり、まともに見るなんて……全く大變なことだ、——それがパンテレイには見られるんだからなあ！」

彼は不思議なほど、心が疲れるほどパンテレイに驚嘆し、彼を世に稀れな、聰明な、博學の士だと思つてゐた。たとひチュルトプハノフの教育がどんなにお粗末であつたにしろ、しかもなほチーホンの教育に較べたら、素晴らしく見える筈であつた。チュルトプハノフは實際に露西亞語で書いたものも少しは讀んだ、佛蘭西語も知つてはゐた。尤もこれは嘗つて瑞西生まれの家庭教師の『Vous parlez français, Monsieur?』あなたは佛蘭西語をお話しますか?』といふ質問に答へて、「私、わかりません」と言つて、しばらく考へてから『Passez』お通りなさい』といふ質問に答へて、「私、わ

兎にも角にも、甚だ機智に富んだ作者ヴォルテールがこの世にゐたといふことや、普魯西のフリ

ードリッヒ大王が戰場に臨んでも偉かつたといふことくらゐは覚えてゐた。露西亞の作家ではデ  
ルジャードヴィンを崇拜し、またマルリンスキイを愛して、最も優秀な牡犬にアムマラット・ベツ  
クといふ名をつけてやつたくらゐであつた……。

この二人の仲間に會つてから數日して私はベスソノヲ村のパンテレイ・エレメーキツチの  
ころへ出かけて行つた。遠くから彼の小さい家が見える。その家は樹木もないところで、村から  
半露里ほど距たつたいはゆる『吹きつ曝し』に、恰も田園に下りた兀鷹のやうに立つてゐる。  
チュルトプハノフの屋敷といつては大きさの違つた古い四軒のあばら家があるだけで、傍屋と  
厩と物置と風呂場だけであつた。どの家も離れ離れになつてゐて、まはりに垣もなければ、門も  
見えなかつた。私の馭者はどこへ馬をつけてよいのか分からないままに、半ば腐つて、塵に塞が  
れた井戸端に馬を停めた。物置のわきに捜せた毛むくぢやらの獵犬が何匹か、斃れた馬を食ひ裂  
いてゐる。恐らくはオルバッサンであらう。獵犬の一匹が血のついた鼻面をあげて、せはしげに  
吠えついたが、また露はになつた肋骨に噛りついた。馬のわきには年ごろ十七くらゐの、ふくれ  
た黄色い顔をした少年がコサツクのやうな服を着て、裸足になつて立つてゐる。少年は自分の預  
かつた犬を、尤もらしく見まもつて、時をり最も食ひしんぼうの犬に鞭をくれてゐる。

「旦那さんは在宅かね？」と私は訊いた。

「どうか知んねえ！」と少年が答へる、「戸をたたいて見らつせ。」

私は馬車から跳び下りて、傍屋の上がり段の方へ行つた。

チェルトブハーノフの住居は極めて物さびしい光景を呈してゐた。丸太は黒くなり、前へ「腹」を突き出してゐる。煙突は崩れ落ち、家の隅々は濕つて腐つて揺れてゐる。くすんだ青灰色の小窓が、むくれかへつて垂れ下がつてゐる屋根のかげから、いふにいはれぬ苦々しい様子をして覗いてゐる。年とつた夜鷹なんか、こんな眼附をしてゐるものだ。私は戸を敲いた。誰も返事をしない。が、戸のむかふで鋭い聲で物をいつてゐるのが聞こえる。

「あか、いと、うた、おい馬鹿、」と噎れた聲でいつてゐる、「あか、いと、うた、えだ、……さうぢやない！ えだ、おほかみ、かがみ！ かがみ！……さあ、こら馬鹿！」

私はもう一度、戸を敲いた。

すると同じ聲が叫んだ、「おはいり、——どなた……」

私は何も無い小さな玄關へ入つた。開け放した扉の向ふにチェルトブハーノフその人の姿が見える。脂じみた麻屑織の寝巻を着て、ゆるいだぶだぶのスボンを穿き、赤い丸帽子をかぶつて椅子に腰かけ、片手で幼い老犬の鼻面を締めつけ、片方の手には一きれの麵麴を鼻の眞上に差し出してゐる。

「あゝ！」と彼は席から起たずに、威厳を保つていつた、「よくおいで下さいました。さあ、どうぞお掛け下さい。いま私はヴェンゾールの奴にかかつてますんで、……チーホン・イワイヌイチ、」と、一段と聲を高めて付け足した、「こつちへ来てくれ。お客さんがいらしたんだ。」

「只今、只今、」と隣りの部屋からチーホン・イワイヌイチが答へる、「マーシャさん、ネクタイを出して下さい。」

チェルトブハーノフは再びヴェンゾールの方を向いて、鼻の上に麵麴を載せた。私はあたりを見廻した。部屋の中には長さの不揃ひな十三本脚の伸縮自在な反つた卓子が一つと、壓し潰された四つの麥稈製の椅子のほかには、部屋の道具は一つもなかつた。昔々、白く塗られてゐた壁も、星模様の黠々を散らして、あちこち剝げ落ちてゐる。窓と窓の間にはマホガニーまがひの大きな木の枠に入れられて、罫の入つた曇つた鏡がかかつてゐる。部屋の隅には煙管と鐵砲が立てかけてあり、天井からは太い黒い蜘蛛の糸が下がつてゐる。

「あか、いと、うた、えだ、おほかみ、」とチェルトブハーノフはゆつくりいつたが、いきなり猛烈に嗚りつけた、「かがみ！ かがみ！ かがみ！……ええ、この間抜け奴！……かがみだ！」

しかし、運の悪い老犬はただ慄へるばかりで、口を開けようとはしなかつた。老犬は痛々しげ

に尻尾を下へ押しつけて坐つてゐた。また鼻面に皺をよせて、がっかりしたやうに眼をしばたいては細くしてゐた。「いかにも御意の通りで！」と、獨り言をいつてゐるかのやうに見える。

「さあ、食べな、そら、取れ！」と、蟲の収まらない主人が繰り返した。

「怯えてるんですよ。」と私は口を入れた。

「それぢや、逐つ拂つちまひませう！」

彼は犬を足で突いた。犬は可哀さうにそつと起きあがつて、鼻の麴麴きれを振り落して、爪立ちして行くかのやうに、ひどく悄氣かへつて玄關の方へ行つてしまつた。悄氣かへるのも無理はない、初めて見知らぬ人がやつて來たのに、その人の前でこんな目に遭はされるのだから。

次の部屋へ通ふ扉が慎ましやかに軋つたかと思ふと、ネドピュースキン氏が入つて來た、愛想よく挨拶をし、微笑みながら。

私は立ちあがつて、お辭儀をした。

「どうぞそのまま、そのままどうぞ。」と彼は口ごもりながらいふ。

二人は腰をおろした。チェルトブハーノフは隣りの部屋へ出て行つた。

「貴方はよほど前に私どもの在所へおいでになつたんでございますか？」とネドピュースキンは眞ましやかに手をかざして咳をし、それから禮儀を重んじて唇に指をあてながら、やさしい聲

でいひ出した。

「先月やつて來たんです。」

「あゝ、さうでございますか。」

私たちは暫く黙つてゐた。

「この節はまことによい日和が續きまして、」とネドピュースキンは盛りかへした、そして何だか天氣がよいのは私のお蔭でもあるかのやうに、有難さうに私を見た、「どうも、作物は素晴らしい出來のやうですよ。」

私はいかにもさうだといふ印しに、頷いた。二人は一寸また黙つてゐた。

「パンテレイ・エレメーキツチさんは昨日、野兎を二匹おとりになりましたね、」とネドピュースキンはやつとのことはいひ出した。まさしく話を引き立たせたいと願つてゐるのである、「いや全くでございますよ、とても大きな野兎でございますましたよ。」

「チェルトブハーノフさんは良い犬をお持ちですか？」

「ほんとに素晴らしいのをお持ちでございますよ！」とネドピュースキンは喜んで返事をする、「まづ縣下第一でございますな。（彼は私の方へ乗り出して來た。）それはさうと、どうでせう！ パンテレイ・エレメーキツチさんは、それあ偉いお方でございますよ！ 何でもお望みに

さへなれば、つまり何でもやらうといふおつもりになれば、立ちどころに、もう御用意が出来て、何でもまあ、拂るんでございますよ。パンテレイ・エレメーキッチさんは、それはもう……」

チュルトプハーノフが部屋に入つて来た。ネドビュースキンはにつこりして、口をつぐみ、「御自身で見たら、はつきりお分かりになります、」とでもいひたげに、彼を見よと眼で合圖をした。私たちは獵の話に耽つた。

「いかがでせう、私んところの犬を御覽に入れたいんですが？」とチュルトプハーノフは私に訊ねたが、返事も待たずに、カルプを呼んだ。

空色の襟に定紋入りの釦のついた緑いろの南京木綿の上衣を着て、頑丈な若者が入つて来た。

「フォームカにさう言へ、」と、ぶつきら棒にチュルトプハーノフがいふ、「アムマラットとサイガを連れて来いつて、きちんとさしてな、わかつたかえ？」

カルプは大口をあいて薄笑ひをして、譯のわからないことをいつて出て行つた。フォームカがやつて来た。髪を綺麗に撫でつけ、釦をしつかり懸けて、長靴を穿いて、犬を連れて来た。私は禮儀を重んじてこの馬鹿な獸たちを賞めてやつた。(獵犬といふものは、どれもこれも極めて馬鹿なものである。) チュルトプハーノフはアムマラットの鼻面へまともに唾をかけてやつた。ところが、犬にはいささかの満足も與へなかつたらしい。ネドビュースキンもまたアムマラットを

後ろから撫でてやつた。私たちは又もや世間話に耽つた。話をするうちにチュルトプハーノフも全く打ちとけて来て、もう威張つたり、鼻息を荒くしたりはしなくなつた。顔の表情が一變した。彼は私をちらと見、またネドビュースキンを見た……。

「おや！」と彼は不意に大きな聲を出した、「何だつて彼女は獨りであつちにゐるんだ？ マー

シャエー・あ、マーシャ！ こつちへ來なよ。」

誰かが隣りの部屋で動くけはひがする。しかし返事はない。

「マーシャ、」とチュルトプハーノフが言葉やさしく繰り返す、「こつちへ來なよ。何でもないから大丈夫だよ。」

扉が靜かに開いて、見ると背の高い、すらりとして、ジプシイらしい淺黒い顔をし、黃褐色の眼に、樹脂のやうに黒い下げ髪をした二十歳ばかりの女が入つて来た。大きな白い齒は厚い眞赤な唇のかげに輝いてゐる。女は眞白な着物を着てゐる。襟もとで金色のピンに留められてゐる空色のショールが、かほそい生粹のジプシイらしい綺麗な手を半ば蔽つてゐる。女は未開の女のやうに、おづおづと、きまり悪さうに二歩ばかり歩いて、立ちどまつて下を向いた。

「さあ、御紹介ませう、」とパンテレイ・エレメーキッチがいふ、「これは妻といふんでもないんですが、妻同様に見ていただきませう。」

マーシャは仄かに顔を赭らめて、困つたやうに微笑んだ。私はできるだけ低く頭を下げた。私はひどく氣に入つてしまつた。大きな半ば透きとほるやうな小鼻に華奢な、鴛のやうな鼻、秀でた眉の勇ましさうな形、蒼白い、ほんの微かに落ち込んだ頬、——すべてこれらの顔の貌は、我儘な情熱と、向ふ見ずな剛膽な氣持を表はしてゐる。結はへた下げ髪の下から、廣い頸筋に、細く艶々しい後れ毛が二すぢ、紡ぎ絲のやうに生え下がつて、——情慾と力を思はせる。

女は窓ぎはへ行つて、腰を下ろした。私はこれ以上、どきまぎさせたくはなかつたので、チェルトプハーノフと話をしだした。マーシャはそつと首を振り向けて、偷むやうに、打ちとけずにすばやく胡散くさげに私を見はじめた。女の眸は蛇の舌のやうにちらちらする。ネドビュースキはその傍に坐つて、何か耳打ちをした。女はまた微笑んだ。微笑みながら、女はいくらか鼻に皺をよせて、上唇を少し上げたが、さうすると猫ともつかない、獅子ともつかない顔附になつた……。

「あゝ、手を觸れるべからずだ、」と、今度はこちらから、しなやかな體つき、窪んだ胸、素早い角々しい身振りを偷み見しながら考へた。

「さあ、どうだ、マーシャ、」とチェルトプハーノフが訊ねる、「何か、お客様に御馳走しなきや、なるまいぢやないか、え？」

「ジャムがありましたよ。」と女は答へる。

「それぢや、ジャムを持つて來な。それからついでに火酒も。それに、いいかえ、マーシャ、と後ろから大聲で呼びかける、「ギターも持つといで。」

「ギターをどうして？ あたし、歌ひませんよ。」

「なんで？」

「歌ひたかないんですもの。」

「え、つまらんことを、いざとなりや、歌ひたくなるくせに……」

「何ですつて？」とマーシャは急に肩を寄せながら問ひ返した。

「頼まれた時にはさ。」と、いささか間諷ついでチェルトプハーノフがいふ。

「あゝ、さうなの！」

女は出て行つたが、問もなくジャムと火酒とを持つて戻つて來て、やがてまた窓ぎはに坐つた。額にはまだ小さい皺が見えてゐて、兩方の眉は胡蜂の觸角のやうに上つたり下がつたりしてゐる……。讀者諸君、諸君は胡蜂がどんなに意地の悪い顔をしてゐるか、見たことがあるでせうか？ ところで、私は考へた、これは一夕立やつて來るわい、と。話がだれて來た。ネドビュースキンは全く口を噤んで、わざとらしい微笑みをうかべてゐる。チェルトプハーノフは息をはず

ませ、眞赤になつて、眼を見開いてゐる。私はもう暇乞ひをしようと思つてゐた……。すると、マーシャが不意に立ちあがつて、いきなり窓をあけ、頭をつき出して、通りがかりの百姓女を憤然として「アクシニヤ！」と大聲に呼びかけた。百姓女はびつくりして、振り向かうとするはずみに滑つて、どつかと地べたに倒れた。マーシャは反りかへつて、聲を立てて大笑ひをする。チェルトブハーノフもまた大笑ひをする。ネドピュースキンは狂喜のあまり金切聲を出しかける。私たちはみんな身慄ひした。電光一閃にして夕立は過ぎる……。空気がまた清涼となる。

それから半時間ばかりは夢中であつた。私たちは子供のやうに喋つたり、ふざけたりした。マーシャはその中でも一番はしゃいでゐた。チェルトブハーノフは寸時もマーシャから眼を離さない。マーシャの顔はいよいよ蒼ざめ、鼻の孔は大きくなり、眸は光りを増し、同時に黒ずんで来た。未開の女が遊び戯れてゐるのだ。ネドピュースキンは肥つた短かい足で雄鴨が雌鴨を追ひかけるやうに、女の尻を跛をひきひき追つてゐる。ヴェンゾールさへも玄關の屋臺の下から這ひ出して来て、闕の上に立つて私たちの方を見てゐたが、急に跳りあがつて吠え出した。マーシャは次の部屋へ飛び込んで、ギターを持つて来ると、ショールをかなぐり捨てて、そそくさと腰を下ろし、頭をあげて、ジブジイの唄をうたひ出した。聲は上の方が鮮われた硝子の鈴のやうに響き、ふるへる。高く激したかと思ふと、微かに消える……。心は楽しく、また氣味わるくもなつて来

る。「アイ・ジキ・ガヴァライ！」……。チェルトブハーノフは踊りに耽る。ネドピュースキンは足踏みしたり、調子をとつて前に後ろに足を出す……。マーシャは火にくべた白樺の皮のやうに、すつかり身體を曲げてゐる。しなやかな指はギターのうへを速かに掠め、淺黒い咽喉はゆつくりと二重に巻きつけた琥珀の頸飾の下に高まる。かと思れば忽ちに歌をやめて、ぐつたりし、厭らしさうに絃を抓る。チェルトブハーノフは立ちどまつて、肩だけを動かしたり、一所でもちもぢしたりしてゐる。ネドピュースキンはと見れば陶器の支那人形のやうに頭を振つてゐる。そのうちに再びマーシャは狂人のやうに身體をしゃんと起こして、胸を張る。チェルトブハーノフはまた、どつかと身をすくめたり、天井までも躍りあがつたり、獨樂のやうに廻つたりして、「威勢よく！」と叫ぶ……。

「威勢よく、威勢よく、威勢よく、威勢よく！」と早口にネドピュースキンは調子を合はせる。その晩おそく私はベスソーノヲを立つた……。

## チエルトブハーノフの最後

1

私が訪れてから二年ほど経つて、パンテレイ・エレメーキツチに災難が——まぎれもなく災難が始まつた。不如意、失敗、さては不運さへも、これまでに幾度か身にふりかかつては来た。しかし、これらに一顧だもせず、彼は相變らず、『帝王のやうに嚴然とかまへて来た』のであつた。然るに今、彼の心を打つた最初の災難は、彼にとつては最も身にこたへるものであつた。マーシャが彼を見捨てたのである。

あれほど見たところは良く慣れてゐたこの軒の下を、何が彼女に見捨てゐる氣にならせたかといふことは——言ひにくい。チエルトブハーノフは最後の日までヤッフといふ綽名の近所の若い退役の鎗騎兵大尉がマーシャの氣變りの原因だと堅く思ひ込んでゐた。パンテレイ・エレメーキツチにいせると、この男は絶えず口髭を撫つたり、無闇矢鱈にボマードをつけたり、仔細ありげ

に馬鹿笑ひをしたりすること位で、マーシャの氣を引いたのだといふ。然しなから、ここではむしろマーシャの血管に流れてゐる放浪性のジブシイの血が更に與つて力があつたと考へなければならぬ。それはさて置き、よく晴れた夏の夕べ、マーシャは少しばかりの身のまはりの物を小さな一包にくるんで、チエルトブハーノフの家を出て行つてしまつた。

このことがある前、三日ばかりといふもの、マーシャは部屋の間で坐つて、負傷の狐のやうに小さくなつて壁にびつたり身をつけてゐた、——ただ絶えず眼を軽く動かしたり、物思ひに沈んだり、眉をびくびくと動かしたり、かすかに歯をむき出したり、我が身を隠すかのやうに兩の手を動かしたりしてゐた。こんな『氣分』になることは前にもあつたことであるが、決して永續きはしなかつた。チエルトブハーノフはそれをよく知つてゐた、——だからこそ自分でも氣にもかけず、女に對しても、どうのかうのとは言はなかつたのである。ところが、家の獵犬番の言葉によつて、最後の二匹の獵犬が『くたばつた』といふ犬小屋から歸つて來ると、ばつたり女中に會つた。女中はふるへ聲でマリヤ・アキンフィエヅナ様が且那樣によろしく申してくれ、どうぞ御機嫌よくお暮らしますやう、私はもう歸つて來ませんからと申してくれと言ひ残して行つたことを注進に及んだ。チエルトブハーノフはその場で二度ほどもぐるりと廻つて、腹れた唸り聲をあげたかと思ふと、直ぐに駈落ちした女のあとを追ひかけた、——序でにピストルを引つ

かんで行つた。

彼は自分の家から二露里ほどして、郡役所のある町へ通ふ街道の、白樺の林のわきで追ひついた。折しも陽は地平線のうへに低くかかつて、あたり一面が、ばつと華やかな眞紅の光りに包まれた、——樹も、草も地面も一様に。

「ヤッフん所へだな！ ヤッフん所へ！」とチェルトプハーノフはマーシヤの影を見つけるや否や唸き立てた、「ヤッフん所へだな！」とマーシヤの傍へ駆けつけながら、殆んど一足ごとによろめきながら繰り返した。

マーシヤは立ちどまつて、振り返つて彼と向き合つた。彼女は光りを背にして立つてゐるので、黒い木で彫刻されたもののやうに、全體が眞黒に見える。ただ兩方の白眼ばかりが銀色の扁桃の核のやうに浮き出してゐる。けれども眼そのもの——瞳——は前よりは一そう濃くなつて來た。マーシヤは小さな包をわきの方へ投げ出して、腕を組んだ。

「ヤッフん所へ行くんだな、この蓮つ葉め！」と繰り返して、チェルトプハーノフは女の肩をつかまへようとした、——ところが眼を見合はせると、怖ぢ氣づいて、そのまま立ちすくんでしまつた。

「ヤッフ様の所へなんか行きませんよ、パンテレイ・エレメーキツチ、」とマーシヤは落ちつい

て靜かに答へる、「ただあなたとはもう一緒にゐられないといふだけですよ。」

「どうして一緒にゐられないんだ？ 何故なんだ？ 俺が何か氣に障ることもしたといふのか？」

マーシヤは首を振つた。「氣に障るなんて、そんなことないわ、パンテレイ・エレメーキツチ、あたし、あなたとこにゐて退屈しちやつたの……、今までのことにはお禮を申しますわ、あたし、どうしても居られないの——どうしても！」

チェルトプハーノフはびつくりした。彼は手で腿を叩きさへもして、跳びあがつた。

「一體、これはどうしたつていふんだ？ 今まで一緒に暮らしてゐて、何の不足も苦勞もなしにゐたものが、急に今さら『退屈しちやつた』の、『お前を棄てる』のと。自分勝手なことをして、手帕をかぶつて——行つてしまふ。奥様も同然に、みんなから奉られてゐたくせに……」

「そんなこと、ちつとも、して貰ひたかないわ。」とマーシヤが口を挟んだ。

「どうして、して貰ひたかないんだ？ 宿なしのジブシイから奥様になり上つて——さうだ、それでも、して貰ひたかないんだ！ どうしてさう思はないんだ、この下司もの奴？ そんなことを俺が本氣にすると思ふのか？ さては裏切りをしようといふんだな、裏切り！」

彼はまた顔をしかめた。



「裏切りなんて、そんなこと考へてやしないわ、これまでだつて、」とマーシャははつきりした聲できつぱりいふ、「あたし、もう言つたぢやないの、退屈で仕様がなかつたんだつて。」

「マーシャ!」とチェルトブハーノフは叫んで、自分の胸を握り拳でなぐりつけた、「さあ、止せ、もう澤山だ、いい加減にいぢめやがつて、……さあ、もう結構だ! ほんとに! だがな、チーシャが何ていふか考へて見い。少しはあれのことを思つてやつても悪くはあるまい!」

「チーホン・イワイヌイチさんへよろしく、それからかう仰つしやつて下さいな……!」

チェルトブハーノフは手を振りあげた、「いや、馬鹿なこと言ふな、行くんぢやない! ヤッフの野郎は待つちやゐないぞ!」

「ヤッフ様は、」とマーシャは言ひかける……。

「あれが何でヤッフさ・まなんだ、」とチェルトブハーノフは口眞似をする、「彼奴は實際、ひどい詐欺師だ、ずるい奴だ、——おまけに彼奴のしやつ面は猿みたいだ!」

まる半時間もチェルトブハーノフはマーシャと押問答してゐた。彼はマーシャのそばへ寄り添つたり、離れたり、女に手を振りあげたり、女に恭しく頭を下げたり、泣いたり、罵つたりしたりした……。 「駄目です、」とマーシャは繰り返した、「あたし、ほんとに悲しくて、……退屈で仕様がなないの。」 だんだんと女の顔は氣が抜けたやうな、殆んど寝とぼけたやうな表情になつて

來たので、チェルトブハーノフは曼陀羅花でも飲まされたのかと訊いたほどであつた。

「退屈なの、」とマーシャは十遍も繰り返した。

「そんなら俺が殺してやつたらどうだ?」と彼は不意に叫んで、ピストルをポケットの中から引き出した。

マーシャは微笑んだ。その顔は生々して來た。

「いいぢやないの? 殺して頂戴、パンテレイ・エレメイキッチ、あなたの御隨意に。けど、あたし決して歸りませんわ。」

「歸らないつて?」とチェルトブハーノフは撃鐵を上げた。

「歸りませんよ、あなた。生きてるうちは、どうしても歸らないわ。一旦さう言つたら、どうしてもさうなの。」

チェルトブハーノフはいきなり女にピストルを掴ませて、自分は地べたに、どつかと腰を下ろした。

「さあ、そんならお前が俺を殺せ! お前がゐなけりや生きてる空はないんだ。俺はお前に厭がられるし、——俺はまた世の中のものみんな厭になつて來た!」

マーシャは身をかがめて、小包を取り上げ、ピストルを草の上へ、銃口をチェルトブハーノフ

の方から除けて、彼のそばへ寄つた。

「まあ、あなた、何をくよくよなさるんですの？　ジプシイの娘がどんなものか御存じないんですか？　あたしたちの氣質はね、こんなものなの、それが當り前なのよ。退屈つていふ奴が来て、仲を割いて、どこか遠い遠い知らないところへ魂を煮きつけてみるのに、どこにじつとして居られますの？　マーシヤを覚えて下さいな、こんないい仲好しは、もうありはしませんよ。

あたしだつてあなたを忘れやしないわ、ね、だ——けど、二人暮らしはもうおしまひよ！」

「俺はお前を可愛がつてたんだ、マーシヤ」とチュルトプハーノフは自分の顔を埋めてゐた指の中で呟いた……

「私だつて好いてたわ、なつかしいパンテレイ・エレメーキツチさん！」

「俺はお前を可愛がつた。今でも無性に、夢中になつて愛してるんだ——。それだのにお前がかうして何のいはれ因縁もなく、正氣で俺を見棄てて置いて、浮世を流浪して歩くなんて、——うむ、さうだ、それで思ひあたる、俺が若しも、こんなさもしい素寒貧でなかつたら、よもやお前は俺を見棄てやしなかつたらう！」

この言葉を聞いて、マーシヤはただ薄笑ひをするばかりであつた。

「まあ、この人はあたしのことを、お金を何とも思はない女だつて、よつく言つてたのに！」

と女は言つて、チュルトプハーノフの肩を力いつばい殴りつけた。

すると彼はひよつくり躍り上つた。

「だがまあ、せめて金だけでも取つてくれ、——こんなに一文なしでどうするんだ？　だがそんなことよりや、俺を殺してくれ！　はつきり言ふけど、一思ひに殺してくれ！」

マーシヤはまた頭を振つた。「あなたを殺すつて？　あたし、あなた、西伯利亞くんたりまで流されるなんて眞つ平ですよ。」

チュルトプハーノフは身慄ひした。「そんなら、ただそれだけで、流されるのが怖<sup>こ</sup>いから、やれないつていふんだな……」

彼はまた草の上に身を投げた。

マーシヤは黙々としてその傍に佇つてゐた。「あたし、あなたがお氣の毒で、パンテレイ・エレメーキツチさん」と溜息まじりにいふ、「あなたは好い人なんだわ、……けど、あたし、どうにも仕様ががないの、さよなら！」

女はくるりと傍を振り向いて二足ばかり歩き出した。夜は既に迫つて、ほの暗い影があたりに立ちこめてゐた。チュルトプハーノフは大急ぎに起きあがつて、後ろからマーシヤの兩脇をつかまへた。

「かうして、このまま行つてしまふのか、この毒蛇め！ ヤッフんとこへ！」  
 「さよなら！」とマーシャは心をこめて、鋭く繰り返して、男の手を逃れて歩き出した。  
 チェルトブハーノフは後ろ姿を見送つて、ピストルの置いてあつた處へ走りよつて、ピストルを引つ摺むや否や、狙ひを定めて、發射した……。しかし撃鐵の弾機に手をかける前に、手が上に引きつてしまつたので、弾丸はマーシャの頭のうへを唸り聲を立てて行つた。女は歩きながら、肩越しに彼を見たが、からかつてでもあるやうに、からだを揺すぶりながら、どんどん歩いて行つた。

彼は頭をかくして、——まつしぐらに駆け出した……

しかしまだ五十歩も走らないうちに、急に釘づけにされたかのやうに、びたりと立ちどまつた。聞き馴れた、あまりにもよく聞き馴れた聲が聞こえて來た。マーシャが歌を歌つてゐたのである。『若き日、うるはし。』と彼女は歌つてゐた。一つ一つの音が哀れにもまた情に燃えて、夕ぐれの空に流れる。チェルトブハーノフは耳を傾けた。聲はいよいよ遠ざかつて行く。消えたかと思ふと、また漂つて來る、やつと聞きわけられるほどではあるが、しかもなほ灼きつけるやうな熱情がこもつてゐた……。

「俺に逆らつてゐるんだ、」とチェルトブハーノフは思つたが、そこでまた思ひ直して、「あゝ、

ちがふ！ あれは俺に永久のわかれを告げてゐるんだ。」と呻くやうにいつた、——さうして涙をはらはらと流した。

翌る日、彼はヤッフ氏の宿にあらはれた。ヤッフ氏は全く世間並の人で、田舎の獨り暮らしを嫌つて、彼の言ひ草によると『出來るだけ御婦人がたに近いところにあつたい』といつて那役所のある町に住んでゐた。チェルトブハーノフはヤッフに會へなかつた。下僕の話によると、彼は前の晩にモスクワへ出立したとのことであつた。

「そんなら、それでいい！」とチェルトブハーノフは憤然として叫んだ、「互ひに謀し合はしてゐたんだ、彼女は一緒に逃げやがつたんだ……が、今に見ろ！」

彼は下僕の止めるのも聞かずに、若い騎兵大尉の居間へ躍り込んだ。居間の中には、長椅子の上の方に、鎗騎兵の制服を着た主人の油繪の肖像畫がかかつてゐる。「あゝ、ここにゐやがる、尾無し猿！」と大聲にどなりつけて、チェルトブハーノフは長椅子の上に跳びあがつた、——それから張りつめた畫布に拳骨を一つ喰らはして、大きな穴を開けてしまつた。

「馬鹿旦那にさう言へ、」と彼は下僕の方を振り向いた、「あいつの汚らしいやつ面がゐない留守に、貴族のチェルトブハーノフ殿が繪に描いた方の面おつに穴をお開けになつたつて、若しまた

腹癒せがしたかつたら、チュルトプハーノフ殿のおいでになるところは知つとる筈だつて！ 知らなきや、俺の方からやつて来るわ！ 海の底へ隠れたつて、猿の畜生、さがし出して見せらあ！」

こんなことをいつて、チュルトプハーノフは長椅子から飛び下りて悠然と引きあげた。

ところが騎兵大尉のヤッフは何一つ腹癒せをしようとはしなかつた——、彼はどこへ行つてもチュルトプハーノフに遭ひさへもしなかつた。こちらはこちらで敵をさがし出さうとも思はなかつたので、まるで話にはならなかつた。その後、マーシャ自身も全く行方不明になつてしまつた。チュルトプハーノフはやけ酒をやり出してゐたが、それもまた『元にかへつた。』しかしここに第二の災難が降りかかつて来た。

といふのは彼の莫逆の友、チーホン・イワーヌイチ・ネドピュースキンが亡くなつたことである。亡くなる二年ほど前から、<sup>からだ</sup>身体がほんたうでなくなつて来た。喘息を病み出して、絶えずぐうぐう寝入りこんで、さて、眼が覺めても、直きに正氣にはなれなかつた。那の醫者は『中風』が来てゐるといつてゐた。マーシャの家出に先立つ三日の間、すなはちマーシャの『氣が鬱いで

ゐた』あの三日の間、ネドピュースキンは自分の持村のベスセレンヂェフカに寝てゐた。彼はひどい風邪をひいたのである。だからマーシャの仕打ちは一そう思ひがけなく心を打つたのである。殆んどチュルトプハーノフその人よりも深くこのことに心を動かされたくらゐであつた。生まれつき素直で、臆病であつたために、自分の友だちに對する優しい憐憫の情と、病的な疑惑の念とのほかには、何にも口に出して言はなかつた……、しかし彼の心にあつた何もかもが切れ切れに、今は力も失くなつてしまつたのである。『あれは私の魂をかきむしつてしまつた』と、あの好きな油漆布の小さな長椅子に腰をかけて、自分の指を捻りながら呟いた。チュルトプハーノフが元どほりになつたときでさへも、ネドピュースキンは元どほりにはなれずに、——『心の中が空虚』なのを感じつづけてゐた。『ここが』と、彼は胃の腑の上の胸の中程を指しながらよく言つてゐた。こんな工合で冬までぶらぶらしてゐた。霜の下りる頃になつて喘息は軽くなつたが、今度はそのかはりに中風も中風、正真正銘の中風に見舞はれた。直ぐに意識を失つたのではないので、まだチュルトプハーノフの見さかひもつき、この友達が『おい、どうしたんだい、チーシャ、俺の許しも受けずに俺を棄てるつもりか、それぢやマーシャよりひどいぢやないか？』と、絶望的に叫ぶ聲にさへも廻らない舌で返事をした、『けど、わしあ、バ……ア……セエ・エ……エ……キツチ、つ……も……あんだの……いふこと……き……ます。』さうはいつたものの、その

同じ日に、郡の醫者の來るのも待たずに、たうとう亡くなつてしまつた。醫者はまだ冷たくなり、切らない身體を見て、悲しくも諸行無常の感にうたれながら、ただ『蝶鮫の燻製を肴に火酒を一杯』欲しいといつただけであつた。かういふことにならうとは、豫て思はれてゐたことであるが、チーホン・イワーヌイチは最も尊敬すべき恩人であり、鷹揚な保護者であつた『パンテレイ・エレメイキツチ・チェルトブハーノフ様』に遺産として自分の財産を譲つてしまつた。しかしそれは最も尊敬すべき恩人には大した利益をもたらさなかつた。といふのは、忽ちにして公賣に附せられて、一部は墓じるしの彫像の費用に廻されたからである。この彫像はチェルトブハーノフが（父の氣ちがひ染みた性質が彼にも現はれたといふことが分かる！）友人の死灰のうへに建てようと思つたものである。そこで、祈れる天使を表すべきこの彫像はモスクワへ註文された。ところが彼に紹介された仲介業者は田舎などに、彫刻に眼の利く者は滅多にあるものではないと獨りぎめして、天使のかはりにフロラの女神で、エカテリナ女王朝時代に出來たモスクワ近郊の庭園、今は見るかげもない或る廢園を永いあひだ飾つてゐたのを送つてよこした、——これについては、充分いはれのあることで、この彫刻はロココ風で、肉附のよい小さな腕や、波をうつ捲髮、露はな胸のあたりの薔薇の花飾りや、しなやかに曲げた姿など、何といつても極めて巧妙には出來てゐるが、それが無代でこの仲介業者の手に入つたのである。こんな譯で、今に到るまで、

この神話的な女神は、優美に片足をあげて、チーホン・イワーヌイチの墓のうへに立つてゐる。そしていかにも氣どつた妙な身振りをして、いつもいつも村の墓場を訪れては、あたりをさまよひ歩く仔牛や羊の群れを見まもつてゐる。

3

親友を亡くしてから、チェルトブハーノフはまた酒をやり出した。今度はもう前よりはずつとひどかつた。すること、爲すことが、全く落ち目になつて行つた。獵をしようにも、やりやうがなく、なけ無しの金は磨つてしまひ、後に残つてゐた召使たちもちりぢりに逃げて行つてしまつた。パンテレイ・エレメイキツチは全く孤獨になつて、自分の胸のうちを打明けるは愚か、ただ一言さへ交はす者もなくなつた。しかも傲慢な氣持ばかりは、少しも減らなかつた。それどころか、悪い状態になればなるほど、彼はいよいよ横柄に、いよいよ尊大に、近づき難いものになつて行つた。彼は遂に全くの人嫌ひになつた。ただ一つの慰め、ただ一つの喜びだけが残つてゐた。それはドン種の灰色のすばらしい乗馬で、彼がマレク・アヂリといふ名をつけてゐたが、これは實に立派な代物であつた。

この馬が彼の手に入つた次第はかうである。

或るときのこと、チュルトプハーノフが馬に乗つて隣りの村を通つてみると、居酒屋のあたりで百姓が寄つてたかつて、何か大聲に喚き立ててゐるのが聞こえて來た。群集の眞ん中で、絶えず頑丈な腕が全く一つとところで、上つたり下がつたりしてゐた。

「何ごとが起きたんだ？」とチュルトプハーノフは、持ち前の命令するやうな調子で、小舎の敷居のところに佇つてゐた百姓の婆さんに訊ねた。

婆さんは居眠りでもしてゐるかのやうに、入口の柱に倚りかかつて、居酒屋の方を時をり見てゐたのである。更紗の襦袢を着て、白つぽい頭をしたいたづら小僧が、糸杉でつくつた十字架をむき出しの小さな胸にかけ、小さな兩足をひろげて坐つてゐるが、この子の固く握りしめた小さな拳は婆さんの木の皮靴の間に置かれてゐる。そこには小さな雛つ子がライ麥の麵麩のかちかちになつた皮に孔をあけてゐる。

「知りましねえよ、あんた、」と婆さんが答へる、——それから前へ乗り出しながら、皺だらけの黝んだ手を男の子の頭にのせて、「何でも、こつちの若き衆が猶太人を打ん擲つてゐるんだつて。」

「どうして猶太人を？ どんな猶太人だね？」

「そら知りましねえよ、あんた。どつかの猶太人がこころさ來たんですよ、どつから來たんだか、誰も知りませえ。ワーシヤ、この野郎、おつ母がとこへ行け、しつしつ、こん畜生！」

婆さんは雛つ子を追つ拂ふ。その間にワーシヤは婆さんの手織のスカートにつかまつた。

「そら見させえ、打つとりますんで、あんた。」

「何だつて叩くんだらう？ 何かしたのかな？」

「そら知んねえ、あんた。きつと、それだけの事したんでしょ。それでなくたつて打つのが當り前でせうね？ あいつは、あんた、基督さまを磔刑にしたんですかかね。」

チュルトプハーノフは大聲をあげて、馬の頸のあたりを太鞭で打つて、まつしぐらに群集の方へ駆け出した。そしてその中へ躍り込んで、その同じ太鞭で右に左に百姓どもを誰彼の見さかひもなしに擲り出した、聲も途切れ途切れに『向ふ……見ずだ！ 向ふ……見……ずだぞ！ 當然、お上の法律が罰するんだ、私事にする……ことぢや……ないんだ！ 法律が！ 法律が！ お……き……てがだ!!』と呶鳴りつけながら……。

二分間とも経たないうちに、群集は早くも四方八方に散り散りになる、——居酒屋の戸口の前の地べたには、小さな瘦せた、薄黒い顔の生物が南京木綿の上衣を着て、髪を振り亂し、苦しめられて、へとへとになつてゐるのが見える、……蒼ざめた顔、ぎよろつく眼、開いた口、……これは何だ？ 恐怖のあまり氣絶したのか、それとも全く死んだのか？

「お前たちは何だつて猶太人を殺したんだ？」とチュルトプハーノフは威しつけるやうに、太

鞭を振り廻しながら、聲高く叫んだ。

群集は力なく唸りごゑをあげて、これに應じた。百姓の中には肩をつかむ者、脇腹をさする者、鼻のあたりを撫でる者がある。

「ずるぶん見事に叩くなあ！」と後ろの列でいつたものがある。

「猶太人をなぜ殺した？」と訊いてるんだ。涼しい顔をしてる外道もの奴！」とチュルトプハーノフが繰り返した。

ところが、そのとき、地べたに寝てゐた生物がひよつこり跳び起きて、チュルトプハーノフの後ろへ駆け寄つて、わなわなと慄へながら鞍の端にすがりついた。

群集の間に一せいに聲を立てて笑ふ聲が起る。

「生きてやがる！」といふ聲が、また後ろの列から聞こえて来た、「まるで猫だ！」

「貴方様、庇つてやつて下せえ、お助けなすつて！」と哀れな猶太人はぼんやり言つたが、そのあひだ、チュルトプハーノフの足に胸をすつかり押しつけてゐた、「さもなきや殺されちやいます、殺されちやいます、貴方様！」

「お前は何だつて虐められるんだ？」チュルトプハーノフが訊ねる。

「それは全くわかりません！ 何でも伺つてる鳥や獸が死にはじめたつて、……それで私を怪

しむんでして、……けんど、私は全く……」

「まあ、そんなことは後でもいい！」とチュルトプハーノフは遮つた、「それよりも、しつかり鞍につかまつて、おれの後をついて来るがいい！ それから貴様ら！」と群集の方を向いて附け足した、「貴様ら俺を知つとるか？ 俺は地主のチュルトプハーノフだ、ベスソーノヲ村に住んでるんだ、——さあ、だから俺を相手取つて訴訟がしたけや、するがいいんだ、——それから序でに猶太人の方も！」

「何だつて訴訟なんぞ致しませう？」と髯の白い、落ち着いた、そのかみの長老そのままの百姓が最敬禮をしながら言つた、(かうは言ふものの猶太人を打つことにかけては、少しも他人にひけをとらなかつたのである。)  
「私どもは、パンテレイ・エレメーキツ様、あなた様の御親切はよう存じて居ります、よいことをお教へいただきまして御禮の申しやうもございません！」

「何だつて訴訟なんぞしますべえ！」と他の連中も調子を合はせる、「けんど、あの外道奴、きつと思ひ通りにして見せる！ なあに、逃がすもんか！ 原つばの兎みてえに、ちやんと見えるんだからな……」

チュルトプハーノフは髯を引つばつて、鼻を鳴らし、——嘗てチーホン・イワーヌイチを救ひ出してやつたときと同じ手口で、迫害者たちの手から救ひ出してやつた猶太人を引き連れ、悠々

と自分の村へ引き上げた。

数日ののち、たつた一人チュルトプハーノフの家に残つてゐた少年が、誰かが馬に乗つて来て、あなたに會つて話をしたいといつてゐると取次いで来た。入口の階段に出て見ると、それはかねて顔見識りの猶太人であつた。立派なドン種の馬に乗つて、馬は庭の眞ん中に泰然と誇りに立つてゐた。猶太人は帽子をかぶらずに小脇にかかへ、足を錠そのものにはかけずに、錠の革にかけつゝ、ぼろぼろになつた長い上衣の裾が鞍の両側から垂れさがつてゐる。チュルトプハーノフを見ると、ちゆつと唇を鳴らして、兩脇を張り、足をゆすぶつた。しかしチュルトプハーノフは彼の挨拶に答へないばかりではなく、却つて憤慨してしまつた。そして見る見るうちに烈火のごとくになつた。疥癬かきの猶太人がわざわざこんな立派な馬に乗つて来るなんて、……何たる無禮ぞや！

「やい、エチオピヤの化け物め！ 泥ん中へ突き落されるのが厭なら、さつさと飛び下りろ！」と彼は嗚鳴つた。

猶太人は早速いはれた通りに、鞍から袋のやうに轉げ落ちた。それから片手で手綱を控へ、に

つこりして、お辭儀をしながらチュルトプハーノフのそばへ寄つて行つた。

「何の用があるんだ？」とパンテレイ・エレメーキッチは鹿爪らしく訊ねる。

「あねたしやま、馬あどんな馬だか、見ていただきたくいんでございますよ。」

と、猶太人は相變らずお辭儀をしながら言ふ。

「ん……さう、……馬あ、いい馬だ。お前、どこから引つ張つて来た？ きつと、盗んで来たんだらう？」

「どうして、そんなことが、あねたしやま！ わたしあ、正直な猶太人でございますで、盗んで来たんぢやござりません。あねたしやまのために手に入れたんでございますんで、ほんとに！ 随分、そらあ骨を折りましたがの！ そのかはり、この馬と來たら！ こんな馬はドン州中さがしたつて、又と見つかるもんぢやありません！ まあ、御覽なしえまし、あねたしやま、何ちふ馬でございませうかの！ さあ、何卒、こちらへ！ ほら……ほら……ぐるつと廻つて、わきから見て下され！ そいぢや鞍を取りませう。どうでございませう！ あねたしやま？」

「馬あ、いい馬だ、」とチュルトプハーノフは平氣を粧ほつて繰り返したが、その胸は早鐘をうつてゐた。彼は既に人一倍に熱心な『駒』の愛好家だつたので、この馬を一目みると、良いか悪いかくらは見わけがついたのである。



「で、あねたしやま、一つ撫でてごらんなせえ！ 頬べたのあたり撫でてごらんなせえ、へ、へ、へー かういふ工合に。」

チエルトブハーノフは氣が進まないかのやうに、馬の頸のあたりに手をかけて、そこを二度ほど叩いて、それから指を鬮甲から背中の方へ移して行つた。やがて腎臓のうへの急所に来ると、その道の人らしく軽くそこを壓した。すると馬は忽ち脊骨を彎曲させて、それから人を食つたやうな黒い目で、チエルトブハーノフの方を流し目に振りかへりながら、鼻を鳴らして、前足を動かした。

猶太人は笑ひ出して、微かに手を拍いた。「御主人様を識つて居りますよ、あねたしやま、御主人様を！」

「さあ、つまらんことを言ふな、」とチエルトブハーノフは忌々しさうに遮つた、「この馬あ、貴様から買はうつたつて、金はなし、呉れるつたつて、猶太人から物は貰ひたくないし、俺は神様が御自身で下さるつたつて、貰ひたかないんだ！」

「どうすて私がわざわざ御進物などを差し上げませうか、とんでもないことでさ！」と猶太人は叫んだ、「お買ひ下せえまし、あねたしやま……銭あ、——お待ち申しますで。」  
チエルトブハーノフは考へ込んだ。

「一體、いくらだと言ふんだ？」と、たうとう彼は呟いた。

猶太人は肩をそびやかした。

「買値で宜しうござりますで。二百ルーブリ。」

馬は二倍くらゐの値はする——いや、ひよつとしたら言ひ値の三倍はするかも知れぬ。

チエルトブハーノフは傍を向いて、熱でもあるやうに欠伸をした。

「ところで金は……何時？」と彼は無理に眉を顰めて、猶太人の方を見ないで訊ねた。

「何時でも、あねたしやまの御都合次第で。」

チエルトブハーノフは頭を後ろに反らしたが、眼は擧げなかつた。「それぢやあ返事にならん。はつきり言ふがいい、ヘロデの子孫め！ 俺が貴様に借金してゐられるか、え？」

「へえ、そんなら申し上げます。」と猶太人は急いで言ひ出した、「六ヶ月の後に……宜しうござりますかの？」

チエルトブハーノフは何とも返事をしなかつた。

猶太人はチエルトブハーノフの顔いろを讀まうとした。「宜しうござりますかの？ 彼奴を既に入れさして戴きませうかの？」

「俺は鞍は要らん。」とチエルトブハーノフはぶつきら棒に言つた、「鞍を外せ、——いいか

え？」  
 「無論、無論、外します、外します、」と悦に入つてゐる猶太人は口ごもつて、鞍を肩に背負つた。

「さて金は、」とチェルトブハーノフは念を押す……「六ヶ月後に。しかも二百ルーブリではなく、二百五十ルーブリやるぞ。黙つてろ！ いいか、二百五十ルーブリだぞ！ よし、俺が借りた。」

チェルトブハーノフはやはり眼を擧げる氣にはなれなかつた。今まで一度だつて、こんなにブライドを酷く傷めつけられたことはなかつた。『きつと進物のつもりなんだ。』と腹の中で考へた、『御禮どころで、引つ張つて来たんだ、この野郎は！』彼はこの猶太人を抱擁してやりたいやうにも思つたが、また打ちのめしてやりたいやうな氣持にもなつた。

「あねたしやま、」と猶太人は元氣づいて、お世辭笑ひをしながら言ひ出した、「露西亞流に裾から裾へお取り下さらにやなりませんの……。」

「もつと言つて見ろ。ヘブライ人のくせに……露西亞流にだど！……おい！ この野郎、馬を引いてつて、既に追ひ込め。それから燕麥でも撒いてやれ。俺はいま行つて見るから。それから、いいかえ、名前はマレク・アデリだ！」

チェルトブハーノフは階段を登つて行かうとしたが、急に踵を返して、猶太人の方へ駆け寄つて、しつかと彼の手を握り緊めた。相手は身を屈めて、唇をさし出した、——が、チェルトブハーノフは後ろに跳びのいて、聲低く「誰にも言ふな！」と囁きながら、戸口の中へ消えて行つた。

5

その日からチェルトブハーノフの朝夕に、主なる仕事、主なる氣遣ひ、主なる喜びとなつたのはマレク・アデリであつた。その可愛がることといつたら、あのマーシヤをすらそんなに愛しはしなかつたと思はれるほどで、ネドピユースキンを愛慕した以上に愛慕してゐた。またその馬といつたら！ 火だ、たしかに火だ、何のことはない火薬だ、——そして昔の日の貴族のやうに莊重なものだ！ どこへ引つ張つて行つても疲れを知らず、よく堪へて、素直で、養ふ費用なんかは知れたものだ。ほかに何も無いとなると、足もとの土でも喜んで噛むくらゐである。並足で行くときには、手に抱かれて行くやうだし、跑足のときには漣にゆられるやうな氣持がするし、飛んで走るときには風さへも追ひつけないくらゐ！ 絶えて喘ぐやうなことはない、といふのは通風口が澤山あるからである。足はまるで鋼鐵だ、いつか躓いたことがあるか知らと思ひ起こして

も、そんなことは一向にない！ 壕だとか柵だとかを飛び越すのは、わけもないことだ。それに何といふ利口な奴であらう！ 主人の聲を聞けば、頭を振り上げて駆け出す。若し、じつと佇つて居れといつて、主人が傍を離れたとする、——さうするともう身じろきだにもしない。それがまた引き返して来たとなると、『私は此處にゐます。』とでもいふやうに微かに嘶きはじめる。それに何物をも怖れない。眞暗な闇の中にでも、吹雪の中にも道を見つける。どんなことがあらうとも他人を傍へ寄せつけない、若し寄るものがあつたら噛みつくであらう！ 犬さへも決して寄りつかうとはしない。若し寄りつかうものなら、忽ち前足で犬の額を打ちのめし、——それで、ぱつたり息絶える。覇氣のある馬だ、だから鞭なんぞは體裁として振ればよいのだ。飛んでもないことだ、この馬に觸るなどといふことは！ いや、もう長々と話すには及ぶまい、——全くの寶物だ、馬ではない！

チエルトプハーノフはマレク・アデリのことを潤飾していはうとしても、さて何といつたらよいのか分からなかつた。それにいかばかり愛撫し、いとほしがつたことであらう！ 毛は銀色に、——それも古いのではなくて、新しく、冴えない光澤をもつた銀色——に輝いてゐた。毛並を掌で撫でてやらうものなら、それこそ天鵝絨のやうだ！ 鞍も、鞍褥も、轡も——ありとあらゆる鞆具が全くしつくりと整つて、きちんとしてゐて、拭き清められ、まるで、繪に描いたやうだ！

チエルトプハーノフは——多くを言ふ必要もあるまいが、——手づから愛馬の額毛を編んでやつたり、鬣や尻尾を麥酒で洗つてやつたり、蹄にさへも一度ならず膏を塗つてやつた……。

よくマレク・アデリに跨がつて、出かけて行く、——近所の人たちのところを廻るのではない、彼は相變らず彼等を避けてゐた、——さうして彼等の畑を通り、屋敷を過ぎて……。遠くから、馬鹿どもに賞めて貰はうといふのだ！ ところが、どこかに獵でもあるとか、富裕な地主が人里はなれた野原で獵をする企てをしてゐるとかいふことを聞きつけると、彼は早速、出かけて行つて、はるか遠くの地平線のうへを、まつしぐらに駆けさせて、美しいのと速いのとで、觀る人をして悉く驚かしめ、しかも誰一人として傍へは寄せつけぬ。或るとき、さる獵好きな地主が従者を一人残らず引きつれて後を追ひかけたが、やはりチエルトプハーノフは遠くへ行つてしまふのを見て、彼はあらん限りの力を出して、全速力で飛ばしながら後ろから、呼びかけた、「おうい、君！ いいか！ 君の好きなものとその馬を交換してくれ！ 千ルーブリも惜しくはない！ 妻もやる、子供でもやる！ 身代かぎりやつてもいい！」

チエルトプハーノフは急にマレク・アデリを後へ退がらせた。獵好きの男が乗りつける。「ねえ、あんた！」と大聲に、「ね、何を上げたらいいか、言つておくれ！ ね！」

「俺が若し天子だつたら、——とチエルトプハーノフは嚴かに言ふ（しかも彼は生まれてこのかた

シエークスピヤのことなんか聞いた例しもないのである。「君はこの馬の代りに君の王國を全部よこすかも知れないが、それでも俺は御免だ！」彼はかういつて、聲高らかに笑ひ出し、手綱を絞つてマレク・アデリをぐいと引き立て、木獨樂か錢獨樂のやうに後足だけで空中をぐるりとめぐらし、さて、進め、進め！と聲をかける。馬は切株の上を電光石火のごとくに越えてゆく。獵好きの紳士（噂によると極めて富裕な公爵であつたとか）は地面に帽子を叩きつけ、どつかと身を投げ伏して、顔を帽子に埋めた！ さうして半時間ばかりも地べたに倒れてゐたのである。チエルトブハーノフはどうしてこの馬を大事にせずには居られよう？ 近所の誰彼に再び彼が立派に鼻を高くし、最後の誇りを示し得たのは實にこの馬のお蔭ではなかつたか？

6

さうかうしてゐるうちにも時は過ぎて、支拂の期日が迫つて來た。それなのにチエルトブハーノフには二百五十ルーブリはおろか、五十ルーブリの金さへもない。どうしたらよいのか、どうして切り抜けたらよいのか。遂に彼は『よし！』と決心した、『若しも猶太人が容赦しなかつたら、若し、どうしても待つ積りがなかつたら、家でも地所でも呉れてやる。さうして俺は馬に乗つて、向いた方へ行つてしまふんだ！ たとへ餓死しようとも、マレク・アデリは手放せぬ！』彼は

ひどく興奮して、瞑想に耽りさへもした。然るに運命の神は、後にも先にもたつた一度、彼にやさしい微笑みを見せた。といふのは遠縁にあたる小母さんで、チエルトブハーノフが名も知らなかつた人が、彼の眼には莫大な額に見える——丁度二千ルーブリを遺言によつて彼に遺して行つたのである！ しかも彼はこの金をいはゆる危機一髪の際に受け取つた。すなはち猶太人が來る前の日であつた。チエルトブハーノフは嬉しくて、まるで氣が違ふばかりであつた。尤も火酒のことは考へもしなかつた。マレク・アデリが手に入つたその日から、酒は一滴たりとも口にしないのである。彼は既に駆け込んで、その仲よしに鼻面の兩側から、皮膚のきはめて柔らかい鼻の孔のうへにまで接吻した。『もう別れなくてもいいんだ！』と彼はマレク・アデリの頸の、よく櫛を入れた鬘の下を軽く叩きながら叫んだ。家に歸つて來ると、二百五十ルーブリを勘定して差し引き、小さな包みに封じ込んだ。それから仰向けに寝て、煙草をふかしながら、残りの金をどう處分したものかと空想した、——つまり、どんな犬を買ひ入れるか、生粹のコストロマ種で、どうしても赤い鹿の子のある奴を買はう！ と。彼はベルフィーシカとさへも、暫く話をし、彼には、縫目に一面に黄色い打紐をつけた新しい短外套を約束した、——そして頗る上機嫌で寢床に就いた。

やがて、好くない夢を見た。マレク・アデリではなく、なんだか駱駝みたいな奇妙な獸に乗つ

て獵に出かけたところであつた。すると雪のやうに白い、白い、眞白い狐がこちらを向いて走つて来た……。彼は鞭をくれようとした、犬をけしかけようとした、——が、手に持つてゐるのは鞭ではなくて、菩提樹の皮でつくつた束子であつた。狐は彼の前を走つて、舌を出して彼をいら立たせる。彼は駱駝から跳び下りたが、躓いて、倒れてしまふ……。直ちに憲兵の手に落ちる、憲兵は總督のところへ招びつける、ところが、よく見ると、その總督はヤッフなのであつた……。チュルトプハーノフは眼がさめた。部屋の中は暗かつた。丁度、二番鶏が鳴いてゐた……。

どこか、遠い遠いところで、馬が嘶いた。

チュルトプハーノフは頭を上げる……。もう一度、微かな微かな嘶きが聞こえて来た。

『あれはマレク・アデリが嘶いてゐるんだ！』と腹の中で思ふ……。『あれは、あいつの嘶きごゑだ！』だがどうしてあんな遠いところで？ はてな……。そんなことはない筈だが……。

チュルトプハーノフは忽ち全身が冷たくなつた。矢庭に寢床から跳ね起きて、手さぐりで長靴や着物をさがし、身支度をした、——枕の下から厩の鍵を引つつかんで、庭へ跳び出した。

7

厩は屋敷の一ばん端のところにあつた。一方の壁は野原の方を向いてゐる。チュルトプハーノフ

フは即座に鍵を錠前にあてがふことができなかった、——手が慄へてゐたのである、——それからまた直ぐには鍵が廻せなかつた……。彼は息を殺して、じつと身動きもせず佇つてゐた。若し、戸の中で何か動きでもしたら！「マレーシカ！ マアレツツ！」と、低い聲で呼んで見た。まるで死のやうな静けさだ！ チュルトプハーノフは思はずも鍵を外した。戸は軋めいて、すづと開いた……。きつと錠をかけてなかつたのだ。敷居を跨いで、もう一度、馬を呼んで見た、——今度は「マレク・アデリ！」と名前をはつきり呼んだ。しかし親しい友達は何とも應へなかつた。ただ鼠が薬の中で、かさこそと音をさせてゐた。そこでチュルトプハーノフは厩の中のマレク・アデリを入れてあつた三つの仕切りの一つへ飛び込んだ。あたりは一寸先も見えないやうな闇であつたが、仕切りの中へさつさと入り込んだ、……。空虚だ！ チュルトプハーノフは頭がぐらぐらし出した。まるで、頭のなかで鐘ががん鳴り出したやうだ。何か言はうとしたが、しゆうしゆうと言ふばかりで、喘ぎながら、膝を折つて、上から下から四方八方、手さぐりにして、最初の仕切りから次の仕切りへ……。やがて干草を天井まで積み上げてある三番目の中へも入り込んだ。こちらの壁に突きあたり、むかふの壁へ突きあたり、ばつたり倒れて、逆しまに轉がつたが、起きあがると、急に半ば開いてゐる戸口から向ふも見ずに庭へ飛び出した。

「盗まれた！ ベルフィーシカ！ ベルフィーシカ！ 盗まれた！」と力の限り喚き立てた。

ペルフィーシカ少年は寝てゐた物置から襦袢一枚で獨樂のやうに飛び出して来た……。

旦那と、たつた一人の小さな下僕とは共に庭の真ん中で、まるで酔ひどれのやうにぶつかつて、狂人のやうにぐるぐる廻つた。主人も事の仔細を話すことができず、下僕は下僕で何の用があるのか合點が行かなかつた。「大變だ！ 大變だ！」と、チェルトプハーノフが呟くと、別當がまた「大變だ！ 大變だ！」と鸚鵡がへしに言ふ。「提灯だ！ おい、提灯をとほせ！ あかりだ！ あかりだ！」といふ聲が、遂にチェルトプハーノフの力ない胸の底から洩れて来る。ペルフィーシカは家の中へ飛び込んだ。

しかし提灯をつけること、火を點すことは並大抵のことではなかつた。硫黄燐寸はその頃の露西亞では極めて珍しいものであつたし、厨へ行つても燃えさしの残りはもう疾うに消えてしまつてゐた、——燧金も燧石も直ぐに見つからず、見つかつても仲々うまくは行かなかつた。チェルトプハーノフは齒をぎりぎり噛みながら、怖ぢ氣づいてゐるペルフィーシカの手から燧を引つたくつて、自分から火を鑽り出した。火花は夥しく飛び散つたが、それよりも夥しく惡態やら、果ては唸り聲までが飛び散つた。それでも火口には火が付きもしないし、ついたと思へば消えてしまふ。折角、四つの頬や唇をふくらまして、力を合はせ、骨を折つても！ たうとう五分間ほどして、やつとのことで、ひしやげた提灯の底に、きたない蠟燭の燃え滓が燃え出した。そこで

チェルトプハーノフはペルフィーシカを連れて、厩の中へ駆け込んだ。提灯を頭の上へさし上げて、見まはしたけれど……

やつぱり何もない！

彼は庭へ躍り出して、あちらこちらと隈なく駆けめぐる、——馬はどこにもゐない！ パンテレイ・エレメーキッチの屋敷を取り圍んでゐる籬は、ずつと前に朽ちはたて、あちこち傾いて、地べたに附いてゐる……。厩のわきは廣さ二尺あまりが間、まるで倒れてゐる。ペルフィーシカはここをチェルトプハーノフに指して見せた。

「旦那！ 御覽なさい、ここを。晝間がかうぢやなかつたんです。それ、杭が地面から出てますよ。して見ると、誰かが引つこぬいたんだ。」

チェルトプハーノフは提灯をさげて駆け寄つて、地面のうへを照らして見た……

「蹄、蹄、蹄鐵の跡、生々しい跡！」と早口に含み聲でいふ、「ここから牽き出したんだ、ここだ、ここだ！」

彼は瞬く間に籬を跳び越えて、「マレク・アデリ！ マレク・アデリ！」と叫びながら、野原の方へ傍目もふらずに走つて行つた。

ペルフィーシカは籬のわきに、狐につまされたやうに、しよんぼりしてゐた。提灯の光りの環

は、忽ち見えなくなつて、星もなく、月もない深い闇の中に吞まれてしまつた。  
 いよいよ幽かに、幽かにチェルトプハーノフのはかない呼び聲が聞こえて来る……。

8

彼が家に歸つて来た時には、朝焼の光りがもう燃え初めてゐた。彼には人間らしい姿は見られなかつた。着物は泥まみれになつて、顔は野性的な怖ろしい相をあらはし、眼附は氣むづかしく、どんよりしてゐた。噎れた聲でペルフィーシカを逐ひやつて、自分は部屋に閉ぢこもつた。疲れはててゐるので殆んど立つてもゐられなかつたが、さうかといつて床に寝みもせず、戸口のわきに椅子に腰をかけて、頭をおさへてゐた。

「盗まれた!……盗まれた!」

それにしてもどういふ手口で泥坊は夜のうちに、この錠をおろした既からマレク・アデリを盗む工夫をしたのか? 晝の日なかでさへも、見知らぬ人は寄せつけなかつたあのマレク・アデリ、——あれを音も聲も立てないやうに盗む工夫を? それから飼犬が一匹も吠えなかつたことは、どう解釋したらよいものか? たしかに犬は全部で二匹、稚い仔犬がゐるだけだ、その二匹も寒いのと腹が減るので、地べたに伏してゐたのであらう、——しかし、それにしても!

「もうマレク・アデリがゐないとすれば、俺はどうしたらいいんだ?」とチェルトプハーノフは考へる、『今は後にも先にもないたつた一つの楽しみを失くしてしまつたのだ、——いよいよ死ぬ時が来た。丁度、金も来たのだから、もう一匹買ふとしようか? けれど、あんな馬がどこへ行つたらまた見つかるのか?』

「パントレイ・エレメーキッチ! パントレイ・エレメーキッチさま」と戸のむかふで、おづおづと呼ぶ聲が聞こえる。

チェルトプハーノフは跳ね起きた。

「誰だえ?」と自分の聲とも思はれぬ聲で叫んだ。

「私です、あなたに雇はれてゐるペルフィーシカです。」

「何用だ? あれが見つかつたのか? あれが歸つて来たのか?」

「いいえ、さうぢやございません、パントレイ・エレメーキッチさま、あれを賣つた猶太人の奴めが……」

「それがどうした?」

「參つたんでございます。」

「ほう、ほう、ほう、ほう、ほう!」とチェルトプハーノフは言つて、それからいきなり戸を

開けた、「ここへ野郎を引つ張つて来い、引つ張つて来い、引つ張つて！」

髪を蓬々に振り亂して、荒々しい風體をした『恩人』が忽然と現はれたのを見て、ペルフィーシカの背後に佇つてゐた猶太人は密かに逃げ出さうとした。しかしチエルトブハーノフは二度ほど跳んで彼に追いつき、まるで虎のやうに喉元にしがみついた。

「あゝ！金を取りに来たんだな！金を取りに！」と猶太人の首を締めつけてゐながら、まるで自分が締めつけられてゐるやうな、嘎れた聲を出した、「夜中に盗んで置いて、晝になつて金を取りに来たんだらう？あゝ？あゝ？」

「冗談ぢやございません、あね……た……しや……ま、」と猶太人が呻き出す。

「さあ言へ、俺の馬はどこにゐる？どこへ隠した？誰に賣つ拂つた？さあ、吐かせ、吐かせ、吐かせ！」

猶太人はもう呻くこともできなかつた。蒼ざめた顔には、恐怖の色さへも消えてしまつた。兩手をだらりと垂れ、全身はチエルトブハーノフに烈しく揺すぶられるので、葦のやうに前後に揺れる。

「金は拂つてやる、そつくり、一文残らずに拂つてやる、」とチエルトブハーノフは呶鳴つた、「しかし直ぐに言はなきや、餘りものの雛つ子みたいに絞め殺してやるぞ……」

「だがもう絞めてしまつたぢやありませんか、旦那、」とペルフィーシカ少年がおとなしく言ふ。

ここでやうやくチエルトブハーノフは思ひ直した。

彼は猶太人の頸を放した。と、猶太人は床にぼつたり倒れた。チエルトブハーノフは彼を引き起こして、ベンチに腰をかけさせ、火酒を一杯、咽喉に注ぎ込んで、——正氣にかへらした。さて、正氣にかへらして、彼と話をし始めた。

話して見ると、猶太人はマレク・アデリが盗難にかかつたことなどは、夢にも知らなかつたことが判明した。それに『最も尊敬するパンテレイ・エレメーキッチ』のために自ら手に入れた馬を盗むといふ法があるものか？

そこで、チエルトブハーノフは彼を厩へ連れて行つた。

二人で厩の仕切りや、秣槽や戸の錠前を吟味したり、干草や藁をひつくり返して見たりして、それから庭へ行つた。チエルトブハーノフは猶太人に籬のわきの蹄の跡を見せたが、——いきなり自分の腿をたたいた。

「待て！」と、彼は叫んだ、「貴様はどこで馬を買つたんだ？」

「マーロアルハンゲリスク郡のヴェルホセンスクの馬市で。」と猶太人は答へる。



「誰から？」

「ヨサックから。」

「待て！ そのヨサックは、若い奴か、年寄か？」

「中年で、落ち着いた人です。」

「それでどんな奴だった？ 見かけはどんな？ きつと狡猾い、べてん師だらう？」

「屹度、べてん師でしよ、あねたしやま。」

「それでどうだ、奴は何て言つてた、そのべてん師は？ 奴は長いこと馬を持つてたのか？」

「なんでも、長いこと持つてたと言つてたやうです。」

「さあ、それぢや、誰が盗む、あいつに決まつてる！ さうぢやないか、おい、こら……貴様の名前は何ちふんだ？」

猶太人はびつくりして、黒い小さな眼をチュルトブハーノフの方へ向けた。

「私の名前は何ちふ？」

「うん、さうだ、貴様の呼び名は何ちふんだ。」

「モーシェリ・レーバです。」

「よし、ぢや、どうだ、レーバ、おい兄弟分、貴様は譚のわかる奴だが、マレク・アデリは元

の主人の外には誰にも身を任せない筈だが！ 盗んだ奴は鞍をおいたり、馬勒を掛けたり、馬衣をとつたりしてぢやないか、——それ、馬衣が干草のうへに置いてあるわ！……全く、家の者みたいに處分してやがる！ 元の主人でなけりや誰が來たつてマレク・アデリが踏み殺してしまふ譯ぢやないか！ 村中を驚かせるやうな大聲を出した筈だ！ なあ、さうは思はんか？」

「御尤も、御尤もでございます、あねたしやま……」

「さあ、さうなりや、何は措いてもヨサックを見つけないやならんことになる！」

「けんど、どうすて見つかりませう、あねたしやま！ 私だつて、たつた一べん會つたばかりで、——今はどこにいますやら、——名前は何ていひますやら？ あい、わい、わい！」と猶太人は垂れかかる毛の房を悲しさに振りながら附け加へた。

「レーバ！」と不意にチュルトブハーノフが叫んだ、「レーバ、俺を見ろ！ 俺は思慮分別がつかなくなつた。俺は正氣ぢやないんだ！ お前が手傳つてくれなきや、俺はもう手が出ないんだ！」

「けんど、どうすて、私なんぞにできませう……」

「まあ、俺と一緒に往つて、泥坊を探さう。」

「けんど、どつちさ行つたもんでございませう？」

「馬市へ行つたり、往還や、細道や、馬泥坊んとこや、町や、村や、農園や——どこへでも、どこへでも行くんだ！ 金のことは心配するな、俺は、兄弟、遺産が手に入つたんだ！ おれは一文なしになつても、大事な馬を見つけるぞ！ あのコサックの奴め、あの敵め、逃がすもんか！ どこへ行つたつて、ついて行くわ！ 土の下へかくれりや、こつちも土ん中へ入つてく！ 悪魔んとこへ行きや、こつちは魔王がところへ行くんだ！」

「まあ、どして魔王のとこへなんか」と猶太人が言ふ、「そんなことしなくても大丈夫でございますよ。」

「レーバ！」と、チュルトプハーノフは言葉を引きとる、「レーバ、貴様は猶太人で、貴様の信仰は穢らはしい、——けれども貴様の魂は多くの基督教徒のよりは、ずつと立派だ！ おれを不憫だと思つてくれ！ おれは一人ぢやどうにもならん、一人ぢや、とてもやりきれん。おれは癩癩もちだ、——ところが貴様の頭腦は、すばらしい頭腦だ！ 貴様たちの種族はみんなさうだ。學問をしなくつても何でもわかる！ 貴様は、きつとどこから俺が金を出して來たのかと疑つてるんだらう。まあ、おれの部屋へ行かう、有金を全部見せてやるから。貴様は金を取つてもいい、頸から十字架をはづしてもいい、ただマレク・アデリだけは取り返してくれ、取り返して、取り返して！」

チュルトプハーノフはまるで熱病やみのやうに慄へてゐた。汗がだらだらと顔を濡れて、涙にまじつて、鼻の中に消える。彼はレーバの兩手を握つて、ひたすら哀願し、殆んど接吻しようと思つた……彼は無我夢中であつた。猶太人はそれを拒んで自分にはどうしても他所へ行くことができない、自分には仕事があるのだといふことをいつて聞かせようとした、……が、駄目だつた！ 何を言つてもチュルトプハーノフは耳をかさうとはしないのだ。どうにもかうにも手がつけられず、哀れにもレーバは同意しなければならなかつた。

翌る日チュルトプハーノフは百姓馬車に乗つて、レーバと共にベスツノフの村を出立した。猶太人は相當に困つたやうな顔附をして、片手で丸太につかまり、瘦せこけた身體をかたごとと揺れる腰掛の上に躍らせ、片方の手を、新聞紙で包んだ手形の小包の入れてある懐のところへ押しあててゐた。チュルトプハーノフは彫像かなんぞのやうに坐り込んで、眼ばかり四方にくぼりながら、胸いつばいに息をついてゐた。腰には短刀をさしてゐる。

「さあ、俺と馬との仲を割いた悪黨め、用心するがいいぞ！」と街道へ出ながら、呟いた。家の世話はベルフィーシカと、彼が同情して自分のところへ引き取つた耳の遠い、年をとつた煮焚き婆さんとに任せて置いた。

「マレク・アデリに乗つて歸つて來るぞ、」と別れるとき二人に言つた、「さもなきや、もう決

して歸つて来ないんだ！」

「その時あ、おきにお前は俺と結婚するんだが、のう！」とペルフィーシカは料理番の脇腹を肘でこつきながら冗談をいつた、「どつちにしたつて、おんなじだ、旦那様のお歸りを待つても仕方なし、さもないや、ふさぎの蟲にやられて死んぢまふんだ！」

9

一年は過ぎた……まる一年。パンテレイ・エレメーキッチについては何の消息もなかった。料理番の婆さんは死んでしまひ、ペルフィーシカももうこの家を捨てて町へ出ようと企ててゐた。町には理髪店に見習奉公をしてゐる従兄弟がゐて、頻りに来いと勧めて来てゐたのである。——すると不意に、彼の主人が歸つて来る！ といふ噂がひろがつた。教區の補祭はパンテレイ・エレメーキッチ自身から手紙を受け取つた。その中にはベスソーノヲに歸るつもりだといふことを知らせ、近いうちに歸るから萬事よろしく整頓して置くやうに下男に前以て知らして置いてくれと依頼してあつた。この言葉を、ペルフィーシカは埃でもあつたら少し綺麗にして置けといふ意味に解したが、しかし、彼はこの報らせにあまり信用を置かなかつた。ところが、五六日にして、まぎれもないパンテレイ・エレメーキッチがマレク・アデリに乗つて庭に現はれたとき、初めて

補祭のいつたことが本當だつたことを眼の前に見せつけられた。

ペルフィーシカは主人のところへ駆け寄つて、——錠に手をかけながら、馬から降りるのを手傳はうとしたが、主人は自分で跳び下りて、あたりに勝ち誇つた眸を投げかけ、聲高らかに叫んだ、「マレク・アデリをさがし出すといつたが、敵の邪魔、運命の邪魔さへも物ともせず搜し出して来たぞ！」ペルフィーシカは彼のそばへ歩み寄つて、手に接吻した。しかし、チュルトプハーフは自分の召使の熱い心づくしは何等の注意をも拂はなかつた。マレク・アデリの手綱をとつて自分の後ろに従へながら、彼は大股に既の方へ向いて行つた。ペルフィーシカはしみじみと主人を見まもつたが、心は怖ぢ氣づいて来た、「あゝ、この一年の間に何てお捜せになつたことだらう、年もお取りになるし、——それにお顔も何ていふ殿い、怖ろしいお顔になつたのだらう！」よそから見たら、パンテレイ・エレメーキッチは兎に角目的を達したのだから、喜んでゐる筈だと考へられる。たしかに喜んでゐた……、だがやはりペルフィーシカは怖ぢ氣づく。彼は不氣味にさへもなつて来た。チュルトプハーフは元の仕切りに馬を入れて軽く尻をたたいて言つた、「さあ、また家へ歸つて来たんだよ！ よく氣をつけろよ……」その日、彼は納税の義務のない水呑百姓の中から信用のおける番人を雇ひ入れ、自分はまた自室に引きこもつて、もとのやうな暮らしをし始めた……。

尤も全部が全部、元通りではなかつた、しかしこれについては、またあとで……。

かへつた翌日、パンテレイ・エレメーキッチは、ペルフィーシカを呼びつけた、ほかに別に話の相手もゐなかつたので、——いふまでもなく元のやうに自身の威厳を見せようといふ氣持を失はずに、低音で、——どういふ風にしてマレク・ア德里を捜しあてることができたかを彼に物語り始めた。話をする間、チエルトブハーノフは窓の方に顔を向けて坐り、長いパイプで煙草を吹かし、少年のペルフィーシカの方は戸口の敷居の上に、兩手を後ろに廻しながら立つてゐた、——恭しく主人の後ろ頭を見つめながら、彼は主人の話聞いてゐた。話によると、いろいろと無駄骨を折つたり、あちこちと乗り廻したあげく、パンテレイ・エレメーキッチはたうとうロームヌイの馬市へ来てしまつた。この時はもうたつた一人で、猶太人のレーバは連れてゐなかつた。レーバは氣が弱いので辛抱し切れず、逃げてしまつたのだ。それから五日目に、ここを立ち去るつもりで、これが最後と小馬車のずらりと並んだ傍を歩いてみると、三頭の馬の間に、轅につけた粗布に繋がれた馬を見た、——マレク・ア德里を見たのだ。一目見てさうだと思ひ——マレク・ア德里もまた彼を見わけて嘶き出し、逃げようと努め、蹄で地面をかきむしり出したといふ。——「ところがコサックのところに居たんぢやないんだ、チエルトブハーノフは振り向きもせず、例の低音で話しつづける、「ジプシイの博勞がもつてゐたんだ。むろん俺は直ぐに自分

のものになつたつもりで、無理にでも取り戻さうとしたんだが、ジプシイの畜生奴、熱湯でもかけられたみたいに廣場いづばい聞こえるやうな聲で喚きやがつて、この馬は神かけて或るジプシイから買ったのに相違ないと言ひ出した、——盗んだといふなら證人を出してくれといふんだ、……俺は忌々しくて仕方がなかつたけれど、たうとう金を拂つたよ、なあに構ふもんか！俺には自分の馬を見つけ出したといふことと、心の落ち着きを得たといふことが何よりなんだからな。それはさうとカラチェフ郡ではレーバのいふのを眞にうけて、ある男をコサックと間違へちやつて、俺の馬を盗んだ奴だと思ひ込んで、奴の顔をいやといふ程なくつてやつた。ところがコサックと思つたのが坊さんの息子だと分かつて、賠償金を取られたんだ、——百二十ループリも。なあに、金なんか欲しけりや、いつでも手に入る。おれはマレク・ア德里が舞ひ戻つて來たのが何よりなんだ！おれは今幸福だ、——おれは平和な暮らしを楽しんで行かう。ところでペルフィーシカ、お前には一言いつとくがな、よもやそんなこともあるまいが、若しもこの界限でコサックの姿を一目でも見たら、即刻、なんにも言はずに飛んで來て、おれに鐵砲を渡せ。さうすれば、俺がはいやうにするからな！」

かういふ風にパンテレイ・エレメーキッチはペルフィーシカに話をしたのであつた。口ではこんなことを言つたものの、胸の中は、彼が言つて聞かせたほどには安らかではなかつたのであ

悲しいかな！心の底では、連れて歸つたこの馬が、確かにマレク・アデリであるとは、充分に信じ切つてはゐなかつたのだ。

パンテレイ・エレメイキツチに氣の晴れやらぬ時がやつて來た。取りも直さず平和を楽しむといふことが殆んどできなかつたのである。たしかに良い日も幾日かはあつた。さういふ日には胸に懐いてゐる疑惑などといふものは、ほんの囁言なげごとのやうに思はれて、うるさい蠅を追ふやうに馬鹿らしい考へを追ひ拂ひ、あまつさへ自分自身を嘲りもした。しかし、また悪い日もめぐつて來た。執拗な考へがこつそりとまた床下の鼠のやうに忍んで來て、彼の心に孔をあけたり、こそいだりし始める、——さうして、彼は人知れぬ苦痛に惱まされた。忘れもしないあのマレク・アデリを捜し出した日には、チュルトブハーノフはただ恵まれた喜びを感じるばかりであつた……。しかし、翌る朝、その旅籠屋の低い櫓の下で、一晚中寄り添つて寝たこの拾ひ物に鞍を置きかけたとき、はじめて何ものかが彼をちくちくと刺したのであつた……。彼はただ首を振つた、——それにしては種は既に蒔かれてゐたのだ。歸りの旅の間（一週間ほどつづいたが）は疑惑の

念は滅多に湧いて來なかつた。それが一たびベスツノヲに歸るや否や、もとの擬ふかたなきマレク・アデリが棲んでゐたそのところにやつて來るや否や、疑ひはいよいよ強く、いよいよはつきりして來た……。途中は、ゆるゆると、揺られながら乗つて來て、あちらこちらを眺めながら、短かいパイプで煙草をふかし、何一つ考へもしなかつた。ただひよつこりと、『チュルトブハーノフのしようと思ふことは——何でも叶ふんだ』と、心の中で考へては微笑みをうかべるだけであつた。さて、家へ歸つて來ると、萬事の調子がまるで別になつた。もとより彼はこれらのことをすべて、自分の胸ひとつに秘めてゐた。ただ自尊心のみでも内心の恐慌を言葉に現はさうとはしなかつたであらう。彼は今度の新しいマレク・アデリが元のと違ふやうな氣がするなどと、遠まはしにでもほのめかす者があつたら、その人を『眞つ二つに引き裂いた』であらう。彼はやむを得ず顔を合はせる二三の人から『うまく見つけ物をした』お祝ひの言葉を述べられた、しかし強ひてそんな祝辭を言つて貰はうとはしなかつた。彼は以前にもまして人と不意に出會ふことを避けてゐた、——これは悪い兆きざしであつた！彼は絶えず、若しこんなことが言へるならば、マレク・アデリを試験して見た。野原のどこか、少し遠いとまろへ乗り出して試して見たり、こつそり既に入つて、あとから戸を閉めて、馬の鼻先に立つて、じつと馬の眼を見て、聲低く「お前かえ？ お前かえ？ お前か？……」と訊いたりする。さもない時には何時間もの間、黙々とし

てじつと馬を眺めてみた、時には心も楽しく、「さうだ！ あれだ！ むろん、あれだ！」と呟いたり、さうかと思ふと、或るときは狐につまされたやうに、どきまぎさへしながら眺めてみた。チェルトブハーノフはこのマレク・アデリとあのマレク・アデリとの肉體上の相違に、それ程は心を亂されなかつた……、尤も幾分の相違がない譯ではなかつた。あれの尾と鬣は、も少し薄かつた。耳はもつと尖つてゐた。膝關節はもつと短かく、眼はもつと明かるかつた、——しかしこれはただ、さういふ氣がするのかも知れぬ。けれどチェルトブハーノフは精神上の相違ともいふべきものに心をみだされた。あれの習慣はこれのとは違つてゐた。癖が全くあれの癖と同じだとはいへない。例へば、あのマレク・アデリはチェルトブハーノフが既に入るや否や、いつもきまつて、あたりを見まはして靜かに嘶いたものだ。ところがこれは何ごともなかつたやうに干草を嚼むか、——頭を垂れて微睡んでゐる。二匹とも主人が鞍から飛び下りるときには、しやんと停まつてゐるが、あれは呼ばれると直ぐに聲のする方へ歩いて來たのに、これは矢張り切株のやうにじつと立つてゐる。あれも早くは走つたが、これよりは高く、大足に跳んだ。これはもつと伸び伸びとゆつくり歩き、跑をふむのにくらぐらと、——時をり蹄鐵で『がたついた。』——つまり、後足を前足にかち合はせるのだ。あれは決してそんな見つともないことはしなかつた、——とんでもないことだ！ これは——チェルトブハーノフにはさういふ氣がした、——いつも實

に馬鹿らしく耳をびくびくやつてゐるが、あれは反對だ。片方の耳を後ろに反らして、じつとそのまま、主人の見張りをしてゐる！ あれは身のまはり汚ないと見れば、すぐに後足で仕切り、の壁をこつこつやる。これは平氣なものだ、——腹のところまでも糞を積み上げる。あれは、早い話が、風に向つて立たせておくと、肺いつばいに息を吸つて、體をゆすぶつたのに、これは引つきりなしに鼻を鳴らすばかりだ。あれは雨が降つて濕けると弱つたのに——これは何とも思はない、これはずつとがさつだ、どうもがさつだ！ あれのやうに氣持のいい所はなく、それに、馭しにくい、——これは確かな話だ！ あの馬は可愛かつたが、この馬は……

チェルトブハーノフは時折こんなことを思つたが、こんな考へは彼にはひどく辛いものであつた。さうかと思ふと或る時はまた開墾したばかりの野原を全速力で走らせたり、水に洗はれた深い谷のどん底に跳び下りさせて、また最も峻しいところを通つて上らせる。彼の心は歡喜のあまり茫然となる。聲高い叫び聲が唇を突いて出てくる。そこで、はつきりと、はつきりと、自分がいま乗つてゐるのは、まぎれもない正真正銘のマレク・アデリだときめてしまふ。なぜといつて、こいつのやるやうな藝當を、どうして、ほかの馬に出来るものか？

とはいへ、災難や不幸は通り過ぎてはくれなかつた。マレク・アデリを永い間さがし歩いたので、チェルトブハーノフはかなりの金を磨つてしまつた。今はもうコストロマ種の獵犬のことな

ど夢にも思はず、昔のやうに、たつた一人で、あたり近所を乗り廻してゐた。すると或る朝、チェルトブハーノフはベスソーノフから五露里ばかりのところ、一年半ほど前にあんなに威勢よく、まつしぐらに駆けて見せたあの公爵の獵仲間にはつたり會つた。さうして、丁度あの時のやうに今も、野兎が斜面の地境から、急に飛び出して犬の前にあらはれるといふやうな場面が、詭らへ向きに生じたのであつた。「それ、逃がすな、逃がすな！」獵師たちは一せいに駆け出した。チェルトブハーノフも駆け出した、——連中とは一緒にならず、二百歩ばかり側へ寄つて、——今もなほ、あの頃と同じやうに人を遠ざけて。大水に穿たれた巨きな窪みが勾配を斜めに斷つて、いよいよ高くなるにつれ、次第に狭くなり、チェルトブハーノフの行く手をさへぎる。今、飛び越さなければならぬところ、——一年半前には、たしかに飛び越したところ、——そこはやはり八歩ほどの廣さがあり、深さは十四尺ほどある。勝利、まことに素晴らしい方法をもつて繰り返さるべき勝利を豫感して、チェルトブハーノフは誇りに掛け聲をかけ、太鞭を振り廻した、——獵人たちも馬を走らせたが、彼等は勇敢な騎手に絶えず眼をつけてゐた、——彼の馬は矢のやうに飛ぶ、——さあ、窪みは鼻先にあらはれた、——さあ、さあ、一いきだ、あの時のやうに……！

しかしマレク・アデリはびたりと停まつて、左へぐるりと廻り、チェルトブハーノフが窪みの

方へ頭を引つ張つたのにも拘らず、斷崖に沿つて走り出した……。

馬は怖ぢ氣づいたのだ、つまり、自信がなかつたのだ！

そのとき、チェルトブハーノフは羞恥と憤怒の念に燃えて、泣かんばかりに手綱をおとし、ただ馬の行くにまかせて前へ前へと走らせた。獵仲間の嘲笑するのを聞きたくない、いや、そればかりではなく、彼等の呪はしい眼を一時たりとも早く逃れたいと、彼等を遠ざかり、いよいよ遠ざかつて、山の方へと駆けさせた。

脇腹を傷だらけにされて、口にシャボソンの泡のやうな泡をいつばいに吹いて、マレク・アデリ

は家にあたふたと歸つて來た。チェルトブハーノフは直ぐに自分の部屋に閉ぢこもつた。

『いや、あれぢやない、あれは俺の仲好しぢやないんだ！ あれなら頸を挫いても、俺を裏切る舌がない！』

次のやうな出來事が、たうとうチェルトブハーノフをいはゆる『やりこめて』しまつたのである。ある日、彼はマレク・アデリに乗つて、ベスソーノフの屬してゐる教區のお寺を圍む坊さんの屋敷の裏庭を通り抜けた。チェルケス風の毛皮の帽子を目深にかぶり、背をまるめて、兩手を

鞍の前輪にゆるく垂れて、彼はゆつたりと進んで行つた。心の中は楽しくもなく、ぼんやりしてゐる。ふと誰かが彼に呼びかけた。

彼は馬をとめて、頭を上げた。見ると、かねて往き來をしてゐる補祭であつた。鶯色の三角帽を、お下げに編んだ鶯色の髪の上にかぶつて、黄いろい南京木綿の上衣を着、腰よりもずつと下に空色のきれはしを締めて、祭壇のお勤め人は、『積業』を見に出て來ると、パンテレイ・エレメーキッチを見つけたので、彼に敬意を表し、序でに何かせびるのが彼の義務だと考へた。知つての通り教會の人などといふものは、何か、かういつたやうな下ごころがなければ、俗聞の人などと話をするものではない。

しかし、チュルトプハーノフは補祭なんかには何一つかまはなかつた。彼は相手がお辭儀をしたのに、ちよつと應へたばかりで、何かしら口の中でぶつぶつ言つて、早くも鞭をあててゐた……。

「いや、どうも、あなたの馬は素晴らしい！」といつて、補祭は急いで附け足した、「全くこれは御自慢なすつてもいい。實にあなたはすばらしい智慧のあるお方だ。全く獅子のやうですわい！」この補祭殿は雄辯を誦はれてゐる。これには司祭もひどく忌々しがつてゐた。といふのは自分が頗る口下手で火酒を飲んでさへも舌が廻らなかつたからである。「悪人どもの姦計によつ

て、一個の命あるものを失くされても」と補祭は續ける、「いささかも失望することなく、むしろ反對に一そう神の攝理を御信仰に相成り、また別の、何等劣るところなき、いや却つて優つてゐると申してもよい位の御入手遊ばされた、……といふのも……」

「何を吐かしやがるんだ？」と不機嫌さうにチュルトプハーノフは遮つた、「別の馬とは何だ？これは同じ馬だ、これはマレク・アデリだ、……俺が見つけて來たんだ。ほざいてけつかる、たはけ奴……」

「おや！ おや！ おや！ おや！」と補祭は指で髯を弄び、色の淡い、貪るやうな眼でチュルトプハーノフを見つめながら、さも面倒くささうに、力をいれていふ、「それは又どうしてです、あなた？ あなたの馬は、たしか去んぬる年の聖母祭の二週間ほど後に盗まれたわけでした、只今は十一月も末つ方なのですからな。」

「うむ、それがどうしたといふんだ？」

補祭はやはり指で髯を弄んでゐる。

「つまり、あれから一年の餘も經つて居ります。それで貴方の馬はあの時分は圓い灰色の斑がありましたかな、丁度いまも、いや却つて濃くなつたやうで。それがどうした？ と申しますると、灰色の馬といふものはな、一年も經つて大たい白くなるものでしての。」



チュルトブハーノフはぎよつとした……、誰かが猪槍で胸を突いたかのやうだ……。たしかにさうだ、灰色の馬は色が變る！　こんなたわいもないことを、どうして今まで氣がつかかなかつたのか？

「ええ、この畜生！　退きやがれ！」と彼は忿怒の眼を光らせて、だしぬけに嘔鳴りつけた、——と思ふ間もなく、いたく呆れてゐる補祭の眼には見えなくなつてしまつた。

さあ！　何もかもお仕舞ひだ！

今や全く何もかも終り、何もかも打ちこはされて、最後の札が投げられたのだ！　何もかもが、『白くなる』といふ一つの言葉によつて、立ちどころに崩壊したのだ！　灰色の馬は白くなる！

跳んで行け、跳んでゆけ、畜生奴！　いくら跳んだつて、この言葉から逃げられないんだ！　チュルトブハーノフは家に馳せ歸つて、再びかたく閉ぢこもつた。

12

このやくざな馬はマレク・アデリではないこと、これとマレク・アデリとの間には、ほんの少しの似通つたところもないこと、一寸でもこの道のことのわかる人ならば、一目見た時からこれ

くらゐのことは見分けた筈だといふこと、チュルトブハーノフは甚だたわいもない手に乗せられたのだといふこと、——否！　わざわざ、前からそのつもりでゐて、自らを欺き、自ら我が眼をつむつてゐたのだといふこと、——これらすべてのことに今はもういささかの疑ひもさし挟む餘地がなくなつてゐた！　チュルトブハーノフは部屋の中を行つたり來たり、壁ぎはまで行くと相も變らず踵でくるりと向き直る、まるで檻の中の猛獸のやうに。彼の自尊心は堪へられぬほどに酷く傷めつけられた。けれど、辱かしめられた自尊心の苦痛のみが彼を惱ましたのではなかつた。彼は絶望の念に捉へられた。憤怒に胸がふさがつた。復讐の渴望に燃えてゐた。それにしても誰に反抗するのか？　誰に恨みを晴らすのか？　猶太人にか、ヤッフにか、マーシャにか、補祭にか、コサックの盜びとにか、近所の人たち全部にか、ありとある世の人々にか、乃至は自分自身にか？　彼は全く譯がわからなくなつて來た。最後の札は死物しにものにされたのだ！（この比喩は彼の氣に入つた。）そして彼はまた世の中で、最もつまらない、最も淺間しい人間、みんなのお笑ひ草、道化者、浮かばれない馬鹿者、あの補祭の奴の嘲笑の的となつた！　心に描いて見れば、あのけがらばしい坊主めが灰色の馬のこと、愚鈍な且那のことを話してゐるのが、はつきりと眼に見えるやうだ……。あゝ、忌々しい！……チュルトブハーノフは、むらむらと湧いてくる癩癩を抑へようとしても抑へられなかつた。この馬は……たとへマレク・アデリではないにしても、や

はり……いい馬で、これからさき何年か役に立つかも知れないと、強ひて思つて見ようとしたが、駄目だった。そこで、この考へを憤然と押し退けてしまつた。たしかに、こんなことを考へるのは、それでなくても自分が濟まないと思つてゐるあのマレク・アデリに、新しい侮辱を加へることになるのだ……。たしかにさうだ！ このやくざな代物を、この驚馬を、彼はまるで盲目、間抜けのやうに、あのマレク・アデリと同等に見てゐたのだ！ それに、このやくざ馬に、これからさきどれだけの役目が果せるにせよ、……二度とおめおめ乗つてなどやるものか？ いや、どんなことがあつても！ 決して!!……この馬は韃靼人にくれてやる、犬の餌食にくれてやる、……それくらゐの値打しかないんだ……。さうだ、それが關の山だ。

二時間もつともチュルトプハートノフは部屋の中をぶらついてゐた。

「ベルフィーシカ！」と彼はだしぬけに號令した、「即刻、酒屋へ飛んでゆけ、火酒を半ヴェド口ほど持つて來い。いいかえ？ 半ヴェドロだ、早くしろ！ 今の今、ここで火酒が要るんだぞ。」

火酒は間もなくパンテレイ・エレメーキツチの卓子のうへにあらはれて、彼はぐびりぐびりとやり出した。

若しもこの時チュルトプハートノフを見た人があつたら、若しも憤怒の色も澁々と、一杯また一杯と飲み乾してゐるのを目撃した者があつたら、——その人は確かに思はず識らず恐怖の念を覺えたことであらう。夜になる。獸脂の蠟燭が卓子のうへにぼんやり點る。チュルトプハートノフはあちこちと隅から隅まで歩くことはやめて、顔を眞赤にして坐りこんだ。眼はどんよりと曇つてゐる。彼はこの眼を或ひは床の上におとし、或ひは眞暗な窓にじつと振り向ける。立ちあがると、火酒を注いで、ぐつと煽つたが、また腰をおろし、ある一點に眼を注いで、身じろきだにもしない、——ただ息づかひが激しくなり、顔はいよいよ赤くなるばかりだ。どうやら彼の胸に或る決心が熟して來たらしい。この決心は彼をどきまぎさせはしたが、だんだんとそれにも馴れて來た。今はたつた一つの考へが、執拗に、小やみなく、ひしひしと押し寄せて來る。いつも同じい影像が眼の前にいよいよはつきりと浮かんで來た。さうして亂醉の燃えるやうな力に壓されて、心の中にはいらだたしい忿恚の情が、今は残忍な感情に變り、不吉な微笑みが唇に上つて來た……。「さあ、時が來た！」と事もなげに、まるで退屈したやうな調子で言ふ、「せいせいするだらうよ！」

彼は最後の火酒を一杯のみほして、寢床のうへから、ピストルを、——あのマーシヤを撃つたピストルを取つて、弾丸をこめ、ポケットには『萬一の用意』にもと、いくつかの薬筒を収めて、既の方へ向いて行つた。

戸を開けかかると番人がそばへ駆けつけた。が、彼は「おれだ！ わからんのか？ 退け！」と、どなりつけた。番人が一寸わきへ寄ると、「行つて寝ろ！」と、またチュルトプハーノフはどなりつけた、「ここにや貴様が番をするやうなものはないんだ！ いや、珍しい代物だ、えらい寶ものだ！」彼は既に入つた。マレク・アデリ、……贖物のマレク・アデリ……贖物のマレク・アデリは敷藁の上に横になつてゐる。チュルトプハーノフは「起きろ、この薄野呂！」といひながら足蹴りにした。それから輪索を秣槽から外し馬衣を剥いで、地面に投げつけた、——やがて、おとなしい馬を仕切りの中で手荒く廻して、庭へ引き出し、庭から野原へ曳いてゆく。番人は旦那が夜中に馬勒もつけない馬を引つ張つてどこへ行くのか、さつぱり見當もつかずに、少からず驚いてゐる。訊いて見るのが——勿論、おそろしかつたのだ。さうして、ただ主人が近くの森に通ふ道の曲り角に消えてゆくまで、見送つたのであつた。

チュルトプハーノフは大股に、立ちどまることもなく、あたりを見廻すこともなく歩いて行つた。マレク・アデリ——最後までこの名で通さう——は素直に後をついて行く。その夜は實に明かるい夜で、チュルトプハーノフは前の方にぼちぼちと黒くなつて續いてゐる森のぎざぎざした輪廓も見わけることができた。彼は夜の冷氣に抱かれて、若しも……若しも、全く彼を愚かなものにした別の、もつと強い酔ひさへなかつたなら、さつき飲んだ火酒に必らず酔つてゐた筈であつた。頭は重くなり、血が咽喉や耳にすさまじく鳴つてゐる。しかも彼はしつかりした足どりで、自分の歩いてゐる方角もよく分かつてゐた。

マレク・アデリを殺さうと彼は決心した。日がな一日、彼はそのことばかり考へてゐた、……さうして今こそ、心を決めたのだ！

彼は泰然自若として……といふほどでもないが、義務の觀念に従つて事をなす人のやうに、自らを深く信じて、ひたむきに、この仕事に進んで行つた。この『狂言』も彼には極めて『たわいもないもの』に思はれた。まやかし物を無きものにすれば、直ちに、『あらゆるもの』に對して清算がつくのだ。さうして、自らの愚昧を罰し、眞のよき友の前に罪を洗ひ、世間全體（チュルトプハーノフはこの『世間全體』に少からず心を配つてゐた）に、彼を相手にふざけた眞似はできないといふことを示すことができる……。それに大事なことは、彼自らも、このまやかし物を道

づれに己が命を滅ぼさうといふのだ。何故といつて、何のためにこの先、生き永らへる必要があるのだ？ かういふ考へが、どうして彼の頭に宿つたのか、何故こんな考へが、たわいもないことに思はれたのか、——全部が全部、説明のつかないことではないにしても、やはり説明するのは容易ではない。辱かしめられて、ただ獨り、身のまはりには一人の人間もなく、金といつては銀一文なく、それに、酒に血潮を湧き立たされ、彼は今は精神錯亂に近い状態に在る。ところで、精神錯亂の人たちの盲目的な亂暴沙汰にも、常人たちの眼から見れば、自己流の論理があり権利さへもあることは疑ふ餘地もないことだ。兎にも角にも自身の権利といふものをチェルトプハーノフは全く信じ切つてゐた。彼は躊躇をしなかつた。直ちに罪あるものに對して宣告を執行しようとした、しかも自ら罪人と呼んだのは誰を指すのか解かりもしないで……。實をいへば、彼は自分が爲さうとしてゐることを殆んど反省しては見なかつたのだ。『さうだ、始末をつけにやならん。』これが自分自身に、魯かしくも、嚴然と、繰り返して言つてゐた言葉であつた、『始末をつけにやならん！』

かくて、無實の罪を着せられ、罪のない馬は、彼の後ろからおとなしく小走りについて行く……。けれど、チェルトプハーノフの胸に憐憫の情は更がない。

馬を連れ込んでゆく森の縁から程遠からぬところに、半ば若樹の繁みに蔽はれた小さな谷がづいてゐた。チェルトプハーノフはその谷に下りてゆく……。マレク・アデリはつまづいて、危なく彼の上に倒れかからうとした。

「おれを壓しつづす氣だな、この畜生！」とチェルトプハーノフは叫んで——自らを衛るかのやうに、ポケットからピストルをつかみ出した。もはや彼は殘虐な氣持にはならなかつた。ただ罪を犯す前に人を襲ふといふ特別な感情の癲癲を覺えたばかりである。が、自分の聲に驚かされた、——暗い樹枝の檐の下に、木深い谷の腐つた、むつとするやうな濕氣の中に、彼の聲が怪しく響いたのである。おまけに彼の叫び聲に應じて、何か大きな鳥がだしぬけに頭の上の木の梢で羽ばたきをした……。チェルトプハーノフは身慄ひした。まさしく彼は自分の行ひの見張役を覺えたのだ——しかし此處はどこだ？ ただ一疋の生物にも會つてはならない寂寞たる境だ……。どこへでも行け、この畜生！」と彼は口ごもつて、マレク・アデリの手綱をはなし、ピストルの臺尻で肩のあたりを厭といふほど殴りつけた。マレク・アデリは素早く向き直つて、谷を這ひあがつて……。逃げてしまつた。が、ほんの暫くの間、蹄の音が聞こえてゐた。今しも吹きおこ

つた風が、あらゆる物音を妨げ、包んでしまった。

今度はチェルトブハーノフもゆつたりと谷を攀ぢ上つて、森の縁まで辿りつき、歸りの道を歩いてゆく。彼は自分が物足りなかつた。頭や胸に感じてゐた重苦しさが、手にも足にも擴がつて行つた。歩きながらも腹が立つ。心は暗く、物足りず、飢じくはなる。誰かに侮られ、獲物を奪はれ、食べ物を奪はれたかのやうに歩いてゆく。

自殺を計りながら、妨げられて未遂に終つた人はかういふ感じを知つてゐるであらう。

不意に何かが後ろから、背中をつついた。彼は見廻した……、マレク・アデリが道の眞ん中に立つてゐる。主人の後からやつて来て、鼻面でさはつて……自分の居ることを知らせたのだ……。

「あゝ！」とチェルトブハーノフは叫んだ、「自分から、わざわざ死にに來たんだな！ そんなら、待て！」

瞬くうちに、彼はピストルをつかみ出し、撃鐵を上げる。銃口をマレク・アデリの額にあてる。發射する……。

可哀さうに、馬は横に飛び退いて、後足で起きあがり、十歩ばかり駆け出したが、急にどつかと倒れてしまつた。そして地上をのたうち廻りながら、はつはつと喘いだ……。

チェルトブハーノフは両手を耳にあてて、駆け出した。膝はぶるぶる慄へてゐる。酔ひも、怨

みも、愚かしい己惚れも——すべては立ちどころに影をひそめた。あとにはただ羞恥と醜惡の感じ、——それに意識、今度といふ今度は、遂に自分をも殺してしまつたのだといふ、はつきりした意識だけが残つてゐた。

## 16

六週間ほど経つて、少年のペルフィーシカは折柄ベスソーノアの屋敷のわきを通りかかつた郡警察分署長を自分の義務と心得て、呼びとめた。

「何の用か？」と警官が訊ねた。

「どうぞ、貴方様、手前どもの宅へいらして下さい。」と少年は丁寧にお辭儀をしながら答へた、「パンテレイ・エレメーキッチがどうも死ぬおつもりなのやうでございます。それで面倒がおこらなければいいがと思ひまして。」

「なに？ 死ぬ？」

「さやうでございますよ。最初は毎日、火酒をおやりなされましたが、今では床に就きなすつて、まるで早や、お瘦せんになりましたの。もう、なんにも譯が分からんやうな鹽梅でして。まるで口がきけませんので。」

警部は馬車から出て、「どうぢや、少くとも坊さんのところへは行つてあるんぢやらうの？ 且那は懺悔はしたか？ 聖餐は受けたか？」

「いいえ、まだでございます。」

警部は顔をしかめた。

「それあ、お前、一體どうしたといふんだ、え？ そんなことつてあるものか、——あ？ お前はその位のことを知らんのか……この責任が重大だからあは、……あ？」

「そりあもつ、一昨日もお訊ね申したんで、怖ぢ氣づいた少年があとを引きとる、『お坊さんのところへ、パンテレイ・エレメーキッチ、一走り行つて参りませうか？』つて申しましてね。すると、『黙れ、この馬鹿野郎。自分の用事だけすりやいいんだ。』と、かう仰つしやるんです。けんど、今日になつて話しかけて見ますと、——且那様は私を見なすつて、鬚を一寸うごかしなさるばかりで。」

「それで火酒はたくさん飲んだのか？」と警部は訊ねる。

「えらう澤山！ ところで、どうぞ、貴方様、且那様のお部屋までおいでをいただきたいもので。」

「それぢや、案内せい！」と警部は不平がましくいつて、ペルフィーシカの後をついて行つた。

驚くべき光景が彼を待ち受けてゐた。

濕つぽく暗い裏部屋の馬衣で包んだ見すばらしい寢臺のうへに、枕のかはりに聳だつた黒い無袖外套をあててチュルトプハーノフが寝てゐる。今は蒼ざめてゐるのではなく、死人に見られるやうな黄ばんだ緑いろをして、眼は青光る臉の下に落ち窪み、蓬々とのびた口髭のうへに、鼻は細く尖つて、しかもまだ赤らみを帯びてゐる。胸に薬筒さしのついた、いつもながらの袖無しを着て、チエルケス風のだぶだぶの、青いズボンをはいて寝てゐる。上の方の眞赤な毛皮の帽子が、額を肩ぎはまで隠してゐる。片方の手にチュルトプハーノフは獵に使ふ太鞭をもつて、片方の手には刺繡のしてある煙草入れ、——あのマーシャの最後の贈り物をもつてゐた。寢臺のわきの卓子の上には空になつた酒の壺が立つて居り、寢床の頭の方には二枚の水彩畫がピンで壁にとめてある。一枚は打ち見たところ、ギターを手にした肥つた男をあらはしてあるが——恐らくは、ネドピュースキンであらう。もう一枚には馬を飛ばしてゐる騎手が描かれてゐた……。馬は、子供らが壁や塀に樂書する奇しげな動物に似てゐるが、念入りに墨で影をつけた圓い斑点、騎手の胸の薬筒さし、長靴の尖つた指先、おびただしい口髭などを見れば疑ひを容れる餘地がない、即ち、この繪はパンテレイ・エレメーキッチがマレク・アデリに跨がつてゐるところを描いたつもりなのだ。

呆れた警部はどういふ目論見をしたらよいか分からなかつた。死のやうな静けさが部屋に溢れてゐる。「何だ、こりやもう死んでる！」と心の中では思つたが、聲を張りあげて呼びかけた、「パンテレイ・エレメーキッチ！ あゝ、パンテレイ・エレメーキッチ！」

そのとき、大へんなことが持ち上つた。チェルトプハーノフの眼がしづかに開いて、光りのない瞳が最初は右から左へ、やがて左から右へ動いて、來客のところまでびたりと止まつて、彼を見たのだ、……何ものかが兩の眼のぼんやりした白晴しろみの中にちらちらして、視線のやうなものが白晴の中にあらはれた。青味がかつた唇が次第次第に離れて、今は全く柩の中からも洩れるやうな、嘎れた聲が聞こえて來た。

「親代々の貴族、パンテレイ・エレメーキッチが死にかかつてゐるんだ。邪魔をするのは何處の何奴だ？——俺は借りもなければ貸しもない……、放つておいてくれ、みんな！ 行つてくれ！」

太鞭を持つた手を上げようとした、……が、駄目だつた！ 唇がまた引つついて、眼は瞑ぢられた、——そして前のやうにチェルトプハーノフは死んだ蛙のやうに身を伸ばし、蹠を引き寄せ、佷びしい寢室のうへに横たはつた。

「死んだ時には知らしてくれ、」と警部は部屋を出がけにペルファイーシカにささやいた、「それ

から、もう坊さんと呼びにやつてもいいと思ふが。法式しつぱりは守らにやいかんぞ、聖油せいじゆもしてやつて。」

ペルファイーシカはその日、坊さんを頼みに行つた。そして翌る朝は警部のところへ報せに行つた。パンテレイ・エレメーキッチがその晩、亡くなつたのである。

葬式むすびのとき、彼の柩を見送つたのは、少年のペルファイーシカとモーシエル・レーバとであつた。チェルトプハーノフが亡くなつたといふ噂が、どこをどうしてか猶太人の耳に入つたのである、——そこで彼は恩人に對する最後の義務として、その葬儀に會することを怠りはしなかつたのである。

生まいき神がみ様さま

水き忍苦のわが郷國よ、——  
あ、露西亞の民の國！

——フヨードル・チュツチエフ

佛蘭西の諺に『乾いた漁師と濡れた獵人は見るも哀れだ。』といふのがある。私は未だ曾て漁に特別の興味をもつたことがないので、晴れた好い天氣の日に、漁師の氣持がどんなものか、また天氣の悪い日に、漁がたくさんあつたといふ楽しみが、どの程度まで濡れてゐる不愉快さに打ち克つものか、とんと見當がつかない。然しながら獵人にとつて雨といふやつは、まことに災難である。丁度この災難にエルモライと私は、ビエーレフ郡へ松鷄まきどりを撃ちに行つた時に出つくはした。——夜の明け際から雨はちつとも止まない。雨除けの方法は仕つくしてしまつた！ 護謨まもびきの合羽を頭からすつぽり被つて、雨の滴をできるだけ避けようと、樹蔭に佇んでゐた……。雨合羽が射撃の邪魔になることは先づよいとしても、甚だ無駄にも水を透し、それに樹の下へは、

たしかに初めのうちは、雨の滴も落ちて來ないと思はれたが、やがて葉のうへにたまつた雨水が、急にあふれ出して、それが雨樋から落ちるやうに、枝から降りかかつて來た。冷たい水がネクタイの下へ入りこんで、脊椎せきせきを傳つて流れる……。これはエルモライがいつた通り、『もうよくよくのこと』であつた！「いや、ピョートル・ペトロキッチ」と彼はたうとう叫び出した、「こんなぢや駄目だ……。今日は獵は出來ましねえ。犬の鼻は濡れて利かなくなるし、鐵砲へは火がつかず……。えい！ 縁起が悪い！」

「一體、どうしたらいいだらう？」

「まあその何です、アレクセーエフカへ參りやんせう。旦那あ、御存じねえかも知んねけど、あそこや農園がありましたな、——旦那のおふくろ様が持つてらつしやるんで、ここから八露里ハルリほどあります。今夜はあそこへ泊まつて、そして明日……」

「ここへまた引つ歸すのか？」

「いんえ、ここへぢやありませんねえ……。アレクセーエフカの向ふに知つてる所があるんです……、松鷄まきどりにや、ここよりあ、ずぶん好いでして！」

私はこの忠實なる伴侶つぱいに、それならば何故まつすぐそこへ連れて行かなかつたのかと突き込んで訊ねはしなかつた。そしてその日、二人は母の農園に辿り着いた。正直にいふと、そんな農園



のあつたことは今まで夢にも知らなかつたのである。行つて見ると、この農園には小さな離れが附いてゐて、かなり古くはあつたが、今まで人が住んでゐなかつたので綺麗であつた。ここに私は極めて静かな一夜を過ごした。

翌る日は大へん早く眼をさました。陽は今しがた出たばかりで、空には一きれの雲もなく、あたりは一きは強い光りに輝いてゐた、昨日の夕立の名残に、新鮮な朝の光りが照り添うて。——小馬車の支度をして貰つてゐる間、嘗ては果樹園であつたが今は荒れ果ててゐる小さな庭園へ私はぶらぶらと出かけて行つた。離れはその庭園の香りの高い、みづみづしい繁みに四方八方から取り圍まれてゐる。あゝ、外氣の中にあると、どんなに爽やかであつたらう。晴れた空には雲雀が囀つて、鈴のやうな囀りごゑは銀のいろの硝子珠のやうに降つて来る！ 翼のうへには、きつと露の滴を載せて持つて行つたに違ひない。その歌ごゑは露に濡らされたやうに思はれる。私は帽子さへも脱いで、快よく、胸いつばいに呼吸をした……。深くない谿の斜面の籬のすぐ傍に蜜蜂の巢が見える。芝草や蕁麻の壁のやうに密生して續いてゐる間を、蛇のやうにうねつて狭い徑がそこに通ひ、その草のうへには、どこから種子が来たものか、暗緑色の大麻の尖つた莖が突き出てゐる。

この徑に沿つてゆくほどに、私は蜜蜂の巢のところへ来た。巢とならんで、細い枝を編んでつ

くつた納屋、いはゆる「圍ひ」が立つてゐる。冬は蜂の巢をこの中へ入れて置くのである。半ば開いてゐる戸口を覗きこむと、中は眞暗で、しんとして、乾き切つてゐて、薄荷と蜂蜜草の匂ひがする。隅の方には腰掛が取りつけられてあつて、その上に毛布にくるまつて、何か小さなものがゐる……。私はそこを立ち去らうとした……。

「旦那様、あの、旦那様！ ピョートル・ベトロキッチ様」といふ微かな、弱々しい、ゆつたりとして、沼地の莎のそよぎのやうに覆れた聲が聞こえて来た。

私は立ちどまつた。

「ピョートル・ベトロキッチ様！ どうぞ、お入り下さいまし！」と、その聲がまたいふ。

聲はさきに私の眼にとまつた腰掛のあたりから聞こえて来たのだ。

私は近づいて見て、——あまりのことに暫しは言葉も出なかつた。私の前には生きて人間が横になつてゐたのだ。しかし、それは何ものであつたか？

頭はすっかり瘦せ衰へて、ただ一様に青銅色をしてゐた。まるでそのむかしに描かれた聖像のやうであつた。細い鼻はナイフの刃のやうに尖り、唇は殆んど見わけがつかず、ただ齒と眼だけが白く見える。頭巾の下からは黄色い髪の毛が、あらあらと纏れて、額のうちへに食み出てゐる。毛布が褶をなしかかつてゐる額のところには、小枝のやうな指をゆつくりと繰りながら、同じ

やうに青銅色をした小さな手が動いてゐる。私はなほじつと彼女に見入るのであつた。顔はただ醜くないばかりではなく、美しくさへもあつた、——が、何とはなしに怖ろしく、この世ならぬもののやうに思はれた。その顔が私に怖ろしく思はれたのは、その顔に、金屬のやうな頬のうへに、——つとめても……つとめても弛まない微笑が見えてゐたからであつた。

「おわかりになりませんか、旦那様？」またしても幽かな聲がささいた。その聲は殆んど動かかぬかたに思はれる唇から洩れいづるもののやうであつた。「無理もございません！ わたし、ルケリヤでございます、……あの、覚えていらつしやいますか、スパッスエのお母様のところへ輪踊りの音頭取をいたして居りましたの……覚えていらつしやいますか、わたしはまた合唱の音頭取でもございましたの？」

「ルケリヤ！」と私は叫んだ、「あれがお前だつたのか？ ほんたうに？」

「わたし、さうでございましたの、旦那様。わたし、わたし、ルケリヤでございます。」

私は何といつていいかわからなかつた。私は明かるい、死んだやうな眼をして、じつと私を見つめるこの暗い微動だにもせぬ顔に、まるで氣が遠くなつたかの様に見入るのであつた。あり得べきことであらうか？ この木乃伊が——あの背の高い、よく肥えた、色の白い、頬の紅い——しよつちゆう笑つたり、踊つたり、歌つたりしてゐた——召使のなかで一番の美人であつたルケ

リヤだとは！ ルケリヤ、あの利口なルケリヤ、村中の若い者が、みなその後を追ひ廻したルケリヤ、私自身——十六の少年であつた私自身が、ひそかに溜息を洩らしたあのルケリヤだとは！ 「何をいふんだ、ルケリヤ、」と私はやうやくのことのでいつた、「一體、おまへはどうしたといふんだ？」

「それはそれは辛い目にあひましたの！ けど、旦那様、お厭でも、わたしの身の上話を聞いてやつて下さいまし、その小さな桶へお掛け下さいませ、——もつと近くへ、さもないと、お聞きとりになれませんから……わたし、この頃はあまり聲が出ませんの！……でもまあ、お目にかかれて嬉しうございますわ！ どうしてこのアレクサーエフカなんぞへいらしたんです？」

ルケリヤは極めて静かに、弱々しい聲ではあるが、息もつかずに話をした。

「獵師のエルモライがこつちへ連れて來たんだ。でも、それより話が聞きたい……」

「わたしの難儀したことをお話するんですございますか？——それはお話いたしませうとも、旦那様。もうだいたいぶ前になりますけど、六年か七年前のことでございます。その頃、やつと私は、ワシーリイ・ポリヤークフと結婚の約束をしたばかりでございます。あの、覚えていらつしやいますか、容姿のよい、捲毛の男でして、未だ旦那様のお母様のところへ食事方をして居りまし

た？ けどあの頃、貴方はもう田舎にはいらつしやいませんでしたね、モスクワへ學問をしにいまして。私とワシーリイは本當に愛し合つて居りました。私は一時もあの人のことを忘れませんでした。それで事の起こりましたのは、春のことです。して、ある晩のこと……もう夜明けに間もないのに……どうしても眠れないのです。庭には夜うぐひすが、ほんたうに惚々するやうな聲で鳴いて居りましてね……堪らなくなつて私は起きあがつて、踏段のところまで聞きに出てしまひました。夜うぐひすは、ただもう鳴きつづけるのでございます……、すると、ふつと誰かがワーシヤの聲で私を呼んだやうな氣がいたしました、やさしい聲で『ルーシヤ！』と呼ぶのでございます……。私はふり返つて見ました、けど、きつと眼が覺めておなかつたせみでございませう、私は急に一番うへの段から足をふみはづして、まつすぐに下へ落ちてしまひました、——そしてひどく地面にからだを打つたのでございます！ ですけど、大した怪我はないと思つて居りました、すぐに起きあがつて自分の部屋へ歸れたくらゐでしたものね……。ただ何か内の方で……お腹なかの中で、ちぎれたものがあるやうに思ひました、……息をつかせて下さいまし……ほんの一寸……旦那様。」

ルケリヤは口を噤んだ。私は驚いて彼女を見た。私が殊に驚かされたのは、殆んど楽しさうに、「あゝ」と溜息ひとつ洩らさずに、一向に不平もこぼさず、同情を求めるといふ風もなしに話を

したことであつた。

「そのことがあつてからといふもの、」ルケリヤは話をつづけた、「すつかり瘦せ衰へはじめましてね。身體は黒くなつて來ますし、歩くのが大儀になつて來るし、それから、全く兩足が利かないやうになりましたの。立つことも坐ることもできませんので、始終、横になつてゐなければならなくなりました。食べたくもないし、飲みたくもなし、だんだん悪くなるばかりでした。奥様は御親切に、お醫者にも見せて下さいまして、病院へもやつて下さいました。ですけど、やはり良くなれません。それにお醫者様は一人として、私の病氣がどんな病氣か言ひきることさへできなかつたのでした。それはもうできるだけのことは仕盡して下さいました。焼饅やぎんで背中を焼いたり、氷で冷やしたり——それでも何の効き目もございません。私はたうとう身體からだが骨のやうに固くなつてしまひました……。さういへば、お醫者様方も、もう療治の仕様がないと、匙を投げておしまひになりますし、お邸に片輪者をお置きになつても仕方がございませんので、……まあ、それでここへ送られて參りましたの——ここには身寄の者も居りますので。まあ、さういふ譯で御覽の通りの暮らしをして居りますのです。」

ルケリヤはまた黙りこんだ。そして、また無理に笑つて見せようとした。

「しかし、これはあんまりひどいな、お前ん所は！」と私は叫んだ、……さうして、そのさき

何と付け加へたらよいのか分からなかつたので、「それぢや、ワシーリイ・ポリャーコフはどうなのか？」と訊いて見た。これは甚だ愚劣な質問であつた。

ちよつとルケリヤは眼をそらした。

「ポリャーコフがどうですつて？——あの人は悲しんでくれました、少しは悲しんでくれました、——けど、ほかのひと、グリーンノエから来た娘と結婚してしまひましたの。グリーンノエを御存じでございませう？　ここからは、そんなに遠くはございませぬ。娘はアグラフィエーナと申しました。あの人は、それは私を可愛がつてくれました、——けれど、若い身空のことですし、——いつまで獨りで居るわけにも参りませんものね。といつて、私がどんな配偶つれづれになれませう？　でも、あの人はきれいな、氣だての好い嫁御を探しあてて、今では子供もございますの、あの人は、こちらのお隣りで執事をして居りますが、貴方のお母様が身許の保證をつけて暇をおやりになつたものですから、おかげで仲々よくやつてゐるんでございますよ。」

「ぢや、かうして、しよつちゆう寢てばかりゐるのか？」と私はまた訊いて見た。

「はい、旦那様、もう七年もかうして寢て居りますの。夏はこの小舎の中に寢て居りますが、寒くなりますと、湯殿の控間ひかまへ移してくれまますので、あちらに寢て居ります。」

「誰が看病してくれる？　世話してくれる人があるのかい？」

「ええ、やつぱりこちらにも親切なの方がございましてね。私はここでも放つては置かれませぬの。それに、それほど皆さまのお世話にならないでも済むのでございます。食べ物といつては、碌なものを食べはいたしません、水はその水差にありますし、これには、いつも用意して、きれいな泉水きみづを入れて置いて置ひます。水差へは自分で手が届きますし、まだ片方の手は利きますものですから。え、ここに小さい娘がゐましてね、孤し見なんですけれど、時々見に来てくれます、有難いことに。たつた今しがたまでここに居りましたが……。お遣ひではございませぬでしたかしら？　ほんとに綺麗な、色の白い子で。その子が花を持つて来てくれますの。私はそれは好きなんですものね、花が。こちらには庭の花はありません、——前にはあつたのですけれど、今はもう根が絶えてしまひました。でも野の花も良いものでございませぬ。庭の花よりか、ずつと香りがよいものです。あの鈴蘭なんか……。何よりもいい匂ひがいたしますわ！」

「それで、可哀さうに、ルケリヤ、お前は退屈だとも、氣味わるいとも思はないのか？」

「だつて仕様がなぢやございませぬか？　わたし、嘘を申すのは厭でございますから申しませぬが——最初は、ずゐぶん大儀でした。ですけど、後にはだんだんと慣れて来て、ずつと辛抱強くなりまして——もう何とも思ひませぬ。他所様よそさまには、もつと悪い方もございますからね。」

「それは又どういふことなんだ？」

「でも雨風を凌ぐところもない人もありますわ！ さうかと思ふと、目の見えない人や耳の聞こえない人もあるし、私はお蔭様で眼もはつきりして居りますし、何でも、何でも聞こえますものね。土龍が地面の下へ穴を掘つて入れれば、——それさへ聞こえます。それに、どんな匂ひでも、たとへどんなに幽かな匂ひでもわかります！ 畑の薔薇や、お庭の菩提樹に花が咲けば——聞かなくても分かるくらゐで、私が一番さきに知るのでございますよ。とにかくそちらの方から風が少しでも吹いて参りますればね。いいえ、なんで神様を恨むことがございませう？ 私よりもずつと悪い人がたくさん居りますのにね。ここなでございませうよ。達者な方はよく罪に陥ちやすいのでございますが、私はもう罪には縁がなくなりました。ついこの間、お坊さまのアレクセイ神父様が聖登を授けようとなすつて、その節おつしやいますのには『お前さんは懺悔をするがものはない、かうしてゐては罪も犯せまいの？』つて。ですけど、わたしはお答へしました、『心中の罪はどうしたものでございませう？』すると『まあ、それは大した罪ではないよ。』とおつしやつて、お笑ひなさいましてね。」

「ではございますが、私はそんなに心中の罪も犯しては居りませんでせうよ。」と、ルケリヤは續けた、「何故と申して、物事を考へたり、わけても昔のことを思ひ出したりしないやうにと、自分で慣らして参りましたものね。ですから月日は一そう早く経つてしまひましてね。」

白状すると私は全く驚いてしまつた。「ルケリヤ、おまへは始終獨りでゐるのに、どうして考へ事が頭に浮かばないやうにできるんだ？」それとも何時も眠つてゐるのか？」

「お、いいえ、且那樣！ いつも眠れるとばかりは参りません。大した痛みはないとはいふものの、身體の心や骨が痛みましてね、それで、思ふやうに眠れないのでございます、ほんとに……。けれど、まあ、かうして此處に獨りで横になつて居ります。かうして居りまして何も考へません。ただ生きてゐて、息をついてゐることを感じますばかりで、そのことが精々なでございませうよ。見たり聞いたりはいたします。蜜蜂が巢の中でぶんぶん唸つてゐたり、鳩が屋根の上にとまつてくうくういつてゐたり、雌鶏が雛をつれて麵麩などをつつきに出て來たり、雀が飛び込んで來たり、蝶が舞ひ込んだり——こんなことがとても私には氣持がいいのです。一昨年はその向ふの隅へ燕までが巢をかけまして、子どもを孵しました。それはそれは面白うございましたよ！ 一羽が巢に飛び歸つて、すり寄つて雛に餌をやると、また飛んで行つてしまひます。それからまた見ると、他のがもう入れかはつてゐます。どうかしますと開いてる戸口の傍を通つたばかりで、飛び込まないで行つてしまふことがございます。すると子どもが直ぐにちいちい鳴いて、嘴をあけてゐます……。私は翌る年も來るのを待つてゐましたのに、聞けばこちらの獵師が鐵砲で撃つてしまつたさうでございます。あんなものを獲つたつて何になりませう？ 燕なんか大き

さは甲蟲と同じくらゐなのですものね……。何てあなたがたは意地悪なんぞございませう、獵をなさる方は！」

「僕は燕なんか撃たないよ。」と私は急いで言つた。

「でも一度、」とルケリヤはまた始めた、「それは可笑しいことがございましたよ！ 兎が飛び込んで来ましてね、ほんとに！ きつと、犬にでも追はれてたのでございませう。とにかく戸口から轉げ込むやうに入つて来ましたの！……すぐ傍へうづくまつて、——ずるぶん永いこと坐つて居りました。始終、鼻を動かして、鬚をびくびくさせましてね——それこそ軍人さんか何ぞのやうに！ そして私の方を見るのです。多分、私が怖いものでないといふことが分かつたのでせう。たうとう立ちあがつて、戸のところまで跳ねて行つて、敷居の上から、あたりを見廻しました、——その様子といつたらどうでせう！ それは可笑しかつたのですよ！」

面白くはないか……とでもいふやうにルケリヤは私の方に眼を向けた。私は相手の氣に入るやうに、ちよつと笑つた。ルケリヤは渴いた唇を咬んだ。

「それで冬になりますと、どうしても餘計に悪くなるのでございませう、暗いものですからね、蠟燭を點すのも惨めですし、それに、つけたつて何になりませう？ 読み書きだけは知つてますし、讀むのも何時も好きですけれど、何を讀みませう！ ここには本など一冊もございませう。」

よしあつたとしても、どうしてそれを持つてゐることができませう、本など？ 氣晴らしにといつてアレクセイ神父さんが曆を持つて来て下さつたのですが、何の役にも立たないとお考へになつて、また持つて行つておしまひになりました。尤も、暗いことは暗いのですけれど、始終、何か聞こえるものがあつて、蟋蟀が鳴いたり、鼠がどこかで音を立ててゐたり。こんな工合ですから、何も考へない方が——いいのでございませうよ！」

「それから私もお祈りはいたして居りますの、」ルケリヤは少し息をついて、話をつづけた、「ただ私、あまり澤山お祈りの言葉を存じませんのですけれど、さうかといつて、神様をうんざりさせるには當りませんものね？ それに何を私に願ひすることがございませう？ 私のお願ひすることは神様の方が私よりずっとよく御存じです。神様は私に十字架を授けて下さいました、——これは私を愛して下さいからでございます。ですから、もう私達はそのことをよく悟らなければなりません。で、私は『われらが父よ』、『聖なる母よ』、『惱めるものへの讃歌』などを誦んで、——それからまた何も考へないで、靜かに横になつて居ります。それで何ごともないのでございませうよ！」

二分間ほど経つた。私は沈黙を破らずに、腰掛にしてゐた狭い桶のうへに身動きもしなかつた。私の前に横たはつてゐる、この生きてゐる不幸な生物の酷しい石のやうな静けさが私にも傳はつ

て来て、何だか私も痺れたやうになつた。

「あのね、ルケリヤ、」と私はたうとう口を切つた、「お前に申し出たいことがあるんだがな。實は病院へ、町のいい病院へ連れてゆくやうに言ひつけようと思ふんだが、どうだらうな？　なあに、分かるものか、恐らくまだ癒せるだらうよ。とにかく、お前を獨りで置くわけには行かない……」

ルケリヤは微かに微かに眉を動かした。「おお、いけませんわ、且那樣、」と迷惑さうに低い聲でいふ、「病院へなぞ遣らないで下さいまし。そつとしいて下さいまし。そんなところへ行けば、却つて苦痛を増すばかりですから。もうかうなつてはどうして癒せるものですか！……さういへば、日外はお醫者がこちらへ参りまして、私を診察したいと仰つしやいました。私はどうぞ後生ですから、このままにして置いて下さいとお願ひしました。けれどもお取り上げにならなかつて！　私をあちこちへ向き直らせて手や足を捏ねまはしたり、伸ばしたりしましてね、そして仰つしやいますには、『自分は學問のために、かういふことをするんだ。自分は學問に身を捧げてゐる者だ、學者だ！　それでお前は僕に逆らふわけには行かない。何故といふに、自分は色んな功勞があつたので、勳章も貰つてゐるのだ。そしてお前たち、愚民のために盡力してゐるんだ』つて。そして無闇にそこいらを痛くして、病氣の名を言ひました、——随分ややくしい名前でした、

——そして、そのまま、行つてしまつたのです。ところが、それから丸一週間といふもの、骨といふ骨が痛みましてね。貴方は『獨りである、いつも獨りである』と申しますけれど、いつもではございませんの。人が来てくれますのでね。私はおとなしくしてゐて、——別に厄介はかけません。お百姓の娘たちが遊びに来ては、冗談を言ひ合ひますし、女の巡禮が迷ひ込んで来てはイエルサレムの話をしたり、キエフの話や聖い町々の話をしてくれますし。それに私は獨りでゐてもちつとも怖くはございません。却つてその方がいい位です、ほんとに！……ですから、且那樣、どうか私にお構ひなく、病院へなんぞ連れて行つて下さいますな、……御親切はありがたうございますけれど、ただ、どうか私にお構ひ下さいませんやうに。」

「そんなら、お前の好きなやうに、好きなやうに、ルケリヤ。僕はお前のためを思つていつて見ただけなんだから……」

「よく存じて居ります、且那樣、私のためを思つて下さることは。さうですわ、且那樣、けれど誰が他人を助けるなんてことができるものでございませうか？　誰が他人の心の底まで立ち入れるものでございませうか？　人は自分で自分の始末をして行かなきゃなりません！　まさかとお思ひになるでせうが、——私も時をりは、たつた獨りで寝んでゐて、……何だか世の中に私ひとりだけが生きてゐるやうな氣がします。たつた獨り——私だけが生きてゐるやうに！　そして、

何だか勿體ないやうな気がして來ます……。私はすっかり考へ込んでしまひます、不思議なほど！」

「一體、どんなことを考へ込むんだね、ルケリヤ？」

「それは、旦那様、どうしてもお話しできませんの、説明ができませんの。それに、後になると忘れてしまふのでございましてね。何か雲のやうなものが下りて來て、それがばつと擴がるかと思ふと、気が清々して、いい心持になるのでございませぬ。ところが、それは何であつたかと申されると、さつぱり分かりませんの！ ただ若し私のそばに人が居りますと、そんなものは何もなくて、自分の不仕合はせといふことよりほかに、何ひとつ思はないだらうと、さういふ氣がするのでございます。」

ルケリヤは苦しさに溜息を洩らした。胸も、その手足と同様に自分の思ふやうにはならなかつたのである。

「旦那様は大へん私のことを氣の毒がつて下さるやうにお見受け申しますが、そんなにお氣の毒がられるにはあたりませんの。どうか、あんまり氣の毒がつて下さいますな、ほんとに！ 御安心をいただくために、一寸お話し致しますけど、どうかしますと今でも……。覚えていらつしやるでせうね、若い時分に、どんなに私が陽氣だつたか？ わたし、向ふ見ずの娘でしたわ！……」

それで、どうでしたらう？ わたし、今でも歌をうたひますのよ。」

「歌を？……おまへが？」

「ええ、歌を、古い歌を。輪踊りのや、皿占ひのや十二日節のなど、何でも歌ひますの。わたし、今でもたくさん知つてゐて、忘れないんでございます。ただ普通の踊りの歌は歌ひません。今の身分では仕方がございませんから。」

「一體、どんな風に歌ふの、……自分ひとりのために歌ふのか？」

「ええ、さうですの、聲を立てて。大きな聲は出ませんけれど、それでも人に分かるくらゐに。あの、さつきお話ししましたでせう——娘が來るつて。あれは孤し見で、よく分かる子でございませよ。それで、私はあの子に歌を教へましてね、もう四つほど覚えまして。ひよつとしたら本當になさらないでせうね？ では一寸お待ち下さいませ、直ぐにお聞かせ申しますから……」

ルケリヤは息を繼いだ……。この半ば死にかかつてゐる生物が歌を唄はうとしてゐるのだといふ考へは、思はず私のうちに恐怖を喚び起こした。しかし、私が一言もいひ出さないうちに、私の耳には、長々とのぼした、殆んど聞きとれるかそれないくらゐの、しかも清く澄んだ、しつかりした聲が響いて來た……。續いて二聲、三聲と。ルケリヤは『草場のなかで』を歌つた。彼女は化石したやうな顔のけしき一つ變へずに、眼さへ一とところに据ゑたまま歌ふのであつた。とはい



へ、このあはれな、力をこめた、細い煙のやうにふるへ勝ちな聲はたとへやうもなく哀切なひびきをもつてゐた。彼女はその魂の全部を注ぎ出さうとしたのである……。私はもう恐怖の念は感じなかつた。いひ知れぬ憐憫の情が私の胸に惻々と迫るのであつた。

「あゝ、やつぱりいけない！」と不意に言ふ、「力が續きません……。お眼にかかつた嬉しさに胸が詰まつてしまひました。」

彼女は眼を瞑ぢた。

私は彼女の小さい、冷たい指のうへに自分の手を置いた……。彼女は暫くじつと私を見てゐた、——が、間もなく古代の彫像に見るやうな、金色の睫毛におほはれた暗い臉は再び瞑ぢられてしまつた。それも暫くすると、その眼は薄暗い中で輝いた……。眼は涙に濡らされた。

私は相變らず身じろきさへもしなかつた。

「わたし、何ていふお馬鹿でございませうね！」とルケリヤは思ひもよらぬ力のある聲で不意に言つて、眼を大きく見開き、瞬きをして涙を散らさうとした、「お恥かしうございませう！ まあ、どうしたことでございませう？ こんなことつて、永らく無かつたことでございませう……。去年の春、ワーシヤ・ポリャーコフがここへ來ました時からでございませう。あの人が一緒に腰をかけて、話をしてゐました時は——何ともございませうでしたが、行つてしまはれると、私は獨

りぼつちになつて、どんなに泣きましたらう！ どうして涙などこぼしたのでせう！……けれど、私ども女なんでもものは、何でもないことに涙を流すものでございませうのね。」といつたが、「且那樣、」とルケリヤは附け加へた、「きつと貴方はハンカチをお持ちでございませう。お厭でもございませうが、ちよつと私の眼を拭いて下さいませう。」

私は急いで、望み通りにしてやつた、——さうしてハンカチをそのままルケリヤにやつた。初めのうちは辭退した。……「こんなものを戴きまして、どういたしませう？」と言つた。ハンカチはかなりお粗末なものではあつたが、きれいで白くはあつた。やがて彼女は弱々しい指でつかんで、もう二度と放さうとはしなかつた。二人のゐる暗がりには馴れて來たので、私は女の容貌を、はつきりと見わけることができた。その顔のプロソズの下に、ほんのり見える淡い紅らみさへも認めることができた。少くとも私にはさういふ氣がしたのであるが、その顔のうちに、美はしい昔の名残さへもさぐり得たのである。

「且那樣、あなたは眠れるか？」と、お訊ねになりましたね、」とルケリヤはまた話し出した、「眠るのは本當にたまさかでございませうが、眠ると、きつと夢を見るのでございませうよ、——よい夢を！ 夢の中ではいつも私、病氣ではないんでございませうよ。いつも丈夫で、それは若いんでございませうね……。たつた一つ悲しいことには、眼がさめたときに、——樂々と伸びがした

いと思ふのに、——それどころか、まるで鎖でつながれてゐるやうなのでございます。いつかは、何て不思議な夢を見たのでせう！ 若し、およろしかつたら、お話いたしませうか？ ぢや、お聞き下さいまし。氣がつくと、私は野原の真ん中に立つてゐました。あたりにはライ麥、それは背の高い金色に熟れたライ麥がございましてね！……私は楮い犬を連れて居りました。それが意地の悪い、それは意地の悪い犬でして、しよつちゆう私に噛みつかう、噛みつかうとするのでございませう。私はそれから手に鎌を持つて居りました。それもただの鎌ではなくて、あのお月様が鎌のやうになることがございますね、あれにそっくりなのでございます。私はこのお月様で、このライ麥をそつくり刈り取らなければならぬのでした。けれど私はすつかり疲れ切つて居りました。月は眼をくらくらさせますし、それに何だか妙にだるくなりましたね。ところが私のまはりには矢車菊が、それは大きい矢車菊が生えて居りましたね！ それがみんな私の方へ頭を向けて居りました。私はこの矢車菊を摘んでやらうと思つたのです。ワ―シャが来る約束をしてゐたのですから、まづ花環をこしらへようと思つたのです。麥を刈るのはそれからでも遅くはあるまい……。私は矢車菊を摘み始めました。けれど、いくらしても、みんな指の間から何處かへ消えてしまふのです。どんなにしても花環が編めない。そのうちに誰かが傍へやつて来る。すぐ傍までやつてくる音がしまして、『ルーシャ！ ルーシャ！』と呼ぶのでございます、……あゝ、残念

だ、たうとう間に合はなかつた！ と、私は考へました。でも、どつちにしたつて同じことだと思つて、私は矢車菊のかはりに、お月様を頭のうへに載せました。頭飾りのやうにお月様を載せたのでございますよ。すると急に身體ぢゆうが光り出して、あたり一面が明るくなりました。ふと見ると、——穂のうへを傳つて足早にやつて来る、——それはワ―シャではなくて、紛れもない基督様なのでございます！ どうしてそれが基督様とわかつたのか、それは言へませんの、……繪に書いてあるやうな基督様とは違ひますけれど、やつぱりあの方なのです。髯のない、背の高い、若い御方で、眞白づくめにしていらいやいました——帯だけは金色でございました。そして私の方へ手をさしのべて仰つしやいますには、『怖れなくともよい、着飾つた可愛い嫁御、儂の後について来るがよい。お前は天國の輪踊りの音頭取になつて天國の歌を歌ふがよい。』私は思はずその御手におすがり申しました！ 犬はすぐ私の足について來ます……、ところが私は上の方に舞ひあがり始めました！ あのお方がお先に立つて……。基督様のお翼は鷗のやうに長いお翼で、空いつばいにひろがりました、——わたしはその後について參りました！ 犬はどうしても後に残らなければならなくなつてしまひました。そこで、私はこの犬が私の病氣であつたこと、天國には、もうこの犬の居どころがないのだといふことが、やうやく分かつたのでございます。」

ルケリヤは一寸の間、黙りこんだ。

「それからもつと夢を見ましたの、」とまた話し出した、「それは、ひよつとすると幻だつたかもわかりませんが——それはもう、しかと分かりません。私はこの小舎の中に寝てゐるやうに思ひました。すると亡くなつた両親が参りましたの、お父さんとお母さんと、私にむかつて丁寧に、お辭儀を致しましたが、お二人とも何とも仰つしやらないでございませう。ですから『お父さん、お母さん、私にお辭儀をなさるんですか?』と訊きましたの。すると『實はお前がこの世で大へんな苦しみをしてゐる、そのためにお前は自分の魂を和らげただけでなく、私たちの大きな重荷をも卸してくれた。だから私たちはあの世でも大へん氣樂なのだよ。お前はもう自分の罪とは縁が切れてしまつて、今では私たちの罪ほろぼしをしてゐて呉れるのだ。』と申しました。そしてこれだけのことを言つてしまふと、両親はまたお辭儀をして、——ふつつりと見えなくなつて、見えるのは壁ばかりになりました。それから私は、このことがどんなことだつたのか、不思議になりました。懺悔のときにお坊様にもお話いたしました。尤も、お坊様は、それは幻ではあるまい、幻といふものは坊さんにだけ見えるものだからと仰つしやいました。」

「もう一つこんな夢を見たのでございませうよ、」とルケリヤは話し續けた、「何でも私は往還の柳の下に腰をおろしてゐましたの。ぐるりを削つた小さな杖を持つて、頭陀袋を肩にかけて、手

帕で頭をつつんで——まるで巡禮の女のやうなんでございませう。そして私はどこか遠い遠い所へ巡禮して行かなければならぬのでした。巡禮はしよつちゆう私の側を通つてゐます。誰もが疲れ切つた顔をして、みんな、お互ひによく似てゐる顔なのです。すると、その人たちの間をぐるぐる廻つてゐる一人の女の人がゐるのです。他の人より頭だけくらみ背が高く、着てゐる着物は私たちの露西亞風ではないらしく、妙に變つてゐました。顔も妙な顔で、瘦せ衰へた嚴い顔でした。そして誰もがみんな傍へよけて行くのです。その人は急に振り返つて、傍目もふらずに私の方へやつて來ました。じつと立ちどまつて私を見てゐます。この眼は鷹のやうで、黄色くて、大きくて、とても澄んでゐるのでございませう。『どなたですか?』と訊きますと、その人は『わたしはお前の死神だよ。』と申しました。私はちつとも驚くどころではなく、かへつて嬉しくて嬉しくてたまらないので、十字を切りました! すると、私の死神だといふ女の人の申しますには『ルケリヤ、私はお前が可哀さうだけど——連れて行けない、——さよなら!』つて。あゝ! 私はどんなに悲しうございましたらう!……『連れてつて下さいまし、あなた、どうか連れてつて!』と申しますと、私の死神は私の方を振り向いて、話をしはじめました……。わたしの死期、を知らせて下さるのだとは分かりましたが、はつきりしない、譯のわからない言葉でした……。『ベトローフキが濟んでから』つて……。私はこの言葉を聞いて眼が覺めたのでございませう……。

私がかういふ不思議な夢を見るんでございますよ！」  
ルケリヤは眼を上の方へ向けて……深い感慨に沈んだ……。

「ただ悲しいことには、一週間の間、ちつとも眠れないで暮らすことがございます。去年ある奥方がお見えになりました、私を御覧になつて、睡眠薬を一罎下さいました。そして一度に十滴づつ飲むやうにと教へて下さいました。それが大へんよく効きまして、よく眠れたものでしたが、もうその硝子の罎は疾うに空になつてしまひました……。御存じでいらつしやいませうか、あれはどんなお薬で、どうしたら求められるものでございませう？」

訪ねて来た婦人はルケリヤに阿片をやつたものに相違ない。私はさういふ薬を一罎やることを約束したが、今更ながら彼女の辛抱づよいのに驚嘆の聲をあげない譯には行かなかつた。

「まあ、且那樣！」と彼女は言ひ返した。「あなたはどうしてそんなことを？　これが辛抱などどうしていはれませう？　あのそれ、聖シメオンね、あの方の辛抱づよいのは大へんなものでございました。三十年の間、柱のうへにお立ちになり通したのでございますものね！　そのほか或る聖人の方は自分から胸のところまで土の中へ埋まつてゐると、蟻が顔を食べたのでございますね、……それから、これは或る先生が私に聞かせて下さつたお話でございますが、或る國があつて、その國を土耳其人が侵略いたしました。それで國中の人を一人残らず苦しめたり、殺

したりして住民の方ではできるだけのことをいたしました。どんなにしても敵から免れることはできませんでした。すると、その國の人の中に聖女が現はれて、大きな剣を取つて、ニブード(おほそ)もある甲冑をつけ、敵の土耳其人に對つて出陣いたしました。そして敵を悉く海の向ふへ逐ひやつたと申します。ですが、敵を追ひ拂つてしまふと、處女は『今は私を火刑にして下さい、國民のために火刑になつて死ぬといふのが私の誓ひであつたのだから』と敵に對つて申しました。——そこで、土耳其人は處女を捕へて火刑にしました。この時からその國民は永久に自由になつたさうです！　これこそ本當に大手柄でございますね！　それなのに私はどうでございませう！」

私はどこをどうしてジャンヌ・ダルクの物語が、この女の耳に入つたのかと、我ながら驚いた。そして暫く黙つてゐた後で、ルケリヤにその處女は年齢はいくつであつたかと訊いて見た。

「二十八か……九……三十にはなりません。でも、なんで年齢など勘定なさいますの！　私はまだお話することがございます……」

ルケリヤは不意にむせたやうな咳をして、溜息をついた。

「おまへ、あんまり話をするから、」と私は言つた、「それがいけないんだらう。」

「さうでございます、」と、やつと聞きとれるくらゐの聲でささやいた、「もうお話をやめた方がよいのです。でも、そんなこと構ひませんわ！　今にあなたが行つておしまひになれば、思ふ